
掃天のストラトス

支離滅裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掃天のストラトス

【Nコード】

N0278P

【作者名】

支離滅裂

【あらすじ】

世界中に現れる、天窓と呼ばれる現象。異世界を垣間見る事が出来る、異常な空間。それが、僕にとってなんなのか。ある日、天窓に映し出された『彼女』が、僕の運命を捻じ曲げる。

1・天窓

僕が僕という自分を認識し始めた頃、それはこの世の中に現れ始めたという。

だけど、それが初めて現れたのがいつだったのか、僕をはじめとして誰もはっきりと覚えていない。

ただ、この世界に生きる人々全てが、その世界を垣間見始めたのを。この世に在らざる者たちを、この世に在らざる異様な光景を映し出す、それを。

想像を絶する嶮浪を。

荒れ狂う竜巻の群れを。

灼熱の二つの太陽に焼かれる大地を。

凄まじい吹雪の中、聳え立つ峻嶺を。

その過酷な世界をもものともせず生きる、異形の生命達と、生い茂る奇怪な樹木。

そして、その中でもひとときわ眼を引く者達。

陽光に煌く金髪と、凍りつくような銀の瞳を持ち、純白の眩しい翼を背に天を舞う、御使いの姿を。

それらを誰もが目にし、誰もが口の端に乗せた。

まるで目の前に存在するようできて、だがしかし、触れえざるもの。日々の営みの中に忽然と現れ、そしていつの間にか消えうせる。

人々にとってそれは最早日常と化し、現れることも消えうせることもそう驚くべき事ではなくなってきていた。

異世界を垣間見る事が出来るそれを。

異形の者達の生命の瞬きを享受できるそれを。

人は「掃天の銀窓」と呼んだ。

僕らは面倒くさいから、天窓って呼んでるけども。

まだ薄明るい程度の朝の光が、部屋の窓にかかるカーテンの隙間を縫って、僕の薄く開いた視界に差し込んでくる。

枕元では、己の責任を存分に果たし終えた目覚まし時計が、いつもの様に時を刻み続けていた。

目覚まし時計は確かにその責任を果たした。

事実、僕の意識は覚醒した、はずである。

とりあえず勢い良く起き上がろうと、心の中では努力をした、のだけれど。

眠い、眠い。

凄く眠い。

なんだか眠い。

とてつもなく眠い。

やたらめったら眠い。

何故だか知らないが眠い。

や、眠いのは生物としてまだ起きちゃだめよと僕の中の本能が叫んでいるからだよきつと、うん。

なので僕は寝る事を継続することにする。

半ばまで剥ぎ取った布団を被りなおし、枕に顔を埋める。

ああ…至福。

だが僕には起きねばならぬ理由がある。

だから後5分：いや10分経ったら起きよう。

顔を洗うのと歯磨きを省略すれば、それくらいの時間は稼げるだろう。

だから僕は寝るのだ。

寝るったら寝るのである。

しかしながら、ここ最近はその僕の決意を邪魔する存在がちよくちよく発生する。

いや、ちよくちよくではないな。

こここのころほぼ毎日である。

三度の飯と同じくらいに大事なこの憩いのひと時を邪魔するのは、実のところ正体不明である。

どこから聞こえるのか、さっぱりわからない上に、すぐ耳元で聞き超えるようで居て、はるか彼方から呼ばれているようにも感じる。

正直いらつとする。

んなことを考えていると、いつものように頭の中で響き始めた。

抑揚のないあっさりとした声で、紅く明滅する光を伴って頭の中で反響する。

でも内容はさっぱりわからない。

どこの国の言葉かすら、だ。

布団の中で惰眠を貪っているにコレですよ。

眠りに集中できなくなってしまう。

耳をふさいでもまるで意味がなく、ずっと耳鳴りのように続いてくれる。

思い返せば今ほど頻繁ではないけれど、昔からこの変な声を聞いていたような気もする。

でも、半覚醒状態と言うか、二度寝を決め込もうとしているこの僕の貴重な憩いのひと時を邪魔しないで欲しいなあ。

僕はまだ寝ていたいんだから、話しかけないでくれないかなあ……って言ってもこっちの思ってることに反応してくれたためしはない。

どうせならガツンと目が覚めるような大声でも出してくれればいいのに。

だから、僕は無駄な抵抗はせずに人生の半分をこれからも共に過ごすであろうお布団さんと、惰眠を貪る努力を続けた。

毎度同じく、聞こえてくるのは唯一つだ。

内容は意味不明だけど。

まあ何か尋ねられてるって気もしないでもないんだけど、寝てると

きになに言われても、ねえ。

どうせならこう、いかにもなエロエロであはんうふんな優しいおねいさんの声とか、自分に正直になれない気の強い幼馴染とかさ。

心の琴線に触れまくりな、現実世界ではありえないお声を拝聴したいものである。

それで、出来れば画像か更に出来る事なら動画付とか、もっと出来る事なら触ったりとか触られたりとか、あーんな事やこーんな事を実行可能だったら言うことないんだけども。

てな事を考えていると、いつの間にか聞こえなくなってるし。

まあいいや、それでは本格的に二度寝再開といきたい所だったけども…どうもタイムリミットが迫って来たようで。

まったく、神様と来たら変な方向に仕事熱心なようで、僕のほんの小さな望みでさえも奪い去っていくんだよね。

まどろみの中でそんな事を考えていると、口元になにやら柔らかく生暖かい感触が生まれ、そして離れていった。

「そろそろ目を覚ませ。朝餉の時間が無くなってしまっぞ?」

そんな声が耳朵を打つと同時に一気に開け放たれたカーテンの向こうから、僕の網膜を焼きつくさんとする光が、強烈に差し込んで来た。

確かに目は覚めたけれど、魂の恋人であるマイお布団さんからこの

僕を引き剥がすことなど、生半可なことでは出来はしないのである。

ああ、出来ないっいたら出来ないのだ。

「馬鹿を言っておらずに、さっさと起きよ。遅刻して困るのはお主だけではないのだぞ？」

その声と共に、抱きしめた愛しいお布団さんは僕から引き離され、ささやかな野望はここに潰え去ってしまったのであった。

ああ、さようならお布団さん。温もりをありがとう。

「いい加減にせぬか。まったくおぬしはいつまで経っても本当に寝坊助であるな。ええ？宏一？」

そう言って、火のついていない啜え煙草をぴよぴよこと揺らし布団を小脇に抱えて仁王立ちするのは、我が姉上、野見山瞳。

僕にとって、唯一の肉親である。

微妙に変な喋り口調なのは、習っている護身術が高じて嵌ってしまった愛読書の時代小説による所が大きいらしい。

ああちなみに親達は、…えっと、もう亡くなって何年だっけ。僕が物心ついた頃には、もう既に姉さんだけしかいなかった。

残してくれたのはこの家と、形見にと身に付けている安っぽい手作りのペンダント。

わりと大きな紅い石がやけに仰々しいけれど、どう見ても何かの樹

脂を固めただけの代物です。

宝石とかだったらひと財産な大きさだが、実の所二束三文だろう。

事実、鑑定してもらいにその手のリサイクル店に行ったら、買取不可と事も無げに言われてしまいました。

売る気はそもそもなかったけどさ。

親の形見と言う付加価値がある僕らにとってのみ、大事なものだ。

実際顔もろくに覚えてないだけに、今ひとつ実感がわかないと言う親不孝っぷり全開であるので、形見くらいは身に着けているのです。

で、そんな我が家の家事全般その他諸々を一手に請け負っているのが、何を隠そうこの僕を叩き起こしてくださった先ほどの姉上様である。

既に自身の身支度は整え終えているようで、腰まであるはずの黒髪は綺麗に纏められて後頭部でお団子になって、つやつやの御髪がひと房だけゆつらりと垂れ下がっている。

バリツとしたグレーのスーツを着込んだ、女性にしては高い180cm近い長身を誇るその姿は、一流企業のオフィスで部下に叱咤激励をとばして切り盛りしていても不思議じゃないくらいである。

その上から、フリルの付いたエプロンを着けていなければ。

「はよう着替えよ。おぬしが遅刻すると、私の所にまで態タイヤミを言いに来るご苦労なやからが居るのだ」

「はいはいすみませんども。おはようございます、っと」

勢いをつけ眠気を振り切って身体を起こした僕の背後で、

「ま、それ自体はどうと言うことは無いのだが。特に実害があるでなし」

と言って啜えっぱなしだったタバコに火をつけて紫煙を吐き出し、形の良いお尻をベッドの枕元へと下ろす。

ぎしりと軋んだ音を立てたベッドよりも、はるかに柔らかそうな双丘が、ちょうど僕の視線の高さに来て、視界の片隅でその容積と弾力を自己主張してくださる。

おかげさまで毎朝僕は大変である。何が、とは言いがたいので言わないが。

親が居ない二人暮らしは何かと無用心だからと習い始めたという、剣術だか柔術だかのお陰で引き締まっている細身の身体は、なんともよい感じの柳腰というか、凄まじい勢いのふくらみと言うか何とと言うか。

って、僕に姉萌え属性はありません。念のため。

ないっただけです、ええ。

しかし、わざわざベッドに腰掛けて何をするのやらと思いきや、家事で少し荒れた指で僕の鼻をつまみ、弄び始めた。

「ひたひ」

「ほれ、目が覚めたか？毎晩毎晩遅うまで『ねとげ』とやらをしとるから寝起きが悪いのではないのか？日常生活に支障をきたすようであるなら、私は『ぷるばいだあ』とやらとの契約を解除するのに躊躇せんぞ？」

それは困る、折角かなり高レベルまで育てた上に、つい最近レアものを拾ったばかりでようやく面白くなってきた所なのに。

「申し訳ありませんでした、おねいさま。ちゃんと起きますから勘弁してください」

思いつきり平伏してみた訳だが。

自力で回線引いて、なんて出来る甲斐性は無いし、ネカフエに入り浸れるほどの小遣いは貰ってないんだから仕方が無い。

バイトしようにも、目の前のお方が『別にかまわんが、それで勉強がおろそかになるのであれば…わかってるであろうな？』とおっしゃるので、無理っ！俺の脳のキャパシティはそんなに大きくないのであるからして。

とまあ、おかげさまで眠気には止めを刺せたわけだけでも、迷惑と言いつつも毎日毎日たたき起こしてくださる他、色々と世話を焼いてくれるのでいつも助かっていますが…もうちょっとお手柔らかにお願いしたいものである。

「おはよう宏一。ほれ、とつと用意してメシを食え」

「……ふえーい。ありがと、姉さん」

のそのそと起き上がり、枕元に置いておいた形見のペンダントを首にかけ、未練たつぷりの態度で着替えを片手に部屋を出る。

さて、今日もめげずに頑張ろう。

しかし、同じ親から生まれたはずなのに、どうしてここまで寝起きの良し悪しに差が出るのかねえ。

まあ頭の出来も、容姿に関しても、段違いなんだが。

自分で思った事にちよっぴり落ち込みつつ、交換したシーツやら枕カバーやらを抱えて洗濯機の置いてある洗面所に向かう姉さん。

実にまめだよなあと感じる。

きつと僕一人で暮らしていたら、万年床になるのは火を見るよりも明らか過ぎるよなと思いつつ、何とか討ち果たした眠気にさらに追い討ちをかけて墓穴に押し込むために、ガシガシと歯を磨き、口元を洗い流すついでに顔を洗うんだが、今朝もまた僕の唇は鮮やかな紅に彩られていた。

「また…姉さんってば」

時間の余裕がなくて顔を洗い忘れたりして、何度これで笑われた事か。

「洗顔を忘れなければ言いだけの事ではないか」

いくら姉弟でも、毎朝目覚めにキスは如何なものだろうと言っても聞く耳を持つてくれないのは勘弁して欲しい。日本の風習的に考えて。

口紅を丁寧に拭いとり、キツチリと糊の効いたシャツに袖を通して適当に身だしなみを整え、いざ朝飯が待つリビングへ。

空きつ腹を抱えてリビングのドアを開けると、ご飯を山盛りにしたお茶碗を手に、啜えタバコの姉さんが待ち構えていた。

一応メシ前だから気を使っているのか、啜えたタバコには火を灯していない。

テーブルには、いまだき朝ごはんにここまで気合を入れてきちんと献立を組む家庭が、どれだけ有るのだろうかと思えるほどの料理が、整然と並んでいた。

「いただきます」

「うむ、美味しく食べてやってくれ」

手を合わせるのももどかしく茶碗と箸に手を伸ばす僕に、姉さんが微笑みながら声を返してくる。

食事の前後に戴きますとご馳走さまを言わないと、この笑顔が夜叉の表情に変わるのである。

他の生き物を糧とするのだから、感謝の気持ちは忘れてはいけないと躡けられてきたせいも、最早僕は習性と言ってもよいほどに自然と口から零れ出るのだ。

目の前に並ぶのは姉さん御手製のお惣菜である。

ほうれん草の胡麻和えにきゅうりの糠漬け、綺麗に焼き色のついた
出汁巻き玉子と塩の効いた焼き鮭。

朱塗りの箸置きの際には、軽く焙られた海苔が「さあ何処からでも
食いやがれ」といつているかの如く、僕の鼻腔を擽る香りを放つて
いる。

ツヤツヤとした光沢が目にもぶしい、炊き立てのご飯がこんもりと
盛られた茶碗を片手に、見た目だけはそれなりに格好がついている、
微妙にと言うにはいささか濃い色合いのお味噌汁が、漆塗りのおわ
んの中にさあ飲めと鎮座しているのを、軽く溜息をついて視界から
外す。

さて、それでは失礼していただきます。

手始めに軽く焦げた鮭の切り身を大きめにほぐして口へと運び、飯
を掻き込む。

近年主流の甘塩ではなく、ガツツリと塩の効いた飯の友である。起
きて間もないはずの僕の五臓六腑が、待つてましたとばかりに活動
を開始するのがわかる。

「きちんとよく噛んで食べよと何度言わせる気だ？胃に悪い、消化
に悪い、満腹感を得られるのに時間がかかると悪い事ずくめなのだ
ぞ？」

ガツガツと食べる僕に、苦笑しながら毎度毎度のご指摘を下さるお

ねいさま。

そんな事言われても、濃い目に味付けされたおかずに炊き立てご飯とくれば、口一杯に頬張った後一気に嚥下する時の咽喉をグリグリと通ってゆく感触が伴わないと、皆さん納得しないでしょう？

かくゆう姉さんだって、僕に負けないほどの勢いで食べてるくせに。

「こつ、コレはお主が中々起きぬせいで時間が押しているからではないか。そんな事はいいいからさっさとゆっくり食え」

そんな器用な食べ方、誰に出来るというのですか。それにほっぺたにご飯粒くっつけて言われても、説得力ない事この上ないです。

「ご馳走さまでしたっ！」

パンツと手を合わせて立ち上がるや、姉さんの声が背中を打つ。

「お粗末様。それはそうと、味噌汁の味はどうであつた？今日こそは中々の出来だったと思うのだが。ああ、それと食器ぐらいは自分で水につけてゆけ」

駆け出し始めて急停止、Uターンして食器を重ねて流しの方へ。

「お味噌汁、もちよつと薄いほうがいいと思うよ！」

流しに食器を放り込み、それだけ言って自室目指して階段を駆け上がる。

何故だか知らないが、毎日毎日作っている味噌汁だけが、姉さんのネックである。

濃すぎたり薄かったりで、どうにも味が安定しないのである。

他のおかずはそれこそ玄人跣の出来で、正直な所進路を誤ったんじゃないかと思うくらいに美味しいのに。

まだまだ修行が足りぬか、と呟く姉さんの声を遠くに効きながら、今日の時間割を確認して教科書を揃える。

おっと、体育もあつたんだっけか。体操服も忘れずに、っと。

さて、今日も頑張つて学校まで行くとしますかね。

平々凡々を地でゆく僕であるけれど、学校までの道程に関しては平々凡々ではすまないのである。

いや、笑い事じゃなく、実際の所。

登校するだけなのに何を大げさなと思うかもしれないが、物心ついてこつち、登校する事に通常とは比較にならないほどの徒労と言うか苦労と言っかなんと言うか。

とにかく登校時に関しては、誰に聞いてもらっても「お疲れ」と言ってもらえるだろう事請け合ひである。

忘れ物の無い事を確認しつつ玄関の扉を開き外へ出ると、朝の引き締まった空気を時間に追われた人たちが忙しなく揺らす時間帯であ

る……のだが。

道に行くのは親から貰った二本の足で歩く人たちだけ。

たまに自転車で走る人が見受けられるくらいだが、それも徒歩の人に声をかけられ押して歩き始める。

道路を行く車はどれもこれも一様に停車し、ドライバー達は苦虫を噛み潰したように苛立ちを隠さない人や、いつもの事と開き直って車に備え付けのテレビに興じていたり、果ては寝ている人までいる。遠くに見える電車の高架の上では、ぱらぱらと人影の見える車両がこれもまた停車していた。

うん、今日もまたいつものアレが、雲の切れ間に見える太陽を遮るように、霞んで見える。もう見慣れてしまった、

様々な色を含んだ、オーロラと蜃気楼とを足して二乗したような奇妙な輝き。

僕らの住む場所とは遥かに違う、まったく別の世界を覗く事が出来る、謎の現象。

空間干渉だの位相空間だのと色々言われ、様々な名称が付けられていて世間一般では「掃天の銀窓」というのが一応の通り名だが、僕らの間ではこう呼ばれていた。

空の向こう側を覗く穴、“天窓”と。

それにしてもここ数年の天窓の発生件数は異常である。

大体、発生時間帯が朝の時間だからといっても、車両の走行禁止処置までに発展するなんて、アレが出始めたころには考えられなかったというし。

「何を玄関口で呆けておる。ほれ、忘れ物じゃ。無くて困るのはお主じゃから、別に持って行かんでも構わんかの？」

そんなことを考えてたら、誰の趣味だか、唐草模様の風呂敷に包まれた四角い箱が、僕の頭の上にポフッと乗せられた。

フリフリエプロンを外した姉さんが、かつちりとした仕事モードになって外に出てきたのである。

「あ、ありがとう」

照れ隠し丸わかりの態度で、引つ手繰るようにして弁当箱を受け取り、学生力バン代わりのスポーツバッグに詰め込む。

そんな一部始終をニコニコと見つめる姉さんがさらに「ほれ、もう一つ忘れ物」と言つて、僕の頬に口付ける。

毎度毎度の事だけど、いつもながらに顔を真っ赤にして行ってきたすただけ言い残して僕は玄関から駆け出した。

家を出て少し行ったところで、僕はここ数年日課のようになって一軒の家の二階の窓を伺うという行動をとっていた。

カーテンの向こう側は既に暗く、割と早く出ているはずの僕よりも先に登校した事を物語っている。

ああ、今日もまた早く登校かあ。

部活やらなにやら色々頑張ってるんだな、きっと。

そこは、小学校の集団登校、中学に入っても暫くの間は一緒に登校していた幼馴染の暮らす部屋なのである。

今思えば、一緒に登校していたころは朝起きる事に何の苦痛も感じてなかったような気がする。

それが天窓の活動が頻繁になってきて暫くした頃から、布団から出ることが苦痛になって、毎朝声をかけてくれていた近所の子に迎えは要らないと言っちゃったんだ。

毎日毎日思い出す、心の重荷。

毎度背負いなおすのは勘弁してもらいたいトラウマなんだけど、今更関係修復ってのも何かね。

とまあ、いつもの如く負の思考の帰結に至った僕は、学校へと駆け出した。

登校する僕の姿を見咎めた周囲の人たちが、あからさまに表情を変える。

朝の時間帯、同じ方向に進む事になるのだから、さぞかし嫌だろう

なあ。

同じ制服を着た連中なんて、見間違えの無い嫌悪の表情で足早に僕との距離を開けようとする。

まあ気持ちはわからなくも無いんだ。

何故ならば、一般的には太陽を隠すが如くに空高くに現れたりする事が多く、地表近くに現れることは比較的まれのはずの天窓。

それが、不思議な事に僕の行く先々で天窓が毎朝のように立ちふさがってくれるのだ。

まるで登校を阻止するかのように。

天窓は、見る分に関しては何も問題はなく、摩訶不思議な風景や現象を楽しむにしている好事家まで居る始末である。

だが、いざ程近くにあるとなると、コレがまた困った事に触れることも近寄る事も出来ないのだ。

正確に言えば、触れようと思って近づこうとすると、前に進めなくなるんだけど。感覚が掴めなかったら、試しに石を天窓に向かって投げたと考えてみてもらいたい。

あなたが投げた石は、天窓に近づくにつれ急速に速度を落とし、暫くの間その場に滞空したあと、放物線を描く事無く、真下に落ちる事になるだろうから。

ややあって、周囲が落胆の声と共にざわめき出す。虹をかき混ぜた

ような霞がかかった、煌く光を目の前に、僕は肩を落とした。

「またかよ、いい加減にして欲しいぜまったく」

などと、聞こえるように囁かれる嫌味にも、もう慣れっこだ。

この時間帯、地表ギリギリに現れる天窓のせいで、車や電車はおろか、自転車での走行も禁止されているのである。

しかし、地表近くに現れるのなんて、世界的に見ても稀のはずなのに、そのごく稀な事が、嫌になるほど僕の周囲に起こってくれる。

コレのお陰で僕は寝起きが悪くなったといっても過言ではない。実際幼馴染とも疎遠になっちゃったわけだし、ご近所さんからは白い目で見られるしで、朝起きて外を出歩くのが嫌になるのもわかって欲しいものである。

僕のせいじゃないのに僕に責任追及の視線が注がれているのが感じられる。

決して狭いとはいえない通学路上の、そのど真ん中に異世界が浮かぶ。

シールドで中々楽しめる光景ではあるが、実生活に面倒をきたすのはいただけない。

とりあえず、しばらくの間この道は通行止めである。

しかし、重ねて言うが僕のせいじゃないはずなのに、周囲のご意見は僕がこの道を通ったせいだ、などと真しやかに語られております。

ああ、嫌な思い出が脳裏をよぎる。

僕のせいで遅刻しちゃうって、泣いて謝ったんだよなあ…、あの子に。

心臓の鼓動が普段に増して耳を打つ。

周りから無言の重圧が襲うのを敏感に察してしまう自分が憎い。

思わず胸元の形見のペンダントを服の上から握り締めて深呼吸をしよう。

何故だか昔から、コレをすると落ち着くのだ。

それは兎も角、実際の所忙しい朝の時間帯にこんな障害物と仲良くなんてしてもいられないわけだけでも。

太陽が昇りきる頃にはゆっくりと消えてゆくんだけど、それまでの間は迂回しないといけなくなる。

コレを嫌がらないのは通報で駆けつけては観測するのが日課になっている研究家や、「覗き屋」と呼ばれる物見遊山な人たちぐらいである。

僕の通学路になってる地域には、わざわざコレのために引っ越してきた研究家の人も居たりする。

今日もまた、既に顔見知りになった研究家の人たちが、苦笑交じりに手を振ってくる。

また居るのか、と。

今でこそ、発生時間帯の飛行や走行が禁止されるようになったため、事故がそうそう起きる事はないが、初期の頃は突然前方に発生した天窓にぶつかり急停止、後続車両が追突して…と言うような被害が続発したそうである。

それを避けられるようになったのも、観測などの地道な研究の末に得られた研究家達の得た成果によるものだ。

以前この人たちに、毎度毎度発生現場に僕が居るからって事で、何らかの発生に起因する一因でも持つてるんじゃないかとか冗談交じりに言われた事がある。

たまたま居合わせた姉さんが、「冗談じゃない」と研究科の人たちを叱責したおかげでモルモットになることは避けられたけれど。

もし僕が原因だとして…何か変な電波でも出しているんだろうか。

実の所、僕に何か原因が有った方がよかったかもです。そうすれば実際僕のせいだからごめんなさいといえるわけですし、文句言われなくても仕方ないよな―と思えるから。

そんな感じで研究家の人に向かって会釈を返していると、背後から聞きなれた声がかけられた。

「おつ、やっぱり今日も居たか、宏一。お前追っかけてると楽しいねえ」

「やっぱりってナンだよ」

学校への迂回路を考えなきゃいけないって言うのに、やけに気楽なこいつは隣のクラスの山本八馬。

小学校からの付き合いの、高校になるまでは僕ともう一人の合わせで三人常に同じクラスだったという腐れ縁だ。

学校随一の変わり者で、変人といえば奴の事を指すというほどに有名だ、と言えば僕に比べてどれだけお気楽さ加減に歯止めが利かないかわかってもらえるだろうか。

「やっぱりだからやっぱりって言ったままでさ。お前が居ると楽しいねえ」

「僕はこれっぽっちも楽しくないよ、まったく」

同じ方向に御用の向きがある人からすれば、こいつのお発言はム力つく事この上ない話なハズなのである。

だからして、僕の非難の籠った言葉は、周囲の人々から賛同を受けてもいいくらいであるが、皆さんの目は「お前が言うな」と物語っておられます。

引き攣りつつ振り返った先では、高校一年生としては平均値よりも若干低めな身長の僕よりも頭一つ半ちよい高い位置から、見下ろすように笑みを向けてくる友人の姿。

「しかし、毎日のように異世界を垣間見れるなんて覗き屋冥利に尽きるねえ。なあおい」

「僕に同意を求めないでよ…」

尽きようが尽くまいが、僕にとってはただの邪魔な障害物である。

そもそもそういう趣味が無い僕としては、同意を求められても困ってしまう。

せいぜい僕や周囲の人の困った表情を尻目に、朗らかに声高に「楽しい」と言つてのけるこいつに対して、苦笑いするくらいしか出来る事は無かった。

奴の「面白ければそれでよし」という行動原理には、女性受けする柔らかな面差しとは裏腹に、最近慣れたとは言え僕でも些か面食らう事が多いのである。

でもまあ、こんな風に気楽に接してくれるのは正直ありがたいんだけど。

実際こいつみたいなのは稀有な例で、殆んどは他所を歩きやがれオーラが天を突くかのように出ているのがわかるのだ。オーラなんか見えるはず無いのにね。

道に行く学生の数がかなり減ってきた時間帯に、ようやく僕は学校が見えるところまでたどり着いていた。

八馬はと言うと、あの後僕に向かって「じっくり見物してから登校すっから」と言つて、他の覗き屋連中に混ざつて、懐から最新型のコンパクトかつハイスペックなデジカメで撮影を始めてしまった。

連日遅刻がギリギリかのどちらかで、色々と文句を言われている身としては、付き合っても居られない。

奴はああ見えて、学業の方は優秀極まりなく、多少の出席日数など気にもしやがらないのだ。ムカツク。ひじょーにむかつく。

大回りした道は先ほどの道に比べ非常に細く、他にも現れていた天窓のおかげで大いに混みあい、おかげ様で遅刻ギリギリである。

予鈴が鳴り終わるまでに校門をくぐりさえすれば、とりあえず遅刻扱いからは逃れられる。

目標の学校正門まで、残り200m。現在障害となりうるものは無し。

鳴り始めたチャイムがスタートの合図である。

いざ突貫！と言うほどではないが、全力疾走を開始した。

周りには僕と同じように走るものも居れば、諦めているのかテレテレと歩く奴も居る。

何とかチャイムがなり終わる前に校門に駆け込み一息ついた僕の前に、幾つもの人影が立ちふさがる。

「野見山君、また遅刻寸前？毎朝毎朝、一体何してるの？」

立ちふさがった中の一人、『風紀委員長』と書かれた腕章を付けた女子生徒が、バインダー片手に僕を見つめて立っていた。

「好きでギリギリなわけじゃないよ」

どっちかっていうと後ろで遅刻チェックされてる、膝上20cm程度のミニに改造したスカートの娘の方が、よっぽどギリギリだと思うけど。いろんな意味で。

などと、口には出さないで心の中でだけ言い返した僕だったけれど、『風紀委員長』に野見山君と呼ばれた事に些か気落ちした。

遅刻しなくて済んだ事で何とか維持できていたモチベーションが駄々下がりである。

顔を会わせる度に、どうしてもこういうやり取りになっちゃうかなあ。

しょんぼりした僕に追い討ちをかけるように、上から下までじつくりと視線を注ぎ、制服検査までしてくださっている。

既製品そのまま、別にずり下げてズボンはいたりするわけでもないんだけども。

やけに僕にだけ厳しい気がしないでもないが、風紀委員のお仕事に熱心なんだと思うておこう。

とは言え、校則の範囲内でのファッションにいちやもんをつける気はないらしく、自分でもそれなりに時流は追っているようである。

ラフに整えられた鈍く輝く銀色のショートカットの髪。

そしてそこから覗く形の良い細い顎に続くラインが愛らしく、咽喉

のラインを経て鎖骨に至る微妙な曲線などは、筆舌に尽くしがたい。半袖のブラウスが包む凹凸の少ない胸の張り出しは、その生地 of 白さと相まって眩しさが倍増している。姉さんと比べるとまさしく…ゲフンゲフン。

もとい。

ブラウスの下でささやかに存在を誇示するそれは、その下の細い腰によりなんとか強調され、その常人よりも高い位置にある腰から伸びる、膝丈のプリーツスカートは、裾から伸びる細いが健康的な足を見事なまでに色めき立たせている。

とまあこんな感じで風紀委員長の癖に思わず風紀を乱してしまいたくなるような風貌のこの女子生徒は、同じクラスの柊山梓という。

ただ普通と違うのは、その瞳の色が深い緑で、肌の色が日本人にはありえない白さを誇る事だ。

要するに、純日本風な名前にそぐわない外見のそのわけは、実はご両親が血統的には純然たる北欧だか東欧だとかで、夫婦揃って帰化した後に生まれたためなのだ。

そういうわけで彼女はれっきとした日本人であり、日常会話は日本語のみなのである。

彼女はその容姿に加え、勉強に関しては八馬でさえ舌を巻くと言うほど文系理系を問わずに優秀な成績を残し、運動も並々ならぬ記録をたたき出し、あちこちの運動部からせめて助っ人と呼ばれること数知れず。特に剣道においてはとある大会で助っ人した部が全国

制覇を成し遂げる原動力となったという、正に文武両道を体現していた。

かてて加えて品行方正、眉目秀麗ときてる。

先生方の覚えも良く、何処に出しても恥ずかしくない優等生の鑑と、校内はもちろんの事ながら、近隣の他校にまで信奉者が居ると言う話だ。

そして、さっきの八馬と同じく小学生からの腐れ縁三人衆の一角を担っていた。

は若干縁薄いが。まあ、あとおまけであるが、僕の家のご近所さんでもある。

「どーせ山本君と一緒に、アレでも見てたんでしょ？」

そう言つて顎で指し示した空の彼方には、虹色に霞む、天の窓。

正直な所、僕は見たくもない。

「それは八馬だけだよ。僕はいい迷惑なんだってば。毎日毎日邪魔くさいったら」

まさか好んでアレを見たいがために、狙って遭遇してるとでも思われてるんだろうか。

僕との会話と平行しての遅刻者チェックも漏れは無く、生徒手帳を掲示させてはすらすらとペンを走らせる。

顔を見ただけで、クラスから名前に出席番号まで書かれちゃってる常連さんまで居る。

僕以外でも居るんだね、そういう奴。

「まあいいけど。彼、冗談抜きで先生に目え付けられてるから、一緒に行動するの控えた方がいいわよ。ほーら、せっかく遅刻じゃないんだから、さっさと教室にいきなさい。もう本鈴鳴るわよ?」

そう言っ僕を追い立てると一通り書き込みを終えたのか、校門を閉めるため、見える範囲に遅刻者がいないかを確認しに門を出てゆく。

僕もそれを見送ってさっさと教室へ、と思っ歩き出した所を他の風紀委員になぜか行く手を阻まれる。

風紀委員の中でも一際ゴツイ体格の…なんて名前だったかは忘れたが、よく見かける男子委員が、やけに敵意むき出しの視線を叩きつけてくれていた。

名前、なんだっけかな。

確か同じクラスだったような気もしなくも無い。

よくある名前だったはず…まあ良いや、佐藤君（仮名）にしとこう。

確かそんな感じの名前だった、と思う。

幸いと言っかなんと言っか、僕は学校で口々に人と接点を持たないので、これとっって困らないのである。

運動部程度の体育会系な奴ならともかく、見ただけで格闘系とわかる体格の彼に、接点なんて欲しくないし。

何かにつけて気合いだ根性だ、なんと言われても僕は困る。

貧弱というキャンバスに脆弱と言う絵の具で絵を描いて、華奢という額縁で飾ったら僕になると言っても過言ではないくらいなんだから。

しかし仲間意識が強いのかなんなのか、僕が柊山と長々と喋っていたのが気に入らなかったのだろうか。

さすがにそろそろ教室に向かわないと授業に遅刻してしまうので、どいてくれないか？と言おうとしたら、柊山が僕のすぐ傍を風のように通り過ぎ、とんでもない大声を張り上げた。

「そこおっ！壁越えて遅刻誤魔化そうなんて甘いわ、よっ！！」

そう叫びつつ指差し、言い終わると同時に手にしたボールを投擲。

そして球の行方も見ずに同じ方向へ駆け出してゆく。

一周400mの陸上競技用トラックが確保された校庭を挟んだ向こう側で、塀を乗り越えていた生徒が、顔を見られないようにカバンを盾の様に使いながら死角に入ろうと駆け出し始めていた。

「馬鹿め。柊山さんの遅刻者追跡用インク球から逃がられたのは、今まで一人もいないんだぞ」

僕の邪魔をしていた佐藤君（仮名）が、誇らしげに笑みを浮かべた時。

「あだっ！」

遠くの方から微かに聞こえた声で、さっきの球が本当に当たったんだな、と言うのが確認できた。

その数秒後、柊山が「確保ーっ！」と、声高らかに遅刻者を捕まえた勝ち鬨を上げたのを、僕は上履きに履きかえるために下足場に向かいつつ、背中で聞いたのであった。

下駄箱から上履きを取り出していると、くそ重いはずの門がかなりの勢いでガラガラガツシャーンと盛大な音を立てて閉まったのが聞こえた。

「あんたたち、なにポケットと突っ立てんの？さっさと教室に入りなさい」

これまた柊山の声が聞こえる。あの細腕で、よくもまああの校門をあんな勢いで閉めれるものだ。

その昔、「剛力無双」と渾名されていた事を知るのは、小中と同じクラスだった八馬と僕ぐらいなものである。

佐藤君（仮名）が柊山に「言ってくれたら門締めるの手伝ったのに」とか言ってるのが聞こえる。

力仕事なら任せてくれ、って奴か。

残念ながら、僕はもとより人の手を煩わせることなんかはつきり言っていないと思うぞ？体力仕事に關しての柊山は。

まあ、彼女が荷物抱えてりゃ、お手伝いしますっ是非させてください、って懇願する奴が大量に居るせいで、そうそう全力を振るう機会が無いから知られてないんだろう。

美人って得だねえ…下心みえみえな奴には厳しいけどな、彼女。

見た目に騙されて涙を吞む觀る奴がまた増える、と。

まあ、今の僕には関係ないわけで、と。

昼休み。

誰もが待ちわびるであろう、憩いのひととき。

もうね、これの為だけに学校に来てるんじゃないかって思えるね、実際。

さて、姉さん謹製のウマウマ弁当のご開帳であります。

さあ喰うぞと、唐草模様の包みを机の上に乗せた時、教室の扉が盛大な勢いで大きく開け放たれた。

「っしゃーーーーー！宏ーい！今日のはすっげーぞお！」

ざわめいていた教室が、一瞬しんと静まり返る。

が、それもつかの間、毎度の事だと皆わかつているのか、各々行動を再開しだした。

ああ、でも例の風紀委員の佐藤君（仮名）が、何か気に触ったのかして、ノシノシとこっちに寄って来た。

「……」

「…何？」

近寄ってきた佐藤君（仮名）。

でん、と僕の机に手を付いて。

何か言うのかと思ったら無言のまま。

僕に無言の圧力かけて、八馬をどうにかしろと言ってるのだろうか。

でっかい声と騒音を立てて突入してきたのは確かに八馬で、このクラスでは一応僕が最も親しいだろう。

でもやつを大人しくさせる義務も責任も、というか能力なんざ僕には無い。

むしろ、出来る事なら大人しくさせたい物であるけれども。

そもそも僕に言いがかりをつけて何かメリットでもあるんだろうか。

人様からの不条理な厭味に黙ってるのは朝の天窓関連だけで、他の事柄に関してはそれなりに言い返すよ？僕。

まあ実際僕に何の非も無い訳で、きょとした顔でじーっと目を見返していたら向こうから視線を外してなにやらぼそと喋り始めた。

「お前が一番親しい、から。その、静かにするか、その、なんだ。自分の教室に帰るか言ってくれ」

クラスメイトだが、ロクに口を利いたことも無い理由が判った気がした。

単に口下手と言うか、喋るの苦手なんだね。若干親近感。好きにはなれないだろうけど。

それはそれとして、彼の言い分はわからないでもないが、でも今は昼休みで、僕は奴の保護者でもなんでもない。

おまけに昼休みに教室で騒いじゃ駄目とか言われても、誰が言うかと聞くんだろう。

「んだあ？この体育会系の馬鹿は」

佐藤君（仮名）に、八馬が話の腰を折りやがってとばかりに睨みつける。

体格的には八馬に勝るとも劣らない、むしろ横幅と重量だけなら確実に勝利している佐藤君（仮名）だったが、どうにも状況的に分が悪いと見たのか、他の人に迷惑はかけないでくれと言い捨てて教室を出て行った。カッコ悪。

つと、それはそれとしてだ。八馬は何を興奮してここに飛び込んできたのだろう。

「そんなに鼻息荒くして、どうしたのさ」

どうせ天窓関係の事なんだろう、どうせ。まあ今の僕の興味は、目の前に置かれた四角い箱にしか注がれていないのですけれど。

「まったく、話す勢いってもんが失せるってもんだぜ。なんなんだよアイツはよ。あー、つとだな、宏一。今日のアレだよ、天窓。まあ見てみるよ」

「別に見るのはいいけどさ、今頃登校なの？」

姉さんの作った弁当に箸を伸ばしながら、適当に八馬と話を合わせる。

「ああ、混じりっ気無しの大遅刻って奴さ。だが俺は後悔なんざ微塵もしていねえ。それに見合うものも得たしな！」

いつもなら、もうちょっと早め、せめて二時間目くらいには登校してきてたと思ったが、そこまで気を引くような何かがあったのだろうか。

「まあいいから見てみろって。メシなんざ後でも食えるだろ」

どうやら予想通り、撮った映像を見せびらかしたいようである。

「何がどう凄いつて言つのさ」

正直な所、僕は天窓に関してはそこいらの覗き屋連中よりも見まくってるからね。好きで見てるわけじゃないけども。

確かに、地球上にあるだろう極限環境を数倍凄まじくしたような景色が垣間見えてるんだけど、見慣れた僕にそうまでして見せたがるほどのものが撮れたんだろうか。

ちよくちよくテレビでやってる天窓特集の映像レベルなら、僕にとって日常茶飯事なんだけども。

「まあいいからいいから。っと、そんな顔すんなよ、メシ喰ってていいからさ。別に喰いながらも見れるだろ？」

根が正直な僕の表情の変化に気がついたのか、意見を変えて手にしたでデジカメを操作する。

そうして映し出された映像だったが、僕にとってはよく見る風景であつたため、特に感慨は無かつた。

「まあ見てなつて。もうチヨイ先だ」

正直失望した…と言っかなんと言っか。

いつも通りのアチラ側の風景にしか見えない。

恐らくは深い深い森の奥なのだろう。

日の光が僅かに差し込んでいる事で、何とか昼間だと言っ事がわかると言っ薄暗さだ。

なんてことは無い、いつもの向こう側の風景。

でもまあ映像的には綺麗に写っていて、まあ素人が撮ったにしてはそう悪くないんじゃないかな〜って感じです。

あからさまに落胆を示した僕の表情に気がついたのか、八馬が僕の肩に手を乗せて言う。

「こっからだよ、あせんなっ」

そう言っただけなのに、そこに映し出された映像が徐々にその視点を前方へと移動させ始めたのだ。

「どーよ、すげえだろうが」

ゆっくりと風景が画面の外へと流れてゆく。

その速度が段々と速くなり、ついには眩暈を覚えるほどの速度になっていた。

こんなのはさすがの僕も初めてだ。

いつもはずっと同じ場所が映し出されるだけで、景色が動く事なんて見た覚えが無い。

その衝撃は、恐らくはご飯を口に頬張ってなければあんぐりと間抜けに大口を開けて呆けていたであろう程である。

事実、僕はご飯の咀嚼を忘れてしまっていた。

「ちょうどお前が行ってすぐさ。俺もこんな事初めてだったからよ、いつもなら適当な所で切り上げてガッコに行くんだけどよ、結局消えるまで見ちまっただよ」

興奮が甦ってきたのかして、意気揚々と語る八馬。

「確かに凄い…けど」

映った景色自体はそう驚くほどのものじゃないんじゃないか？と問おうとした僕に、先を読んだ八馬が顔を近づけてニヤリと笑い、言う。

「まあま、こんなもんかって顔してられるのはここまでさ。来るぞ」

食事の続けようとしていた僕の肩を押さえつけるようにして、観賞の継続を促す。

「わかったよ、最後まで見ればいいんだろ？でも、そんなに驚くよ
うな…」

そこまでで、言葉が続かなかった。

絶句。

前言撤回。

これぞまさしく驚愕と言う言葉が当て嵌まると言つものだ。

深い深い森を掻き分けるようにして進む光景の先に、一点の光が見えたと思った次の瞬間、光が爆発するように溢れ、煌く水面を映し

出した。

清冽な水を湛えた鏡のような湖を、深い緑の森が包む。そして、『彼女』はその湖面に居た。

その映像が衝撃と言う形で僕を固めたのを尻目に、八馬は嬉々として喋りだした。

「な？な？翅翼人だぜ？すげーだろ？こんなのさすがのお前も初めてだろ？当然俺だって初めてさ。そりゃーちっさく映ってたのは見たことあるけどよ」

背中から伸びる、美しい翼が目に入る。

背中から肩越しに伸びる翼が一对、腰の辺りから斜め下に広がるように一对の、計4枚の翼が。

美しい容姿と相まって、誰もが天使と口にするのも仕方がないところである。まあ、マスコミ関係やは宗教関係に配慮してか、公的には天使と呼ばずに翅翼人と呼ばれていて、八馬らみたいな自称“通”な「覗き屋」たちは、その呼称を好んで使っていた。

「ちょっと黙って…」

自慢げに話す八馬を遮って、小さなデジカメの画面に齧りつき、まさに目を皿の様にして凝視する。

これは、なんて言うんだろう。目にした瞬間、心臓を鷲掴みにされたような感じ。

なんなんだろう、ずっと前にもこんなことがあったような気がする。

…ずっと前？それっていつ？

額から滲み出した汗が、頬を伝う。

心臓の鼓動が、他の音が耳に入らなくなる程に大きく響き、耳朵を打つ。

それで居て、周りの奴らの衣擦れさえも聞き分けられそんな感覚。

不思議なことに、画面に見入る僕の『後ろで』ニヤニヤ笑う八馬が見えた。

「ここまで近くで見れることなんざ、そうそう無いどころかきつと今日が始めてだぜ？一緒に見てた連中も驚きまくってたぜ？どうよ、天窓遭遇回数が異常な回数のお前さんでもこんなのは…ってどうした宏ー」

後ろでしゃべくる八馬の声が、まるで耳元で大声を張り上げるように聞こえる。

なのに、僕の頭の中には入ってこない。

僕の心は、目の前の画面に、画面に映る映像に釘付けになってしまっていた。

そう、「御使い」と称されている天窓の向こう側の住人。

とは言え天窓で見ることが出来るのはごくごく稀だ。

しかもこんなに近くで、なんて。

僕ほど天窓との遭遇回数が多くても、こつまでも間近にお目にかかったことは無かつたくらいにレアなのだ。

八馬のテンションも上がる訳だ。

煌めく湖面に、光の飛沫を振りまき踊る、その姿。瘦身のようであり、その姿は美しいと言っ言葉が裸足で逃げ出すくらいの黄金率で見えるものを釘付けにする。

何よりも、その腰を超える長さの豊かな金髪を割って伸びる、常とは違う2対の翼。

しかもその姿。その身に薄絹の衣だけを纏った姿は扇情的ではあったが、裸足の爪先だけを水面に付け、波紋が広がる湖面で一心不乱に舞踊り、天を仰ぐ。

何かに祈りを捧げているように見える様は神々しくもあった。まさしく御使い、天使と呼ぶにふさわしい。

こんなのを覗いてしまつて良いのかと言っ気持ちが生まれるほどだ。

そして、その画面の中の女性がこちらを向いた。

たまたまこちらを向いたんだろうと、普通なら思っだらうけれども、感じたんだ。

その画面の中の女性が、『今』僕の視線に気付いたんじゃないかっ

て。

映像を見せられてから、僕は何度も脳内で反芻していた。落ち着かない心を静めるために、服の下に隠れたペンダントを思わず握り締める。

気持ち的には何時間もそうしていたような気がしたけれど、実際には数十分といったところだったんだろう。

頭頂部にぶち当たった、硬く平べったい物体が僕を現実へと引き戻したから。

「まったく：今日も遅刻ギリギリの上に、授業が始まるうかと言うのにまだ弁当箱を広げたままとは。情けないにも程がある。コレで弁当を残していたりしたら、後で折檻じゃったかの」

そして再び『ゴスッ』と叩きつけられたのは、僕にとってはお馴染みの、出席簿の角っこの感触であった。痛い。

頭を押さえて見上げた先には、見慣れた巨大な双丘と、こちらは学校でしか見ることが無い、電子タバコをくわえた口元。

そしてその右手には、先程僕を二度までも襲ったやけにゴツイ装丁の出席簿が、その材質の強度限界を引き出された痕跡を残して、収まっていた。

僕の頭頂部を強襲したのは誰あろう、我が姉上であった。

姉さんは僕の通う学校の先生で、歴史を教えている。

武家政権の成り立ちから戦国時代、江戸末期から明治維新にかけての講釈には、かなりの熱が入ると評判である。

で、現状はと言えば、昼休みが過ぎ去り、もう既に本鈴も鳴り終えて八馬も自分のクラスへと帰ってしまっていた。

にもかかわらず、暢気にボーっとしていた僕は、授業を行うためにやってきた姉さんにより、容赦無い攻撃が加えられたのである。

慌てて弁当箱を仕舞いながら周囲に目をやると、佐藤君（仮名）がニヤニヤ笑ってやがった。

ムカツク。

しかし、もうちょっと手加減して欲しいものです。姉弟とは言え、学校じゃ教師と生徒ですよ。

体罰云々で問題になっちゃったりしたらどうするんだ。

そんな僕の膨れっ面に、ニコリともせずに姉さんは言う。

「心配せずとも『姉弟同士のじゃれあいです』の一言で済むからの。それよりも学校では先生と呼べと何度言わせる。ほれ、ちゃっちゃんと支度せぬか」

やけに矛盾をはらんだ言葉を言い終えると、家では身に着けることの無い白衣を翻し、颯爽と教壇へと戻り出欠をとり始めた。

姉さんの授業はわかりやすく、時折冗談を織り交ぜては進めてゆく。

古い歴史の事を、順を追って語るだけでなく、その裏側にある当時の思惑なども引き合いに出すから、理解度が深まるのも当然と言えば当然で、男女問わず生徒に人気もある。

そんな姉さんの授業が終わると、次は今日一番嫌な授業である体育だ。

僕にとっては楽しい授業から一気にやる気が萎える教科に突入である。

「おい宏一。さっさと着替えようぜ？」

隣と合同授業の体育は、女子が隣のクラス、男子はこのクラスで着替える事になる。

なので八馬がここに着替えに来る事になるのだが…。

「頼むからそのカメラを携えたままってのは止めてくれ。如何にも怪しいぞ？」

「別に撮ってないから良いじゃないか。もし盗まれたりしたら俺の今日の感動が消え失せるほど落ち込む事になっちまうんだからよ」

なら盗まれないようにもって帰れよ。とは思ったが、体育だけは授業をサボる訳にはいかないのである。

何せ体育の時間は、サボった場合補習が必須となっている。しかもサボった時間以上の運動を課せられるのだ。

他の教科は試験で取り返せる八馬でも、無理してでも出る程である。

「とりあえず着替えようぜ。遅れると面倒だし」

そういつている間にも、他の連中はさっさと着替えて校庭へと急いでいた。

「そうだね、冗談抜きで急がなきゃ」

もう残っているのは僕と八馬、そして…佐藤君（仮名）くらいである。

嫌な奴が残ったもんだ。

太い両腕を組んで、佐藤君（仮名）が僕を睨みつけてくる。

係わり合いになりたくないのに、なんだってこう厄介事はわざわざやってくるんだろう。

「おい」

体操服に着替え終えたところで、奴が僕に声をかけてきた。

「…何？」

「お前、柊山とどういう関係だ？」

そんなことを聞いてどうしようって言うんだろう。

「柊山ってウチのクラスの？」

八馬の問いかけに、図らずも僕と佐藤君（仮名）が同時に頷く。

「はっはーん。てめえ、柊山に惚れてるな？」

直球ストレートの八馬の言葉に、彼の顔色は綺麗に赤く染まっていた。

「当たり前いだね、凄いや八馬」

「…わからんお前が不思議でたまらんわ」

外人のよくやるジェスチャーのように、八馬が肩を竦めて軽く両手を挙げ、僕の事を鈍感だと揶揄する。

「そつ！そんな事はどうだっていいんだよ！俺が聞いている事にさつさと答える！」

照れ隠しなのか、やけに声高に迫ってくる。

そんな時、ガラリと教室の扉が開いた。

「いやはや、私としたことが面目ない。出席簿を教室に忘れるとはな」

「誰にでもミスはありますよ、私が体育の先生に渡しておきますから…ってまだ居たの？」

入ってきたのは姉さんと、柊山の二人であった。

「はて。もう体育の授業が始まるのではないか？さっさと行かんと

遅刻扱いになるぞ?」

「ほら、あんた達さっさと出なさいよ。あ、出席簿つと」

教卓の上にぽつんと置かれていたのを、柊山が手に取り脇に挟む。

「では、お任せする。またウチに顔出しな、梓嬢ちゃん」

「嬢ちゃんは止めて下さいよー、瞳先生」

にこやかに笑いながらの会話に、僕たちも気が抜けてしまった。

「…いこつか」

「だな」

八馬を促して教室を出ようとする僕だったが、佐藤君（仮名）は納得いっていないのか仏頂面のままである。

ぶつぶつと文句を言っているのだけは聞こえるが、内容まで聞き取ってあげる義理は無い。

「ほれ、何をしておる。さっさと行かんか。身体を動かすのが億劫な気持ちはわからんでもないが、こうして大人数で運動をする事など、社会に出ると中々機会すら得られないのだぞ」

僕は得たいとは思わないんだけど、なんて言い返したら、いやと言うほど運動する機会をくれそうなので言わないでおく。

僕らがちゃんと校庭に向かうのを確認する為なのかして、僕らを見

送る姉さんとその横に並ぶ柊山に視線を向けながら教室の出口に向かおうとしたら、前に行く八馬の背中にぶつかってしまった。

「…おい、宏一。なんだありゃ」

「なんだありゃじゃないよ、急に止まらないでよ…って何？それ」

「うそ、こんな時間に？」

柊山が、驚きを隠さずに声を震わせるのも当然。

「かつ、カメラカメラ！教室に置いてこなくてよかったぜ！これも日頃の行いが良いからだな、うん。神様ありがとう！」

大慌てで体操服のポケットからデジカメを取り出しレンズを向ける八馬。

そう。

教室の出口。扉を開いた向こう側に、虹色のきらめきを瞬かせるモノが。

僕らが天窓と呼んでいるモノが、そこには浮かんでいた。

2・遭遇

カメラを手に、ぐるりと全周囲から撮る為、八馬は天窓に近づこうとする。

「ふうん？いつもと違うな」

さすがにフリークらしく、常と違うのはすぐわかったらしい。

普段は現れた時から消える時まで、その大きさが変わることは無い。だがこの天窓は、僕の目の前で光を放ちながら、じわりじわりと大きさを広げているように見えた。

「綺麗……」

柊山が、ポツリと呟いた。

綺麗、か。

本当に、僕もそう思う。

天窓自体は嫌になるくらい何度も見ているけれど、こうして発現初期からじっくりと見ることもなんて滅多にあることじゃない。

しかも屋内で、なんて。

そうこうしていると、ちょうど1m程度の大きさになったところで、膨張が止まった。

「なんでえ、ちいせえな」

「でも、いつものより色が綺麗よね」

八馬がカメラを覗いたまま不満げに呟くのを受けて、柊山がその放つ色を賞賛する。

確かに小さい。

人一倍見る機会が多い僕でさえこんなサイズは初めてだ。

いつもは最低でも道路いっぱいに広がるのだから。

だけど、その表面に浮かぶ色彩は、普段の淡く渦巻く虹色とは違い、飛沫のような燐光を伴って、まるで万華鏡のようにキラキラと輝きを発していた。

「さーって、どんな景色かなーって」

八馬がデジカメ片手に近寄ると同時に、天窓が徐々に澄んでくる。

しかし八馬つてば、仮にも教師が居る教室内で、次の授業にも向かわないで何を興奮してるんだか。

そろそろ姉さんが、馬鹿の行動を止めてくれる頃合じゃないかな、つと視線を振るが。

あれ？

見間違いでなければ、教卓の傍で姉さんが、目を見開いて立ち竦んでいるように見える。

どんな状況でも顔色一つ変えないって感じの人なのに、やけに荒い呼吸で、何か張り詰めているように感じられた。

「ちょっと、姉さん？どうしたの？」

「今いいところなんだから、邪魔すんなって。くうー、発現初期からの連続した映像なんて中々ないぞお」

あんまりにも意外な姉さんの様子に、どうかしたのかと駆け寄ろうとするが馬鹿八馬が撮影優先とばかりに行く手を塞ぐ。

「ちょ…八馬、邪魔！姉さんっ？どうしたの？」

押しのけてでも進もうとする僕を、わざとなのかたまたまなのか、八馬が邪魔をしてくれる。

「姉さんの様子がおかしいんだって、ちょっとどいてよ、八馬」

だが聞いちゃいねえ、のめりこみ過ぎだろ。

頭一つ大きい、意外にがっちりした八馬との体格差が、これほどの物だとは考えてもみなかった。

「……いい加減にしろ。いけ、野見山」

「へ？あ、ありがとう」

八馬の頭を掴んで、なんと佐藤君（仮名）が助けてくれたのである。

「瞳先生、どうしたんです？大丈夫ですか？」

そうこうしているうちに、柊山が姉さんの様子がいつもと違う事に気付いてくれていた。

いつもの教室に、普段ならありえない天窓が現れるなんていう異常な光景の中、僕は姉さんの傍へとたどり着いた。

「姉さん、大丈夫？どうしたの？」

身じろぎ一つしないまま、天窓を睨みつけている姉さんに、縋りつくようにして声をかけた。

姉さんが反応する前に、八馬の声が背後から響いた。

「なんじゃこりゃああああ」

「なんだよ、もうっ！」

いい加減にしるよと思いながら、振り向いた先で。

天窓から、まるで洪水のような光の奔流が溢れ出し、目が焼ける程の凄まじい煌めきが炸裂した。

真っ白な閃光で辺りが満たされる中、僕の意識はそこで途切れた。

寝ちゃってたみたいだ…頭が痛い…。

心臓が鼓動を打つたびに、脳が血流で圧迫されているようにがんがんと疼く。

それに、耳元で何かが叫んでいるようで、喧しい。

誰だ？五月蠅いよ。

姉さんだったら、絶対こんな起こし方しないんだけどなあ。

姉さん…？そうだ！姉さんは？

一気に覚醒した僕は、飛び起きるようにして立ち上がり、周囲を見回した。

そこは紛れも無く教室で、ただいつもと違うのは、机や椅子が天窓のあった場所を中心に壁まで吹き飛ばされてひん曲がっていたのと、僕以外の全員が、ぶっ倒れて床に横たわっている点だろう。

「ちょっと、みんなどうしたの？何が起こったの？」

僕の声に応える人は居らず。

まあ、どうしたもこうしたも、あの天窓のせいであんなになったんだろうけども、今までアレが直接原因で集団意識不明とかが起こったなんて聞いたことが無かったから、どういいう事がさっぱりわからない。

って、ソレよりも姉さんは？

姉さんにしがみ付いてたはずなのに、僕の傍らには柊山が倒れ伏していただけだったんだ。

柊山を抱き起こして軽くゆすって声をかけてみても、起きる気配はない。

八馬と佐藤君（仮名）を蹴飛ばしても、うんともすんとも言わない。

どうしようかと周りを確認しても、教室内には僕と柊山、八馬と…佐藤君（仮名）しかいないため、どうにも出来ない。

「姉さん…何処行っちゃったんだよ」

途方に暮れる僕だったけれど、視界の隅に感じた違和感が、そんな場合じゃないと告げてくれた。

ありえないサイズの巨大な眼。

ふと視線を上げた先の窓の外、僕の視界に飛び込んできたのは、ソレはもう巨大な何かの眼が、教室の窓からこちらを覗き込んでいる姿であった。

「なんだよそれ…」

それだけ呟いただけで、僕は絶句した。

その一因は、巨体に似合わぬ素早い動きで一旦後ろに飛び退ったその姿。

簡単に僕をひとのみに出来るサイズの口を持つ、神話がファンタジー小説から抜け出てきたような、翼の生えた巨大なトカゲだったのだ。

そして、そいつがあからさまにこちらへの敵意を示し、威嚇するように牙を剥いて咆哮したからである。

「やれやれ…まさかと思うたが、よもやこんな事態になるとはの」

「ねっ、姉さん？」

恐慌に陥りそうになった僕の背後で、落ち着いた声が響き、僕は振り向いた。

そこにはいつもと変わらない姉さんが、白衣に両手を突っ込んだまま、啜えタバコを燻らせていた。

「姉さん、ど、ど、ど、どうなってるの？アレは何？一体どうなってるの？」

「まあ落ち着け。心配せずとも今のままなら向こうもこちらもどうにも出来ぬ」

そう姉さんが言い終わる前に、件の巨大トカゲが突進で得た勢いそのままに、窓に頭をぶつけてきた。

が、窓ガラスはビクともしない。

近くの道路をダンプカーが通った程度でも、軽い振動が伝わるのに、

だ。

「の？心配いらんじやる？」

「わあい、丈夫な窓ガラス…っっていうか、窓に届いてくない？」

巨大トカゲの突進は、窓ガラスに触れることなく、急速に速度を落としてある一定の距離でぴたりと止まった。

「放っておけばそのうちいぬるじやる。さて…宏一、ちょっと指を出せ」

呆然としている僕に、タバコを摘まんで細く長く紫煙を吐き出した姉さんは、何を考えているのかそんな事をいう。

「指を出せて…あんなの相手に指出してなんの役に立つって言うのさ」

そう言いつつも、冗談を言っているようにも見えない姉さんに従って、僕は人差し指を窓の怪物に向けた。

「そっちではない。今は放っておけばよい。とりあえずこっちじゃ。ちよつと我慢せいよ？」

床に倒れ付している3人を顎で指し示すと、僕の手を取り自分の口元へともっていき、柔らかな唇で包み込むや指の腹を噛み切ってくれたのだ。

「痛っ！」

「我慢せいと言ったであろつが。しっかりせい、男の子！」

痛いものは痛いです、と心の中で反論する。

姉さんは、僕の指を咥えたまま傷口を吸い、そして柔らかに舐めあげて、ようやく口を離した。

そして自分の指を口に咥え、僕の血で湿らせたかと思うと倒れ伏している柊山の傍らに跪き、その指先を彼女の唇に含ませたのだ。

窓の外の、何度も突進してくる巨大トカゲを気にしつつ、姉さんの不思議な行動を見守る。

ゆっくりと姉さんが指を離すと、それまで身じろぎすらしなかった柊山が、苦しそうに身体をくねらせて薄く目を開いた。

「う……ん。……こーちゃん？」

懐かしい呼ばれ方に一瞬体が震えたが、気を取り直して呼びかける。

「大丈夫？どこか痛いところとか無い？」

言いながら、ついでにペチペチとほつぺたを叩いてやると、意識がハッキリしてきたのか、どこか遠くを見ていたような目が、はつきりと僕を見つめた。

「何？何があつたの？つて、なによあれえええええ！」

目覚めたと思つたら、窓の向こうに迫る巨大な口を見るや、再び意識を失ってしまった。

「おい、柊山！おいってば！」

焦って彼女の頬を叩いたり、身体をゆすったりしていると、八馬と佐藤君（仮名）にも同じようなに処置を施した姉さんが、二人を引き摺って僕の傍らに戻ってきた。

口に僕の血を含んだままのためか、口を開かずに僕を顎で促し教室を出るように指示をくれた。

力無くぐったりとしている柊山を抱え教室の扉を開くと、そこにはいつもの通り廊下があった。

が、廊下に出て左右に首を振ると、見事なほどにいつもどおりの廊下は数メートル先で途切れ、その先は鬱蒼とした暗い森が広がり、僕の度肝を抜いてくれた。

「な……」

またしても絶句してしまった僕の横を、姉さんが男二人を引き摺って通り過ぎる。

廊下の途切れた所まで行くと、姉さんが手をかざして僕を促した。

姉さんがやるように、僕も森の木々に手を伸ばす。

すると、ある種の抵抗があって少し進むと、それ以上は何をやっても進まなくなっただのである。

「コレって、天窓と同じ……」

言いながら姉さんを見ると、その口からまるで霧吹きのように僕の血で赤く染まった唾液を噴き出した。

その瞬間、まるで頭を突っ込んだ空のドラム缶を、ハンマーでぶん殴られたような衝撃が、当たりに響き渡った。

その直後、背後から盛大な破砕音と共に巨大な顔が飛び出してきたのだ。

ギロリとこちらに狙いを定めるその爛々と光る瞳は、怒りと興奮で満ち満ちていた。

僕の血が、天窓を、触れることもかなわないあの位相空間というか何と言うか、よくわからないものを消し去ったというのだろうか。

「説明は後じゃ。ほれ、ゆくぞ」

なんだか判らない説明に困惑しながらも姉さんについて森へと駆け出し後ろを振り返って見れば、楕円形に決り取ったような校舎の一部分だけが、こんもりとした森を掻き分ける鎮座していた。

その校舎の窓に首を突っ込み、廊下にまで顔を出した巨大生物は、どうも自身の頭部に生えている角が引つかかったせいで、抜けだせない状態に陥っていた。

僕らが巢穴から逃げ出した小動物^{エサ}にしか見えていないのか、鼻息も荒くこちらを威嚇してどうにか抜け出そうともがいて暴れまわっている。

「さて、この辺りでよいかの」

「な、何が？もつと離れないと、あそこから、抜け出して、きたら、すぐ、追いつかれ、ちゃうよ」

人一人背負っているおかげで、体格が良いとはいえない僕は、既に息も絶え絶えに答えるのがやっとだった。

だけど、それぞれが柵山二人分はあるはずの二人を引き摺っている姉さんは、息も切らず汗一つ書いていない。

足を止めたここは、別に隠れるいい場所があるわけでもない。

それに人を背負っていたのもあって足場の良い所ばかりを選んで歩いてきたため、奴が本気になって駆け出してくれば、あつという間に追いつかれてしまっても不思議じゃない、開けた場所だ。

「別に逃げんでもよい。奴が追いかけてきたなくなるようしておくしな」

そう言つて二人を下ろし、ぺちぺちとはなく綺麗に弧を描いた平手打ちを、スパパーンと両者の頬にお見舞いしたのだ。

姉さんが本当にこれ以上逃げる気が無いと理解した僕は、その場へへたり込んだ。

実の所体力が限界だったのだ、情けない事に。

「う……」

姉さんの気合注入により、二人が薄っすらと目を開く。

それはもう見事に手の平の痕が付いた頬を押さえながらであったが。

「痛つてえ……って、なんだ？一体なんで外に居るんだ？ああつ、おい野見山！てめえ柊山さんに何しやがった」

柊山を背負ったままへたり込んでいる僕を見るやいなや飛び起きて詰め寄ってきた佐藤君（仮名）の動きが、ビタリと止まる。

見開いた目で、しなやかな指を添えられた自身の腕を見る佐藤君（仮名）。

彼の肘を細く滑らかな手が握っている。

ただそれだけで、彼はまるで身動き出来ないようになってしまっていたのだ。

「まあ落ち着け、山田。先ず話を聞くとするのは大切な事だと思わんか？」

ああ、山田君って言うんだ。

ごめん、今までずっと佐藤君（仮名）で。

で、その佐藤君（仮名）改め山田君は、肘を取った姉さんの問いかけに口をパクパクさせるだけだった。

が、しかし。姉さんはそれを了承と取ったのか、そつと手を離れた。

「素直な生徒は評価に値するぞ」

そういつてニコリと笑う。

冷や汗をダラダラ流して放心したようにしゃがみこんだ山田君をよそに、八馬は目覚めたとたんに状況を理解したのかして、酷く冷静であつた。

「見たところ、ここは学校でもなく、周りに生えている木は到底日本のもとは思えない。そして、あそこで騒いでるデカブツは、どう見ても天窓でたまに見るタイプのバケモンだ。となると、ここは天窓から見えていた世界だ、と言う結論になるわけだが」

おお、理路整然と状況を整理して結論を出しやがった。

しかしその後続く言葉が、他人をしてコイツを変人と呼ばせる所
以なのだろう。

「何故に俺のデジカメはこういう大事な時に電池切れを起こしてくれてるんだ。神様の馬鹿」

現状どういう事態か、本当に把握できてるんだろうか。

…まあいいんだけど。

「その様子なら大丈夫そうよの」

男連中は放っておいても大丈夫と見たのか、苦笑して僕の肩に手を乗せる姉さん。

「あ、うん。柊山も起こさなきゃね」

流石にヤツラと同じように引っ叩かれるのは見るに忍びなかったの
で、膝立ちになり横抱きにして軽く揺すって見る。

「ん…こーちゃん…」

仲の良かった頃に彼女が呼んでいた僕の名が、若干苦しげな声で囁
かれ、薄っすらと目が開いた。

「ふむ。こちら問題なさそうじゃな」

「うん、そうみたいだね。よかった」

ホッとした僕の正面に回った姉さんが、彼女の顔を覗きこんでその
まま僕を真正面から見据える。

じつと無言で瞳を見つめられ、どうしたのかと尋ねようとすると、
一言ポツリと呟いてふいと視線を外された。

「緩んだか」

「何が？」

「…さて、ではあやつ処理をせねばならん訳だが。宏一」

僕の疑問を遮って、若干哀しげな顔でそう言ったと思ったら、いき
なり、その、なんだ。

「ね、姉さん？」

何？と思った次の瞬間には、いつもの姉さんが、いつものように穏やかな笑みを浮かべて。

ゆつくりと僕の唇に、その柔らかい唇が重ねられたんだ。

一瞬のような、何時間も経ったような、恍惚とした時間が僕の脳髓を溶かした。

僕に姉萌え属性は無い…と思いたいが、姉さんはやっぱり弟萌えだったのか？

「な、な、な、な、な、な、な」

触れた唇が開き、更に艶かしい感触の、熱いねっとりとしたモノが、僕の中へ進入を図ろうとしている最中、僕の膝の上でまさに今、完全に目を覚ました柊山が、特等席状態で僕ら二人を見上げて打ち震えていた。

「何やってんのよアンタあわあああ！」

黄金の左。

超高校生級の身体能力を誇る柊山の渾身の一撃がアッパーカットのように僕のアゴ目掛けて飛んだ。

どう見ても直撃です、短い間のお付き合いでしたがありがとうございました。

「まあ落ち着け梓嬢ちゃん」

バケモノに喰われる前に、柊山に叩きのめされるのかと思ってしまいました。姉さんの手があの凄まじい一撃を難なく受け止めてくたさったので、難を逃れることができました。

持つべきは姉上様です。

殴られるような原因作ったのも姉さんだけだね。

「え？何ここ。え、何がどうなってるの？ってあれ何？」

がばつと身体を起こした柊山が、辺りを見回し現状の把握に…って、今それどころじゃないから。

「説明はまた後でな。とりあえず宏一、嬢ちゃんを連れてどこぞに隠れておれ」

頷き返し、柊山の手を引き駆け出す。

「え？だってあのおつきい動物って言うか恐竜？ていうか、あれって何？なんなの？」

「いいから！」

とりあえず目に付いた大木の陰に滑り込むと、薄情な八馬が以外にも放心したままの山田君を連れて、もう既に先客として隠れていた。

まあ、盾代わりに居ないよりはマシだろう。

「…なんか今不届きな事を考えなかったか？って、宏一っ！先生

はどうしたんだよっ」

「わかんないよ、柊山連れて隠れてろって」

心配なのは僕だって同じだ。

いや、それどころかきつと世界中の誰よりも、だ。

気になった僕らは、大木の陰からそつと覗き見ることにした。

あのバケモノに姉さんがやられてしまうシーンを見ることになるかもしれないのに、何故だか僕には一種の安心感があつたのも確かだ。

見れば校舎の残骸に頭を突っ込んだバケモノは、コンクリート製の教室の重さをモノともせず、首輪のようにぶら下げながら、こちらに向かって巨体を揺らして近づいてきていた。

「ねえ、あれって本物なの？嘘でしょう？」

柊山の震える声が、耳朵を打つ。

僕だって信じらん無いんだから、聞かないで欲しい。

でも、本物なんだろうな。

夢でも無いと思う。

なんたつて、ついさつき触れた唇の感触が、同時に口腔に広がったいつも吸ってる姉さんのタバコの匂いと共に、恐ろしいほどに生々

しく思い出されるから。

どんどん近づいてくるバケモノ　もっドラゴンでいいや
は、明らかな意思を持って僕らを襲おうとしていた。

どう見ても本能に従って食欲を満たすのを最優先にしています、と
いった感じなんだが、どこか違う。

僕らの世界の生き物にはありえない、十文字に刻まれた虹彩を持つ
瞳に知性の光を伺わせる輝きを見せて、僕らを睨みつける。

裾を風にたなびかせた白衣のポケットに両手を突っ込んで、いつも
のように啜えタバコでピンと背筋を伸ばして立っている姉さん。

姉さんがやられたら、間違いなくこっちに向かってくるだろうなと、
そう考えただけで正直な所僕は逃げ出したい衝動で一杯だった。

だけど、肩を抱いて震えている柊山と身を挺してくれている姉さん
の手前、後ろに下がる事は出来なかった。

何より、姉さんは隠れていると言っただけで、逃げろとは言ってい
ないんだから。

まあ、足がすくんで逃げ出そうにも身動きできなかったと思うけれ
ど。

で、さつきから放心状態の山田君がようやく息を吹き返したみたい
で、何を血迷ったか割り込んできてくださりやがった。

「ひ、柊山さん。安心してください。この山田、命に代えましても

……」

お守りします、と続けたかったんだろうけど。

「こーちゃん」

うるうるの瞳で僕を見上げて本日3回目の懐かしい呼びかけに、僕も自然と落ち着いた気持ちになれた。

力は人一倍強くても、やっぱり女の子だなあと思ったのは失礼だろうか。

「柊山……。きつと大丈夫だから」

ね？と重ねて言った僕の言葉に、彼女の瞳の堤防は決壊してしまった。

山田君は、軽く無視された自分の一世一代の台詞に愕然としてたけど、知ったこっちゃない。

巨大なコンクリート製のネックレスをしたままのドラゴンが、姉さんの目の前にまで迫ってきていたから。

「ふう……。久しいのぉ、これをやるのも。さて、宏一！しっかり嬢ちゃんを守っておれよ！」

言っや、姉さんの雰囲気が一変した。

口元を拭う様なしぐさと共に、僕に背を向けた姉さんは、どう見てもいつもの姉さんなんだけど、長い付き合いから言わせてもらえば、

まったく違う、何か別のものに変わったような雰囲気をもった、姉さんだった。

腹にまで響く雄たけびをあげる、異形の生物、ドラゴン。

先ほどまでとは違い、まるでそれは威嚇の為と言うよりも、恐れ慄いてあげる、悲鳴のように聞こえた。

「ふん、今更尻尾を巻いて逃げる気か？そのような都合のよいことなど、許してやるわけがなかるう！」

姉さんがそう言った途端、白衣を残してその姿が僕の視界から掻き消える。

そして激しい衝撃音が聞こえたかと思うと、あの巨体が大きく揺れた。

目にも止まらぬ素早さで、姉さんが蹴りや突きを繰り返しているのだと判ったのは、何十トンもありそうなドラゴンが、聞くに堪えない情けない鳴き声をあげてその場に崩れ落ちてからだった。

圧倒的で、一方的な暴力の奔流。

ドラゴンは、逃げ出す暇も、反撃に転じる機会も得られぬまま、大地に横たわる事になったのだ…。

地面に捨て置かれた白衣を再び纏い、そのポケットから取り出したタバコに火をつけ、美味しそうに空に向けて煙を吐き出す。

「…まあ、これぐらい痛めつけておけば、我らに手を出す気も失せるである」

およそ戦車でも持ってこなければ相手も出来ないようなバケモノを相手に、このセリフである。

「つか、手を出すも何も、次の機会があるんだろうかってくらい死に掛けになってる気がしないでもない。」

どれくらいかっていうと、恐る恐る木の陰から出てきた僕らの目には、当然倒れたドラゴンが目に入るわけで。

硬そうなウロコを持っているにもかかわらず、あちこちが裂け、骨やら体液やらその他いろいろなか身体から飛び出していた。

もう、なんと言ってよいやら。

問題は、それでもコイツがまだ死にきっていないって事だけれども、まあ時間の問題だろう。

しかしながら、実際見ていた僕らが言うのもなんだけど、どこの誰が身長こそ日本人女性の平均値をかなり上回っているとは言え、全体的にほっそりとした体格の姉さんが巨大生物を倒したなどと信じるだろうか。

街を歩けばその容貌から結構な数の男達が振り返り、お供をしている僕を憎らしそうに睨みつける。

そんな姉さんが、およそ自分とかけ離れたサイズの巨獣を素手で倒せるだなんて。

おまけに返り血の一滴も浴びていない。

呆然とした僕らを尻目に、姉さんはコキコキと身体を捻り、ぶつくさとなにやら呟いている。

「ふん… 久々だと力の加減がわからんな」

力の加減をしていたつもりでアレですか。

「すっげえええええええええええ！先生っ！一生ついて行きますっ！」

八馬の馬鹿が、大声を上げて姉さんを賞賛し、その勢いのまま瀕死のドラゴンの観察を始めた。

危ない時に真っ先に隠れていたくせに。

まあ、とんでもない事が大好きな奴にとっては、これ以上ない素敵さ加減なのだろう。

跳ね回るようにして肉塊となりかけている襲撃者をチェックしている八馬をよそに、僕は姉さんに尋ねた。

真っ直ぐに目を見て、だ。

「何がどうなったらこんな事が出来るのさ」

「あー、これはじゃな」

「趣味が高じて習った何とか言う武術のおかげだとか言うのは却下だからね」

「何とかではない、捨刀流と言う名が…ではなくて、だ。あー」

頬をこりこりと掻きながら苦笑いする。言う気満々だったようだ。どこの誰がそんな言い訳信じるんだよ。

「じゃあ、実は私は某国の『さいぼおぐ』とか言う奴だったのじゃ」

「じゃあって何だよ、じゃあって。嘘つくなんて、姉さんらしくないよー!」

簡単には誤魔化せないと察したのか、姉さんは「ふぬ」と唸ってタバコを携帯灰皿に放り込み、豊かな胸の前で腕を組んで長考に入っていた。

風の音と、ドラゴンの今際のうめき声。

それに似合わない八馬の嬉しそうな声だけが、僕らの沈黙を包んでいた。

「実は、私はおぬしを守るために遣わされた、某国の戦士なのじゃ」

「で、僕はその国の王子様なワケ? だから、そういうのはいいからやっとな口を開いたかと思えば、まあたそう言う三流ライトノベルのネタみたいな事を。」

「そうは言っても宏一よ。どう説明した所で、信憑性に欠けると思うんじゃないの」

組んでいた腕を越しにやり、ふんぞり返るようにして背骨をコキコキ鳴らす。

ふんぞり返ったせいで強調された胸がその巨大さをアピールする。

ついでに鳴らした首からの音は、ひどい肩凝りでも引き起こしているせいなのだろうか……じゃなくて、だ。

どう見ても姉さん、何か知ってて隠してるだろ。

多分だけど。

いや、もう当社比で400%くらいの確率で知ってるんじゃないだろうか。

この世界がどういいうところで、ここにどうして僕らがいるハメになっているのかも。

説明を要求する！って感じで断固とした態度を取ろうとしている僕だったけれど、他の連中はより混乱していたわけで。

「こーちゃんっ！」

柊山が、がしっ！と僕にしがみついていたのである。

ここ最近聞かれなかった呼び方である。

僕も混乱しそうです。

「何がどうなってるの？ 瞳先生何であんなに強いのか？ どこどこ？ あれなに？」

興奮からか混乱からか、気になった事柄を僕に向けて投げつけてくる。

「いや、柊山。僕に聞かれても……」

「そうなの？ だって山田君が『こつこつのは野見山が慣れてるんじゃないか』って」

そういう柊山の背後で、うんうんと頷く山田君。

それは間違った認識です。

「……」か山田君、天窓遭遇率が高いからって、僕がその中の事とか諸々にまで通じてるわけじゃないじゃん。

「それを言うなら八馬の方が散々観察しまくって、少なくとも僕よりは詳しいよ。下手な研究者よりも実際に天窓見る機会多かったはずだし」

「……それもそうね」

顎に人差し指を当て、小首を傾げる。

うむ、むっちゃ可愛い。

って、姉さん。話が逸れて助かった、って顔して何無関係決め込んでるんだよ。

仕切りなおしだ。

「説明して、姉さん。何であんな事が出来るのか。ここがどういうところで、なんで姉さんはそんなに平気でいられるのか」

僕は真正面から、嘘やごまかしを許さない態度で、姉さんと再び向き合った。

まただんまりかはぐらかすのではと、持久戦も覚悟してた僕だが、案外あっさりと質問の答えは告げられた。

「仕方ないのお…。まあ、いずれ話そうとは思っておったし、こういう状況になった今、隠しておってもよいことはあるまい…。質問の答えじゃが、ここがどういうところかと言うのはお主らももうわかっておるじやろ。例のアレから見えておる世界じゃ」

一斉に、やっぱりと得心する。

僕だけでなく、ここにいる全員がわかっている。

理解したくなかったり、そうじゃなかったら良いなと心の片隅で思っただけはいただろうけれど。

「何故平気でいられるか、と言うのは単純な話、昔、ここに住んでおったからの」

「…はい？」

先の答えとは違って、流石にこれにはちょっとついて行けなかった。

「それって、どういうことなんですか？」

柊山もワケがわからないといった風で、姉さんに詰め寄っている。

山田君に至っては、聞こえなかった事にしようとしてもしているかの
ように、空を眺めて平静を保とうと努力していた。

僕は、それが何を意味しているのかを、心の中で何度も何度も反芻
して、認めたくない考えに行き着いてしまっていた。

そう。

僕と姉さんは、ここからいつもの日常の世界へと渡った異邦人だとい
う事。

そして、何故だか知らないが、再びこの地に戻ってきたのだという
わけだ。

それも、間違いなく無関係な3人を巻き込んで。

そんな僕らの頭上では、元の世界にはありえない、大小二つの太陽
が、何事もなかったかのように世界を照らしていた。

日が翳り、辺りが夕闇に染まってゆく。

どこに行くにしても、暗くては危険も大きいと言う事で、元の世界から一緒に跳ばされて来た、未だ息のあるドラゴンの首が突っ込まれたままの教室に潜り込み、僕らは見知らぬ世界での一夜を過ごす事となった。

砕けた椅子や机の残骸の木の部分を拾い集め、姉さんのライターで火をつけ、焚き火を起こして迫り来る闇を防ぐ。

姉さんは、辺りを見回って来ると言い残して、森の中に消えていった。

こうなると心細いところではないが、横たわっている死にかけのドラゴンが逆に僕らを襲う程度の獣達よけになるという事らしく、いろんな意味で板ばさみの状況の中、誰も口を開かなかった。

能天気な八馬でさえ、だ。

「…帰れないのかな」

突然ポツリと、柊山が今にも泣き出しそうな表情を浮かべ、僕に視線を向けてきた。

そんな事、僕にわかるはずがない。

今のところ戻る術どころか、明日を生き抜く事すら危ぶまれている僕らとしては、帰れる帰れないに係わらず、とりあえず死なない程度に状況を把握して対策を練らないといけない。

八馬は、といえば。デジカメの電源が切れてしまったと同時に、あいつ自身の電池まで切れたかのように大人しくなってしまうていた。

「ちくしょー。電池…」

電源さえあれば、さぞかし珍しくも面白い映像が山ほど取れるだろうし、生きて帰れば、どこに出しても引く張りだことになる事請け合いだろう。

あくまでも、生きて帰ればの話だが。

「先生、どこまで行ったんだろうな」

沈黙を守っていた山田君が、焚き火の炎を見つめながら、心細そうに言う。

言われて見れば、もう小一時間はゆうに過ぎている。

「ねえ、瞳先生に何かあったんじゃない」

「まさかだろ。こんなデカぶつ相手にして掠り傷一つ無かったんだぜ？」

心配する柊山をよそに、八馬は電源の切れたデジカメを抱え込んで、ありえないと言い張る。

確かに僕も心配なのは確かだ。

だけど、姉さんに何かあるとは思わない。

むしろ、僕らに何かありそうで嫌なのだが。

再び無言の静寂が辺りを包む。

時折、どこか遠くから何かの遠吠えのような鳴き声がかすかに聞こえたりすると、膝を抱えた柊山のがビクリと震える。

彼女の瞳は、今にも零れ落ちそうなほどに涙で潤んでいた。

そんな彼女に、僕はいても立ってもいられなくなって、その白くなるほどに握り締められた手に、自分の手を重ねた。

「柊山…。きつと、大丈夫だから」

ね？と重ねて言う僕の言葉に、かえって彼女の瞳の堤防は決壊してしまった。

溢れ出した涙を拭う彼女に、何を血迷ったか山田君が横から割り込んできた。

「あ、安心してください、柊山さん。この山田、命に代えましてもお守りしますから」

「…こーちゃあん」

うるうるの瞳で僕を見つめて、本日何度目かの懐かしい呼びかけに、僕も自然と優しい気持ちになれた気がした。

ここんとこ毎日毎朝、殺伐とした視線ばかり浴びてたから、余計にだ。

山田君は、自分の一世一代のセリフが無視された事に、愕然として

いたが。

「あーちゃん、大丈夫だからね」

久しぶりに僕の口から紡ぎ出されたこの呼び名に、柊山はくしゃくしゃの笑顔で応えてくれた。

「…やっとその呼び方してくれた」

泣き笑いの顔が、心に痛い。

ずっと幼馴染だったのに、いつから壁を作ってたんだろう、僕たちは。

いや、僕が、か。

「けっ！見せ付けてくれるねえ」

八馬が半ば笑いながら憎まれ口を叩いてくれる。

今はその対応が凄く嬉しい。

下手に囓し立てられるよりは、山田君も落ち込まなくて済むだろうし。

落ち着いて、と柊山：あーちゃん、の頭を優しく撫でてあげる。

「ん…」

気持ちよさ気に笑みを浮かべるのを見て、僕は今の状況を一瞬でも

忘れる事が出来た気がした。

しかし、折角和んだと言うのに、突然かけられた声に全員硬直した。

「お楽しみのところスマンが、移動じゃ。用意せよ」

「はい？」

誰も気がつかないうちに、僕の背後で姉さんがやけに不機嫌そうな顔つきで仁王立ちしていたのだ。

見たこともない、奇妙な棘のあるスイカほどの大きさの果物？のよ
うな物を両脇に抱えたまま。

普段は綺麗に巻いて、高く結び上げている髪を解き、その長い毛を
一本、先程持つて帰ってきた果物のような物に巻きつける。

ひゅっ、っと風がなるような音を立てて姉さんの手が一瞬消えたか
と思うと、地面に置かれていたソレは、ものの見事に櫛形に切りわ
けられていた。

「結構硬いのになえ。凄いわ、瞳先生」

「俺もやってみてえ。先生髪一本ください」

「断る。やりたければ自前の毛でせよ」

さすがにそれほど長い毛を持つ者は、姉さん以外に誰もいない。

残るもう一つも同じように切り裂くと、姉さんは再び髪を綺麗にまとめてしまった。

「さ、遠慮しておらず、さっさと食べよ。出来るだけ早よう移動したい」

僕らがスイカのような形に切られた変な果物を恐る恐る口に運ぶ中、姉さんは辺りの瓦礫を掘り起こし、使えそうなものを見つけては、同じく掘り出したデイバッグに詰めていった。

「で、何かあったの？姉さん」

教室に残っていた使えそうなものを詰め込んだデイバッグを背負い、僕らは姉さんに伴われて教室だったものからさよならする事になった。

別にこんな真夜中に移動しなくても、朝になってからでいいじゃないかと、僕に限らず皆もそう言いたげな顔をしていた。

「少々気になる事があっての。ああ、別に残って居たいのならば、居ってもよいぞ？私は知らぬが」

言って、サムアップした親指で背後をくいくいと指す。

振り返った先には、姉さんが倒したドラゴンの太い首。

の、さらにその先。

壊れた窓から焚き火の炎に照らされてぼんやりと見えるのは…当然首から向こうの胴体部分だけだ。まさか…傷跡が塞がってる！？

「そんな…あれだけの大怪我が？」

教室に守られていた首周辺には傷が付いていなかったたので判らなかったが、そのほかの部分についていた傷跡が、殆んどなくなっていた。

これにはさすがに全員が目を見張った。

「ていうか、今の今まで死に掛けで…。さっき触った時にやもう冷たくなつて、もう死んでるもんだとばかり」

「それは死にかけた時にこやつ等が行う、超回復の眠りじゃ。あれくらいで死んでおつては、この世界で生き延びられぬ。ほれ、ゆくぞ」

「ちゅうか、トドメ刺しとけば良いのに…」

それなら朝までいられるじゃないかとぶつくさ言つ。

八馬、結構酷いな、お前。

「別にトドメを刺しても構わんかったが…オヌシ、全部喰えたのかの？」

「は？」

「トドメを刺してしまえばこやつが発しておつた「気」が消える。喰つてしまわねば、死肉を漁る獣達が山と寄つて来ておつたぞ？」

「それはさすがに…」

「うん、無理ね。だいたい、簡単にトドメさすとか言つの無し」

そんな会話をしながら外に出る姉さんたちが続いて、僕も元の世界の残り香が漂う教室から外に出る。

その時ちょうどドラゴンの瞳が開き、こちらにギロリと向けられた。

そこには怒りや恐れなどの感情はなく、ただ淡々と生を喜ぶ輝きだけがあつた。

「せ、先生、痛めつけられたのを恨んで襲いかかってくるって可能性は？」

ちよつとビビつた山田君が、姉さんに駆け寄りまたボソボソとそう聞いた。

「…まあ、後々私より強くなったらありうるかも知れんが、今のところ大丈夫である」

姉さんの言葉が判るのか、ドラゴンは低く唸るように咽喉を鳴らして眼球だけを動かして僕らを順番に見つめ、そして再びさっきの眠りに付くためか、ゆっくりと目を閉じて死んだように動かなくなつた。

動かなくなつたドラゴンに別れを告げ、何故こんな事になつたのだろつかと思いつつも誰も言葉にできないまま、見知らぬ世界への一歩を刻み始めた。

人の背丈など軽く凌駕する草花や、見上げても穂先が何処まで伸びているのかわからない樹木。

岩の壁だと思っていいたら樹の幹だった、なんていうのは当たり前にあつた。

姉さんに先導されて何とか歩いてはいるが、柊山や八馬は無駄口を叩いている体力がよくも続くものだと感じしてしまう。

「さっきのドラゴンさ…まだ直りきってなかったのかしら」

「見た感じ怪我は消えてえたけどな」

「だな…」

山田君は元々無口なだけなのか、相槌を打つ程度にしか喋らない。

まあ、こんな状況でよく話をするだけの気力があるもんだと思うが、何か話していないとやってられないのも事実だろう。

星や月明かりなんてろくに届かない、僕らの視界一杯に広がる、暗く深い森。

しかも、どんな生き物が居て、どこに行けば安全なのか、と言うことすら皆目見当が付かない。

唯一、この世界の事を知っているだろう姉さんは多くを語らない。

聞けば答えてくれるかもしれないが、知ってしまうと逆に何も出来なくなるかもしれない。

さっきのあれだけ大きなドラゴンですら、「あの程度は、日本の街中にいる野良犬程度のもの」らしいから。

怖すぎる。

そんなのが跳梁跋扈している森に足を踏み入れていると言う事実が、僕らの足を重くしていた。

皆が持つ木の枝の断面が、火を灯したようにほのかな光を発し、足元を照らす。

何しろ手を繋いだところでその手が見えないくらいに暗いため、姉さんに歩けないと文句を言ったらその辺に生えていた木の枝を手折って手渡してきたのだ。

本音を言えば、教室の所に戻りたかったんだが。

「『星の小枝』と、昔は呼んでおった。太陽には遠く及ばず、月にも敵わぬ弱い光故にな。昔はそういうモノだと思って深くは考えなんだが、アレじゃな。この樹の樹液か何かが空気に触れると発光するのか、それとも……」

手折った途端に薄明かりを発した木の枝を配りながらぶつぶつ言っていた姉さんには、皆の発する空気が読めなかったのだろう。

そんな姉さんは、時折こちらを振り返りつつ、先頭に立って道を開拓している。

手にした木の枝が、まるで切れ味鋭い鉋のように、前進を阻む雑木

やら何やらを切り裂いている。

もう、こうして歩き続けて何時間経ったのかも判らない。

未だ歩けている事に、自分を褒めてあげたいくらいである。

まあ、元々八馬はスポーツ万能で天窓を追いかけるために鍛えているらしいし、山田君はいかにも体育会系だ。

終山にいたっては、無駄に体力が有り余っているために、僕の背負っていたデイバッグまで持ってもらってる始末だ。

だが、その鬼のような体力も、栄養補給が伴ってこそである。

元の世界での昼食以降、食べた物といえば、スイカによく似た果物っぽい何かだけ。

それ以外には何も口にしていないのだ。

下手に生水なんて飲めないし、その辺に生えている物も、姉さんに聞かなければ判らない。

野生動物を捕らえるにいたっては、下手するとこちらが捕食対象だ。

下手に動けば命が幾らあっても足りなくなるだろう。

だから、姉さんに進言したのは、間違っていたとは思わない。

ただ、間が悪かっただけさ。

「…あの、姉さん？そろそろ何か…」

「しっ！」

何か食べ物探さないかと進言しようとした僕を制し、手にした星の小枝を地面に突き刺すと、同じように明かりを消すようにと手振りで指示された。

何があるのか知らないが、この世界で姉さんの言うことを聞かなければ生き永らえるのは難しい僕たちとしては、従うほかに無かった。

暗いの怖すぎ。

姉さんは無言で辺りの気配を探っているようだった。

聞こえてくるのは風の音と、虫の音と、何かが周りでうごめく気配…って！なんと、無数の光る眼が僕らのまわりをぐるりと囲んでいたのだ。

「なに…アレ？」

真っ暗すぎてよくわからないが、光る眼を持つ何かが一斉にこちらを襲うべく、集結しているのは間違いない。

「…静かにしておれ。喧しい」

静かにしても騒がしくても、恐らくは周囲を十重二十重に取り囲まれている状態はそのままなわけで、僕らは微動だにできず、姉さんの次の言葉を待っていた。

「……来おったか、存外早かったの」

舌打ちと共に吐き出したその呟きに耳を澄ませてみると、樹々のざわめき混じってかすかに聞こえてくる音があった。

姉さんの言葉を勘繰れば、僕らを追うものなのだろうか。

だがこう暗くては何も出来やしない、と思った時、まばゆい光を発する何かが突如として現れ、暗闇を切り裂いた。

「カラドリウス……また厄介なモノを引き連れて来おったわ」

姉さんの呟きが聞こえる。

だがソレを確認しようとも、満たされた輝きが暗闇に慣れていた僕らの眼を焼き、周囲の常闇の森を照らす。

周りが何も見えない中、電子ライターの作動音がかちりと響き、姉さんが嗜むタバコの匂いが漂ってきた。

「カラド…何？」

聞いても答えは返らない。

ただ、僕らの周りにいたであろう何か達は、輝きが合図だったかのようにギチギチとした音を上げながら迫ってくる。

その足音が迫る方向に、さらに險越しでさえ明るく見えるほどの閃きが巻き起こった。

今度は大気を割るような轟音とともに、まるで髪が逆立つようなちりちりとした肌触りの空気を生みながら。

さすがにこの展開は誰もついていけないようで、目が慣れてさえ、上を見上げたくないと思っっているのが過半数だった。

少数意見をお持ちの人物は推して知るべし。

「でっけえ…鳥？が、ひのふのみの…5羽か」

八馬だけが空を見上げ、呆然と呟いていた。

姉さんは平然とタバコを燻らしながらも、辺りを油断なく探っているようだ。

柊山も山田君も、結構いつもどおりのように見える。

見える気がする。

多分もう、事態のインフレで多少の事では驚かなくなってるのかもしれない。

僕がおしっこちびりそうだったのは内緒だが。

嫌々ながらも頭上を見上げれば、眼に入るのは空を覆う巨大な樹木の、それだけでも大木といって差し支えない大きさの枝々と、その隙間を縫うようにゆったりと飛ぶ、巨大な翼。

白いのが4羽と、それらを圧倒する大きさの紅いのが一羽。

先程閃光が走った方に眼をやると、焼け爛れた蟹とも虫ともつかないような奇妙な節足動物が折り重なるようにして、燻りながらその屍を晒していた。

ゆつくりと高度を下げてくる巨鳥が今の光を放ったのならば、僕らは九死に一生を得たわけである。

エサの取り合いでなければ、の話だが。

暫くの間上空で旋回を続けていた巨鳥たちであつたが、紅い鳥が実際高く鳴くや、一斉に翼を畳んで手近な枝にその羽を休めた。

まるで取り囲むように樹木に降り立つ巨鳥たちをよくよく見れば、その背には、まるで戦士の魂をフロプトの元に送り届ける使命を持つ、ヴァルキュリヤのような美しさを持った、純白の翼を持つ者達が居た。

「天使…」

柊山が呟く。

思わず口から出てしまつのも宣べなるかな。

彼女ら…いや、彼らか？は、元の世界で御使いと呼ばれるに相応しい美しさを備えていた。

そして鳥の背から降りるや手にした槍を掲げ、その黄金色の髪だけを風に棚引かせ、まるで微動だにしなくなった。

そして残る一羽、他を圧倒する巨大さを持つ赤い鳥は、僕らを守る

ようにして生えるそれなりに大きな周囲の木々を小枝のようにへし折りながら、目の前に着地した。

その巨大さは、予想以上に圧倒的だった。

空を飛ぶジャンボジェットが目の前に降りて来たと思ってくれれば、実感できるかもしれない。

その紅い巨鳥が、長い首を曲げて僕らを覗き込むように見下ろしてくる。

果たして、その頭部に人影が現れた。

未だ続く上空高くで輝く光源が、その姿を浮かび上がらせ、シルエットで僕らに見せ付ける。

黄金率もかくやと言うほどの優美なラインを見せ付ける肉体に、蜂蜜色の巻き毛。

その背に伸びる、白い“二対の”翼。

最早羨ましいという気すら起こらないほどに見事な造型だった。

僕らを彼女たちはどうしたいのか。

保護でもしてくれるのか、それとも連行しに来たのか、どちらでもいいからこの物騒な場所からとっとと移動させてもらいたいもんである。

腹減ったし。

横では姉さんが、「…さて、不思議と殺気は感じぬが。どちらにせよ多勢に無勢、こちらは貧弱な者達のみ。私と宏一だけならば、囲みを破って逃げられぬ事もないが…益々持つて厄介であるな」と物騒な事を呟いていた。

そんな姉さんの独り言と、何を言っているのか判らない綺麗な声が僕の耳朵を打ったのとは、ほぼ同時だった、はずだ。

誰の声だ？と思ったとたん、目の前の鳥が先程とはまるで違う、焦っているかのような短く甲高い鳴き声をあげた。

それにつられて視線を上にとやると。

白い翼を開いた、銀色の瞳を持つ端正な顔立ちを持つ女性が、僕に向かって落下して来る所であった。

その美麗さに一瞬心を奪われた僕は、どう対処すれば良いのか判らないまま、何か柔らかいものに押しつぶされ、何故だか幸せな痛みの中で意識が遠のくのを理解していた。

3・変調

「あ、姉さん。ソレ美味しい?」

「自分で確かめよ」

ぐり、っと僕の口目掛けて差し出される、奇妙な蛍光色の何か。

恐る恐る齧ると、ぶつつりとした齒ごたえの後に僅かな苦味とそれを包む酸味を含んだ甘みが広がる。

それ自体は不味くはないが、味付けが薄すぎてなんとも馴染めない味だった。

「ほんと、もうちょっと味付けに気を使えばいいのにね」

僕の横で、平然とぱくついている柊山。

結構タフだねえ、正直意外です。

八馬はと言うと、コイツの神経はナイロンザイルで出来ているとの世間の評判どおり、味も見た目もまるで無視して、快調に咀嚼能力を発揮しております。

「味はともかく、量だけは満足した」

そう言って、膨れた腹をぽんぽんと叩く。

なんて調理人に失礼な奴だ。

山田君は、状況が良く飲み込めていないようで、未だに茫然自失中。それでも手にした肉に齧り付いては飲み下しているあたり、それまでの空腹さ加減がわかるうというものだ。

かく言う僕は、先に言ったように口に合わないことこの上ないので、食傷気味です。

「姉さんが作ってくれたらよかったのに……」

「無理を言う。下手をすれば、我らが食卓に乗っていたかもしれないのだぞ？」

……嫌な事言うなあ。

仕方ないので、味わうのは放棄して、胃袋を満たすことにだけ専念する。

で、だ。

今現在の状況はといいますと、これがまたなんというか。

姉さん曰く「良いふうに取りれば、客人扱い。軟禁とも言いが」といった感じで、牢屋に放り込まれなかったのが不思議、だそうなの。

お食事を提供されてそれなりの扱いをしてもらえてるってのが、どうにも胡散臭いというのが皆の総意であった。

実際、なぜ連れてこられたかが判らない。

怪しい旅人に一宿一飯を恵むのが趣味ってワケでもないだろうしね。
ただ捕らえるだけなら、あんな状態で目が覚めるはずがない。

ちなみにあんな状態って言うのは、あまり口に出すのがはばかれるので姉さんたちには言っていない。

どんな風だったかと言うと…

何か柔らかいものに押しつぶされて気を失った僕が目を覚ましたのは、磨き抜かれた石の壁を持つ、綺麗な部屋の寝具の上でした。

それだけならまだ何とか状況的に納得はいく…と思い込めたんだけど、横に綺麗な見ず知らずのおねいさんが添い寝してくれていたのには、思わず大声を上げてベッドから飛び降りて、壁際に逃げ出してしまいました。

流石に素っ裸の、ソレも美貌の女性が横に寝てたら驚くさ、マトモな日本の高校生ならば。

しかも背中に翼が生えてたら、ねえ。

僕の悲鳴を聞きつけたのか、外から扉を叩く音が聞こえたけども、そのおねいさんが一言叱責したら、すぐ収まった。

僕をじつと見つめて、何かを話しかけてくるんだけど、さっぱり判らない。

おまけに、僕も素っ裸。

壁に張り付いてる場合じゃないんだけども、どうしようもない。

流石にこのままじゃ拙いので、壁に掛かっていた、やけにふわふわした薄手の毛布のようなものを拝借して体に巻きつけて取り合えず自分のお粗末な物を隠したんだが、それを見たおねいさんがやけに嬉しそうな顔をしたのはなんでだろう？

で、コレで一安心と思ったんだけど、あああ、失敗。

僕だけ隠しても意味がないんだよ。

こんな綺麗なおねいさんの裸ならじっくり見ておきたい所だけど、実際目の前にいたら眼のやり場に困るとは、何と言う現実。

と、そこで眼に入ったのが、おねいさんの胸元できらりと光る紅い石。

それって僕の形見のペンダントでは？と思い自分の胸元を思わず探る。

あった。

こんなへんてこな紅い石とよく似たのもあるもんなんだなあと思わずまじまじと見つめて確かめた僕だったが、お互い裸なのを思い出して再び慌てて後ろを向いた。

あっちを向いたりこっちを向いたり、一人で視線をさ迷わせてあた

ふたと拳動不振な僕の行動の理由が判ってもらえたのか、おねいさんはにこりと笑って自分が背負う綺麗な白い羽で、自分を包み込んだ。

これでどう？といった顔で、こちらに向き直る。

いや、その、素っ裸よりも逆に、その、あの。

鼻血出そうです。

とりあえず腰に厚めに布を巻いて、現状を再確認することに勤める。

先ずは姉さんたちの状況を知りたい所だが、出来る事といえば目の前のこのおねいさんに尋ねる事ぐらい。

でも他の4人はどうなったのか知らないか、と聞いても、そもそも言葉が通じないのかして、首を傾げるだけ。

僕が天井を見上げてこれからどうなるのかなと途方に暮れていると、おねいさんがベッドサイドに置かれていた透明なベルを振り、透き通った硬質な音色を響かせ人を呼んだ。

ほんのわずかな沈黙のあと扉がノックされて、恐らくは側仕えの人なんだろう、落ち着いた雰囲気を書わせたとした女性が入ってきた。すらりとした長身で、肩までの黒髪をゆるいウェーブで揃えた、姉さんよりも若干年上といった感じだろう。

いわゆるメイドさんなんだろうか。

おねいさんは、僕にはわからない言葉で一言二言喋り、その人に何

らかの指示を出したようだった。

メイドっぽいおねーさんはソレを聞くとゆっくりとお辞儀をして即座に退室、今度は何かカゴを持ってすぐに戻ってきた。

手にしていたカゴには、僕の着ていた学生服と、なにやら白い薄絹のような衣。

僕の服は当然すぐ判ったけれど、もう一方は、何だろうかと数瞬悩んだ。

もしやどちらかを選べとか？とも思ったがそれは取り越し苦労で、おねいさんの物であった様だ。

服を手渡されて、いつもの様に「あ、すみません」と頭を下げた時に、メイドのおねーさんの手が伸び、僕の頭を柔らかく胸元に抱え込んだ。

何事が起こったかかなりの時間理解できなかったが、何をされているか判ったとたんに抜け出そうと力を込めると、メイドのおねーさんは僕をあっさりと開放し、にっこりと微笑んだ。

おねいさんの方を見ても、同じようににっこりと微笑むだけだし、さっぱりわけが判らない。

とりあえずさつさと服を着ようと、手伝われそうになるのをジェスチャーで何とかお断りして、部屋の隅っこでこそそと身に着けた。ようやく、どうにかこうにかおねいさんを真正面から見れるわけだが、そこで僕はようやく気がついた。

昼飯を味わう事も忘れて没頭してしまった、あの映像に写っていた、あのときの女性だ、と。

だけど、あの時と違って、金髪の髪は、なにやら白い羽を模した冠のようなもので纏められ、襟足だけが覗いている。

綺麗な金髪なのに、もったいない……じゃなくて。衣を纏っていてさえ、十二分に刺激的すぎる。

再び目のやりどころに困っていたら、また苦笑して背中の中羽で自分の体を覆ってくれた。

しかし、僕だけ他の4人と別に分けられてるのはなんでだろうか。

首を捻っても答えなんて出てこない。

もしかしたら他の4人も似たような接待を受けていたりして。

八馬はきつと喜ぶだろう、男としては極めて正直なやつだし。

山田君の反応は知らん。正直どうでもいい。

でも、姉さんと柊山が色男な翹翼人に接待されてる図を想像したら、気分が悪くなったので止めた。

着替えを終え、さつきまで腰に巻いていた借りた毛布を壁の出っ張りにかけようとしたら、おねいさんが後ろからやんわりと首を振り、僕の手から取って僕の肩にかけてくれました。

…ああ、これって毛布じゃなくて、マントなんだ。正直僕には似合わないよな、と思っっていたら、手招きしつつ彼女は部屋を出た。

続いて部屋を出た僕が見た光景は、ちょっと想像を超えていた。

扉をくぐったら普通そこにあるであろう廊下というものが、ここにはまったく存在しなかったのである。

部屋の前に、2 mほど突き出たステージのようなものがあるだけで、あとは上も下も幅数百メートルは有ろうかと言う吹き抜けなのだ。

はるか彼方でかすんで見える羽ばたきは、おそらくこの住人なのだろう。

そりゃまあ、空を飛べるんだから、別に不自由は無いんだろうけど、飛べない僕にどうしろと？

天井は様々な色の半透明な何かに覆われ、空を拝むことは出来ない。

下は、というと……恐る恐る、這い蹲って覗いてみれば、はるかな下方にどうやら水か何かが流れてるような音が響いてくる。

巨大建造物の吹き抜けの、その最下層に河を作ってるのか…？

ともかく落ちたら死ねますか、これは。

驚く僕をよそに、先程のメイドさんと額をくっつけて、なにやら無言で佇んでいるおねいさん。

やけに絵になる光景に、僕は声をかけるのも躊躇われた。

間違っても落ちないように、這ったまま後ろにずり下がる。あまりの高さに股間が縮み上がったままだし不恰好この上ないが、落っこちるよりましだ。

と、ずり下がった足が何かに当たる。

自分の股間越しに覗き込めば、麗しい脚が2セット。

ちょこつと見とれていると、片方がこちらに向き直り近づいてくる、思ったら突然僕を上から抱き抱えて。

そのまま空中に放り出してくださいました。

「うわわあああああああああああ！」

恭しく頭を下げる美女メイドさんの姿が逆さまになって遠ざかるのを視界の片隅に入れたまま、自分の状況を正しく認識したくない脳が、意識を放り出しそうになるのを無理やり押さえ込んだ。

せめて僕を放り投げたおねえさんに一言ぐらい文句言ってやりたかったし。

「せめて何か声かけてからにしろーって、一緒に落ちてるーーー！ー！ー！しかも翼、体に巻いたままー！ー！ー！？」

落下とともに速度が上がる中、その体に巻いた翼を広げて飛んでください助けてくださいと叫んでみたものの、伝わらないのか、聞こえないのか一向にその気配がつかがない。

正直もう駄目だと覚悟した。

もう、眼を瞑って神様でも仏様でも悪魔でも邪神でも何でもいいから助けてくれ、と祈るばかりだ。

まあ今まで神様に祈った事は皆無なのでご利益なんてある訳がないんだが。

と、馬鹿なことを考えて恐怖を紛らわせていたら、いきなりがくと身体に衝撃がかかった。

恐る恐る眼を開くと、背後から僕に抱きついたおねいさんが真っ白な翼を広げ、ゆったりと滑空していた。

意外な力強さで僕を支え、空中を舞う。

慣れてしまえば案外怖くない。

しばらく空中散歩としゃれ込むのも良いな、と思いきやすぐに速度を落とし始めて、他よりもひときわ大きめの扉の前にある、岩のステージに降り立った。

さっきの部屋よりも大きなステージが設けられたそこには、両脇に槍を携えた屈強の警備員つぱい翅翼人が立ち、僕らを出迎えた。

大仰に、槍の石突きって言うのかな？尻の部分でステージを叩き、何かを叫んで重そうな扉を片手で押し開く。

開いた先は、今度こそ予想の範疇だった。

豪奢な装飾で飾られた、だだっ広い広間の真ん中に、これでもかというほどの大きさのテーブルが、ずどんと鎮座している。

そして、そのテーブルには、何故だか威風堂々とタバコを啜えて紫煙を吐き出している姉さんと、あちこちきよるきよる見回している柊山、手当たりしだいに部屋の中を見て回っている八馬に、居心地悪そうに縮こまっている、山田君の姿があった。

姉さん以外は、こちらの人と同じような、ひらひらの衣に着替えていた。

体格のいい八馬と山田君はもちろん、柊山も中々お似合いである。

ちらちらと目だけを動かして、拳動不審な山田君。

どうも、目のやり場に困っているようで、顔が真っ赤だ。

部屋の隅で待機している人達に何か声をかけたおねいさんは、僕を姉さんと柊山の間に空けてあった椅子へと導いて座らせ、自分はテーブルを挟んで反対側に座る。

少し遅れて八馬が席に着くとすぐに、僕らが入ってきた扉とは反対側にある、ほんの少しばかり小さな扉がゆっくりと開かれ、大量の料理が配膳され始め、今に至っているのである。

至っているのであるが…。

「何怒ってるのさ」

「別に怒ってないわよ」

あんまりにも僕を見る眼がきついので一言尋ねたら、間髪いれずに帰ってきた言葉がこれ。

なによその変な格好、と言いながら、がぶりという擬音がぴったりの勢いで何かの肉の塊に喰らいつく。

このマントがお気に召さないらしい。

それにしても、もうチョット女の子っぽく食べてもらえないもんだろっか。

ねえ、と反対側に座る姉さんに振ったが、「ん？何がじゃ？」と一瞥も無しにいつものように元気よく、詰め込むようにして食べている。

いや、良いんだけどね、健啖家なのは。

そんな食欲で、よくもまあその体型が維持できるよ、二人とも。

ああ、対してお向かいの席に座るおねいさん、実に優雅にお食べですこと。

手掴みで肉をちぎり取って口に運んでいてさえ、である。

まあ、西洋式でもないこの食卓のマナー、何を持って正しいのかわからないので構わないとは思っていますが、どいう文化なんだろう。

「で？お楽しみだったのか？」

二人に挟まれて居場所が無い状態な僕に、八馬が骨を啜えたまま、柊山越しにこちらに小声で話しかけてくる。

僕の左右で、一瞬ピタリと動きが止まるお二方。

まあすぐ再起動したけれど。

何にもありませんでした、といって信用してもらえらるんだろうか。

まあ、お互いに素っ裸を見たし見られはしたわけだから、何にも無かったとはいえないのかもしれないんだけども。

その時の光景を思い出し、思わず頬が緩む。

いかんいかん、ここがどういいうところで、何がどうなってるのかもよく判ってない状況なんだから、ちよつと落ち着け、僕。

先ず現状を把握する事が肝心なんだから、何をするにしても。

とは言え、言葉も通じないんじゃ、元の世界に戻る方法知りませんか？と尋ねることも困難だし。

とりあえず八馬の質問に、「んなわけあるか」とだけ答え、食事を再開する。

が、やはりどうも口に合わない。

もうチョット塩味が効いてたら、まだ食べれなくも無いんだけどなあ

当たり障りの無いところで、何かの果物を手にして、匂いをかいでみる。

甘い香りがして、これならいけるかなと口にした。

「酸っぱー」

シャリリとした歯ごたえは心地良いが、味はというと何とか食べられなくはない、と言うくらいに酸味がきつかった。

「どう見ても野生種だからの。いつも食べているような果物とは、一緒にせぬがいい。アレらは農家の方々の、努力の結晶なのじゃから」

特に日本の栽培種の糖度は世界一、らしい。

もうあきらめた。

仕方なく味付けの薄い、食材不明の料理を本格的に手をつけ始めた所で、姉さんが口元をぬぐって、正面に座るおねいさんに向き直り、こう言った。

「さて、そろそろ話したいものじゃが。おぬし、名をなんと言う？」

いや、日本語通じなかったよ？

そう横から伝えようとした僕を遮ったのは、正面に座るおねいさんの口から漏れ出した、どこからどう聞いても立派な日本語であった。

「私は……そうですね、アウル……とお呼びください」

そう言つて、問いかけた姉さんではなく、僕に向かってにっこりと微笑んだ。

えらく流暢な日本語です。

ええもう、出鱈目な日本語が流布してる昨今、ここまで正調日本語が喋れるなんて、見習いたいくらいです。

しかし、僕ら何にもいいことも悪いこともしてないつもりなんだけど、一体どういう扱いになっっているんだろうか。

一目僕を見て恋に落ちてしまった、何て調子のいい話は有り得ないとして、だ。

そのあたりキチンと教えてもらいたいもんである。

その点を聞こうと思つて口を開きかけたんだけど、先に言葉を発したのは姉さんだった。

「では、アウルとして覚えておこう。それで？我らをここに連れ込んだのは、ただの人助けではなかるう？」

「ちょっと、姉さん」

そりゃあ、確かに何か裏がありまくりだとは思つけど、とりあえず礼くらいは言つておかない？実際に助かつてるんだし。

「宏一は暫く黙っておれ。私はあやつに聞いておるのだ。納得いけ

ば礼は尽くそう」

いつもの姉さんらしくない。

常日頃、僕に向かつて「礼儀は人が人として生きるために育まれた、文化の一つじゃ」と、礼を失することを厳しく諫めてるのに。

陰悪な雰囲気を纏わりつかせた姉さんに、ほかの三人もチョットびびってる。

こんな姉さんを見るの、僕だって久しぶりだもんなあ。

「別に私どもには、隠し立てするようなことは、一切有りはしませんよ?」

心外だと、穏やかな表情のままですう告げる、おねいさ……アウルさん。

こういう人、怒らせると怖いんじゃないかなあ。

無言で見つめあう美女二人。

冬の北風のような無表情さで姉さん対応していると、対照的に春の日差しのような笑顔で受け止めるアウルさんを見比べるだけしか出来ないヘタレな僕は、どうしようかと他の三人に視線を送った。

うん、みんな他人のふりしないでくれないかな。

下手に係わるとばつちりが来そうだからね、気持ちにはわからないこともないけれど。

八馬は興味津々な顔をしつつ、山田君はわれ関せずとばかりに二人とも一切口を挟む気はないらしく、黙々と口を動かしている。

柊山だけは、若干不機嫌そうに眉根を寄せて、椅子の背もたれに体重をかけるようにして大きく背をそらし、姉さん達を伺うのみだ。

まあ、端から首突っ込んでも、嫌な結果になりそうだし、ソレが正解かも。

僕もそつちのお仲間、と思つて位置を少しづつずらしてつ

なに押し返すんだよ。

「…なんだよ、もう」

「アンタなんか、あの美人な天使といちゃついてればいいのよ！」
 って言われても、連れ込まれた時、僕気絶してたわけ。

好きでアウルさんと二人きりになったわけでもないんだけれど？

ああ、そういえば。

「あの、ちょっとお聞きしたいんですけど」

「はい、
 なんです」

「宏一。話の邪魔をするでない、後にせい」

恐る恐る右手を小さく差し上げて、疑問を尋ねようとした僕に、対照的な言葉が飛んできた。

「え、いやあの。僕、気絶してここに運び込まれたわけですよ？ 何かがぶち当たった所までは記憶にあるんですけど、あの、何がぶつかったのか、知りたくて……」

先ずは最初に接触した時点からの疑問をと思い、そう言った途端、何故か沈黙が……。

姉さんと柊山は、ぶすっくれて明後日の方を向いてしまった。

八馬は嬉しそうな顔して笑ってるだけだし、山田君なんかはやけに悔しそうな顔して「何でアイツばかり」なんて、訳のわからないことをぶつくさ言い出した。

正面に向き直ると、アウルさんが頬を染めて、俯いて……照れてる？

「あ、ああの。もしかして落ちてきたのって」

「はい、私です。やっとお会いできたのが嬉しくて、はしたない所をお見せしてしまいました」

と熱い吐息なんて吐いちゃってくれたりしてなんの事やら。

するってーと、あの、柔らかいものは……。

その、姉さんに勝るとも劣らない、脅威の驚異な胸囲を誇る、アレですか？

男の夢、きよにう。

ご馳走様でした、ありがとうございます、当たった感触しか記憶に残ってないのが残念ですが。

思わず頬が緩むのが自分でもわかる。僕の照れてるのが楽しいのか、アウルさんもニコニコ顔だ。

ふとアウルさんと視線が合って、お互い赤くなってしまったりした所に。

「おうふっ！」

思わず僕の口から飛び出た苦悶の吐息。

さ、左右から、脇腹に肘の一撃がクリーンヒットって……なんで？

「そのことはもう良い。で？何ゆえ我らをここに連れてまいったのか、と尋ねておるのじゃがの？」

テーブルに突っ伏するほどの一撃を僕に見舞った事に関してはノーコメントのまま、一向に追及の手綱を緩める気のない姉さんが、先ほどの質問を繰り返す。

「それでしたら、先程の答えからご理解いただけるかと」

さっきの答えって言うと、やっと会えた、って奴？

「あの、それって一体どういつ」

問いただそうとする僕を制して、姉さんが続ける。

「それも含めて、じゃ。オヌシ、我らを、宏一をどうする気じゃ？
事と次第によつては、私は宏一に仇成す者を、全力で排除する事に
躊躇う気はないぞ？」

姉さんの全力……あのドラゴンを吹っ飛ばしたりぶん殴ったり蹴り
飛ばしたり。

アレを対人に用いたら、跡形もなくなっちゃうんじゃないだろうか。
ソレはちよつと止めていただきたい。

姉さんを人殺しにする気なんて、僕には毛頭ないし。

いくら僕を守るためだとか言われても、だ。

「ねえ、野見山君。ちよつと瞳先生に尋ねて貰ってくれないかな」

緊迫しまくりの状況の中、柊山が僕の肩をつんつんと突付き、なに
やら聞いてくれといってきた。

「何を？」

「何をつて……帰り方知らないか、って事に決まってるじゃない」

ああ、そりゃ確かに。いや、僕だって最初に聞こうとしてただけ
どね？

「ソレくらい判るだろ、普通」

「別に帰れなくっても、俺は構わないんだがなあ」

山田君と八馬がなんぞ言ってるが、軽く無視しておこう。

さて、聞かないといけないのは確かなんだけど、今の雰囲気割り込んでいく根性は、僕にはない。

命が惜しいですから、ええ。

しかしながら、横で「お願い光線」を放っている柊山の後押しを受けて、引き下がるはずもない。

「あ、あのお、ちょっと質問があるんですけど……」

「あら、今度は何かしら？」

「後にせいと言うとるじゃろうが、まったく」

うう、想定どおりの反応。姉さん、ちょっと落ち着こうよ。

アウルさんが酷いことする気なら、もうとっくにやってるってば。多分。

珍しく不機嫌さをあらわにしている姉さんの嫌な気配を真横に感じながら、チヨットビクビクしながら聞いてみる。

「あの、えっと、僕らの世界に帰る方法って、知らないですか？」

意を決して尋ねた僕。

でも帰ってきたのは、予想外の方角からの、野太い声だった。

「帰らせるわけにはいかぬな！」

僕らが入って来た扉がいつの間にか開かれていて、さっきアウルさんと一緒に居たメイドのおねーさんを従えた、筋骨隆々のおじさんがそこに踏ん返り返って立っていた。

年の頃は五十歳くらいかな？短く刈られている金髪はところどころくすんでいて、とても美しいとはいえないが、纏う雰囲気やその体格から、美丈夫と言言葉がこれほど似合うおっさんを見たことがなかった。

壮年の凄みというのを含めれば、ダンディーといって憚らない外観である。うらやましい。

「えっと…どちらさま？」

「お父様！それにファナーまで！」

僕の素朴な疑問の呟きは、アウルさんの声で即解決した。

「あの女性はファナーさんというのか。また美人さんが増えたのは嬉しいが、おっさんは要らんな。しかし……似てないなー」

八馬のそのまんまな感想にみな頷く。まあ僕も激しく同意するが。

だがそれより何より、この人も日本語で会話してくれている。

「他の者が居るのだ。父と呼ぶでない」

「……申し訳ありません、アル・イラーフ」

叱咤され礼を行うアウルさんを片手を挙げるだけで応え、鷹揚にアウルさんに近寄り、彼女の横の席に腰を下ろした。そして値踏みするかのように僕に無遠慮な視線をぶつけてきたんだ。

どう対応していいのやら判らず、そのまま固まっていると、アル・イラーフと呼ばれたアウルさんの父上は口を開いた。

「このような者がそうなのか……。ふむ、これといって、何か違うという訳ではないのだな」

ふふん、と猛禽のような笑みを浮かべ、今度は八馬、柊山、山田君とを視線をずらしてゆく。

すると、眉を顰めてなにやらアウルさんに耳打ちし、そして、姉さんへと向き直った。

アウルさんかというと、その耳打ちにゆっくりと、小さく頷いたまま、視線を伏せて黙りこくってしまった。

どうしたのやら。

しかし、このオッサン……今度は姉さんをじろじろ見て、なに考えてるんだろっ。

って、姉さん、いつの間にまたタバコを。

「姉さん、タバコ幾つ持ってるのさ」

「備え有れば、憂い無しじゃ」

そういつて開いた白衣の懷には、カートン買いしたタバコが、左右に二包みずつ納まっていたりする。

しかし、およばれというか、野垂れ死ぬかも知れなかったのをこうして招いてもらって、お世話してもらってる立場なんだし…ねえ。

「喫煙していいか位は聞いたの？灰皿は…携帯してるか」

「うむ。そもそもこやつらが喫煙と言う習慣を理解できるか怪しいのでな。だいたいこちらの都合も聞かぬ奴らに、譲歩する気は微塵もない」

だけどと問い返そうとするも、聞く前に姉さんとの会話は打ち切られた。

他でもない、姉さん自身によって。

「我らはおぬしらに、何の恩も義理も無い。このような扱いを受ける謂れもない。早々に立ち去らせてもらいたい！」

立ち上がり一気に言い切って、啞えっぱなしのタバコを思いっきり吸い、紫煙を吐き出した。

「……その気性、覚えがあるが　　気のせいか。彼奴ならば、このような場所まで易々と連れてこられようはずが無い」

何を一人で納得してるんだか。アル・なんだったつけか…、もうオッサンでいいや。

アウルさんには悪いけど、姉さんと同じく僕もこの人あんまり好きになれそうもないし。

「お父さ……アル・イラーフ。それは一体？」

どういう意味なのか、と尋ねるアウルさんに、若いお前は知らぬかと呆れたように呟き、昔の話だと前置きして話し始めた。

えっと、僕らの件は放置ですか？

その昔、この世界には翹翼人たちが　マラーイカって自分たちの事を呼んでるらしい　に、まつろわぬ者達…敵対勢力がいたんだって。

その人たちは、アル・シャイター又っていう部族で、決して交わろうとしなかったんだとか。

総じて野蛮な人たちで、何かというとおっさん達の部族に抗争を仕掛けてきたらしい。

そんな二つの部族にとって、散発的な争いは日常茶飯事だったらしいんだけど、広い世界に散らばっていたために、長い間全面的な抗争に発展する事はなかったんだけど、でも、ついにその時がやってきた。

翹翼人たちが、今いるこの場所に移り住んできたが為に。

向こうはまったく突然に襲い掛かってきたのだという。

そして終には、双方の戦力が、それこそ部族が潰えるまでの戦いになったのだと。

完全な絶対王政国家として纏まっていたおっさん達に対して、相手は何人かの有力者が共同統治している、国家というよりも寄り合い所帯。

そんな体制の違いのせい、個々人の能力差による局地的な敗北はあれど、集団として戦闘においては、完全にその人たちを凌駕し、圧倒していたんだそう。

でも、その中に、彼らをして圧倒的な戦力差が無ければ戦闘を避けよとの指示が出されるほどの強者が居たんだって。

その名もアスティルティート。

血に塗れた漆黒の甲冑を好んで纏う、冷酷な戦士。

相手の部族の長の一人で、色々と逸話も伝わっているらしく、難しい顔をしながらオッサンは続けた。

女の身でありながら、たった一人で数万の軍勢の中を駆け抜けたとか、翹翼人が使役する戦闘用の巨大生物を、素手で打ち倒したとか、という個人的な武勇に留まらず、逸話に関しても、凄まじいものがあった。

いわく、その唇は倒した敵の鮮血で彩られている。

いわく、相對する者がその与えられた苦痛で苦しむのを見て微笑む。

そんな戦闘狂的な言い伝えに加えて、その姿を変化させ、敵陣に密かに侵入し、その陣の糧食に火をかけ継戦能力を失わせるなどという、荒ぶる戦い方からは想像も出来ないような姦計も要し、甚大な被害をもたらしたという、蛮勇なのかなんなのか、評価のし難い人物像であった。

勇猛で残忍な敵の将として常に畏怖の対象でありながら、その戦いぶりから今でも敵ながら天晴れと、賞賛を惜しまない人もいるんだって。

そして名づけられた二つ名は「艶血公主」。

しかし、その最期は誰も知らず、最後の最後まで抵抗した後、何処とも知れず姿を消したんだとか。

誰かが首級をあげたとも、自決したとも伝えられていない唯一の有能な武人で、いつか逆襲の機会を見つけて、攻めてくるんじゃないか、なんて噂が流れていたほどだったらしい。

それ故に、他にも多くの強敵が居たにも拘らず、その人が殊更大きく扱われているんだと、そうこぼした。

しかし、何でそんな人が、ウチの姉さんに関係有るような事を？

ソレってかなーり昔の話じゃないの？ウチの姉さん、まだそんなお

年じゃないんですけれど。

「私の名は、野見山瞳だ。それ以外に名は持たぬ。変な言いばかりは止してもらいたいものだがな」

ふん、と、気圧されもせずになんかいつも通りな姉さんにそう答える姉さん。

あー、なんかいつも通りな姉さんに戻ってきたっぽい。

その反応に、オッサンは更に視線を強めて睨みつけてきた。

そんな威圧もどこ噴く風とばかりに、再び紫煙を天井に向けて吐き出す。

だけど、他の三人はそれほど尋常な態度ではいらなかった。

がたがたと、瘡のような震えとともに、真っ青な顔をして、今にも倒れそうになってテーブルに突っ伏している。

かく言う僕も、冷や汗というか脂汗が出捲りだ。

にらみ合ってる二人は動きそうにないから、とりあえず僕が三人の様子を見るしかないのか…

「ねえみんな、大丈夫？」

どう見ても大丈夫じゃないんだけど、とりあえずこういう聞き方しか出来ない。

「あ、あんまり、大丈夫じゃねえ。つか、お前は何で平気なんだ」

「こーちゃん……、私、もう駄目ええ」

八馬も柊山も、一様にぶるぶると振るえて今にもぶっ倒れそうだ。

「く、食いすぎたせい……な訳ないよなあ。うえ、出てきそう」

こちら青い顔をして口元を押さえる山田君。

今にも食べた物をテーブルの上に返却しそうである。

「ちょ、ちよつと山田君。ほんとに大丈夫？」

かなりの量を食った山田君である。

今この場でリバースなんてしたらどれほどの広範囲に被害が広がるだろうか。

ただでさえ険悪な雰囲気になってるつてのに、これ以上どうにかなったら……どうなるんだろう。

「……ち、ちよつとどんな状況になるか試してみたい気もあるなあ。吐いてみる？」

「お前なあ……うえっぶ」

「ちよつと静かにして……」

僕と同様の事を考え山田君に突っ込みを入れる八馬はもう暫く持ちそうだが、柊山の方はもう限界っぽい。出しても大丈夫っぽいのは……

う…っつと。

「あの花瓶でも持ってこようか？」

「……勘弁して」

涙目で訴えられると弱いなあ。

とりあえず、背中でも摩ってあげるか。

……うわ、この服、生地薄っ。

ここまで薄いとは……気分悪くしてくれてありがとう、おっさん。

さて、冗談はともかく、だ。

柔らかな柊山の肢体に興奮してる場合じゃない。

山田君の視線が、それだけで僕を睨み殺せそうな勢いになってるし。

元気だったら僕をぶちのめしてくれてたろう。

そう思うとちよいと脂汗が滲んでくる。

なんて思ってたたら何故か不思議なことに、さすっただお陰かなんなのか、目をぱちくりさせて柊山は一気に元気になった。

「あ、ありがと。すんごく楽になったわ」

今の体調の激変は一体なんだったのだろうかと思議がる柊山。

「背中に元気になる経絡秘孔でもある、とか？」

「漫画の読みすぎ」

ちよつとした冗談だったのだが、けんもほろろにあしらわれてしまった。

元気になったとたん、不機嫌なのが戻どおり。

一体どうしろと。

気を取り直して他の二人にも声をかけてみる。

「お前らもさすってやろうか？」

「だ、断固として断る。男に触られる趣味はこれっぽっちもない！」

震えながら、さっきよりも真っ青になった顔で言われてもなあ、八馬。

とりあえず抵抗する余力も無いのか、僕の手を振り払えない山田君の方を、心を込めて、じっくりねつとりとさすって差し上げました。

俗に言う嫌がらせという奴です。

気持ち悪い真似しないでくれ！そういつて元気に跳ね起きました、山田君。

「っと。いきなり楽になったけど、何でなんだ？」

僕が知るか。

「ねえ、山本君もどうかしてあげたら？」

「八馬まで治るかどうかなんて知らないよ？」

でもまあ、別に減るもんでもないし、って事で背中をさすってあげた。

そうすると、僕が触れた途端にこれまた一気に復活して、

「お前なんぞに手当てしてもらわなくても、自分でどうにか出来た」

と力説しまくります。

人の行為を無碍にする奴だなあ。

「感謝する心がないと、彼女出来ないわよ？山本君」

「う、う、うるせえっ！言い寄ってくる奴はゴマンと居るわい！断ってるんだよ！大体巨大なお世話だ！」

いや、世話する気なんて今使い果たしました。

まあ、此処から出るにせよ何にせよ、元気で居てもらわないと。

男を担ぐ趣味は僕も八馬も無いからさ。

んがしかし、そんなのんびりした事は言ってられなくなってしまっ

た。

「ラスールっ！こやつ等を拘束せい！」

おっさんがいきなり叫びだして何かを呼んだのだ。

いきなりなんなんだよ、とは八馬の言葉。

まったく年取ると気が短くなるわ、何考えてるんだかわからなくなるわ、いい加減にしてもらいたい。

こっちは状況の把握もしたいし、ちゃんと話をする気満々なんだから、会話して欲しいよね。

そんな僕の考えを消しとばすように、オッサンの声を受けて、大扉から数十の屈強な男の羽翼人たちが押し入ってきた。

どの人もこの人も筋骨隆々、全身どこからでもかかって来い状態な、戦闘準備万端な男たちでした。

縦長の盾で身体の前を覆い隠し、手にした短槍で威圧するように、テーブルについたままの僕を含め五人全員を半円状に取り囲む。

そんな中、アウルさんが一人オッサンに食って掛かっている。

「お父様！私に一任してくださいたではありませんか！」

「目的のモノが目の前におるのだ。躊躇っていて、指の隙間をすり抜けられてはたまらぬ」

ですが、と追いつがるアウルさん。

何を任されていたんだろうか、ってのは気になるけど、この人数相手にはにつきもさっちも行きません。

「こやつも押さえておけ。多少手荒でも構わぬ」

追いつがるアウルさんの顔も見ずに、部下に拘束の指示を出しやがった。

どんな親だ。

「お父様っ！あうっ、お前たち、放しなさいっ。ラスールが、アメシャ・スペンズたる私に触れるでない！離しなさいっ！」

「父と呼ぶなと申しておろうが！」

振り向きざまに、顔を打つ。

… やっぱりこのオッサン、嫌い。

実の娘をそんな風に扱うなんて。

でも、ここまでして僕らを捕まえて、彼らに何のメリットがあるんだろう。

穏便に話をする気はない時点で、僕らの身が危ないのだけは理解できるけれど、逃げ出すって言うてもなあ。

どう考えても、普通に無理っばいよ。

「やはり交渉決裂かの。宏一、お暇させてもらっぞ」

「へ？いや、確かにかなりヤバいけど、姉さん、この人たち、めっちゃ強そうだよ？」

交渉決裂っていうか、ロクに会話もしてなかった気がしなくも無いけども。

まるつきり無表情にそういう姉さんに、僕はなんと言っていていいやら言葉に詰まってしまい、取り留めのない表面上の意見しかいえなかった。

あー、まあ姉さんだけならどうにかなりそうだけど。

「先の力程度では、ここは抜けられんか。宏一」

僕を呼んだかと思うと、姉さんは返事も待たずに唇を押し付けてきた。

ねっとりとした舌が僕の唇を割って口腔を弄る。

突然の行為に抗おうとした僕の両手は、姉さんの細い指先で後ろ手に拘束されてしまっている。

片手で僕の両手を摘むようにして持っているだけなのに、どうやっても動かない。

周囲の状況を考えると場違いな事この上ない。

長身の美女が、低身長的美？少年を押さえつけて接吻、などという。
しかも姉弟と言う背徳的な。

などと、若干錯乱気味の思考をしていると、突然やわらかい感触に
歓喜していた唇に、痛みが走った。

「痛っ！？」

「それほどまでには痛くはなかるう、大げさな」

って言われても、いたいものは痛いんですけど。

痛みの元に拘束から解かれた手をやれば、真っ赤に流れる僕の血潮。
姉さんが、僕の唇を噛み切ったのだと理解したのは、目の前の秀麗
な唇の端から、血に染まった細い舌がチロリと覗いたからだ。

しかし、それ以上に。

「姉さんの歯…そんなに尖ってたっけ？」

「気のせいじゃ」

いやいやいやいや。

さつき手掴みでメシ食ってたとき大口開けてたけど、そんな歯じゃ
なかったから、絶対。

犬歯…糸切り歯とも呼ばれる歯が、それだけが異様に長く、細く、

伸びていたから。

「何をしているっ！早く、そ奴等を！」

なにやら焦った声でオッサンが叫ぶ。

部下がこっちに来ないのは、アンタが自分で娘の拘束をしろって言ったせいで、未だに拘束しきれていない為だ。

アウルさんは細身の身体で、押さえつけようとする巨漢たちに抗っている。

流石に上司の娘だからか、手荒でも構わないと言われていたにもかかわらず、男達はおっかなびつくりの対応である。

しかし、多勢に無勢なのが見てわかる。

結局彼女は取り押さえられてしまっていた。

見ていると、床に押し付けられているアウルさんの下にファナーさんが近寄り、押さえつけられたアウルさんの首筋に触れなにやら呟くと、アウルさんはかくりと力無く崩れ落ちてしまった。

それを機に、こちらに向かいだすラースールと呼ばれた男達。

やばいって。このままじゃあんなオッサンの思う通りに事が運ばれる。

嫌だなあ。

んな事を考えてると、姉さんが僕の手を引っ張りながら言う。

「心配はいらぬ。まあ見ておれ」

そしてその次の瞬間、ごう、と。

この大広間中に溢れる、すさまじい気配。

暴風でも吹いたのかと思うほどの、体感を伴う何かが、姉さんの全身から噴出すように、発され始めた。

「ちいつ。まさか本当に奴なのか？ラスール達よっ！先ずはあやつからじゃ！」

命令を受け、矛先を変えて一斉に僕らに向かってくるマッチョな男たち。

生理的に嫌だ。

何故か結構悠長な思考をしまっている僕だったが、自分でも何故こんなのにのんびりしてられるのか判らない。

姉さんがいるから、かも知れませんが、ええ。

「さて。宏一、皆と一つ所にまとまって居る様にな」

それだけ言うと、姉さんはゆっくりと歩き出した。

まるで、散歩にでも行くような足取りにも見えるほどに、いつもどおりの姉さんだった。

だけどその歩みには、駆け寄ってきていた翅翼人の男達が足を止めるほどの何かがあった。

彼らは一様に困惑を隠せないまま、姉さんを遠巻きに取り囲んだ。

アレだけの体格差と人数ならば、有無を言わせずに取り押さえられそうなもののに。

アウルさんとは違って、手加減なんてしなくて良いんだから。

そして姉さんがコツリと堅い靴音を鳴らして、立ち止まる。

一瞬の沈黙。

その直後、姉さんの足元の石の床が、挟られるように砕けた。

姉さんが戦いを開始したのだと気付いた時には、既に僕ら非力な四人に近い場所に居た者たちが吹き飛ばされていた。

手にした剣を悉く、遠くに弾き飛ばされて。

「なんと……これほどとは」

目を見開いて驚愕する、おっさん。

踏み出した一步は石の固い床を砕き、ゆうに倍はあろうかと思われる体重の翅翼人の戦士を一撃の下に昏倒させた。

凄まじい跳躍で壁を蹴り、床を跳ね、高い天井すら足場と化し縦横

無尽に相手を翻弄してはうち倒していった。

そんな光景を目の当たりにして、八馬達は目にもとまらぬ姉さんの獅子奮迅にやんやの喝采を浴びせていた。

正直な所、姉さんが趣味で習っていた武術とやらが何かは聞いてないんですが、馬鹿力とスピードに技が伴うことになれば、どんな事になるか。

突き出された剣を掻い潜り、跳ね上げた腕で相手の手にした剣の束を捻り、奪い取っては投げ捨て、剣の主であった者を勢いを殺さぬままに弾く。

掴んだ相手の力をそのままに、いや、更に勢いを乗せ、投げ捨てるようにして別の奴にぶち当てる。

さっきまで僕らが料理を貪っていた巨大なテーブルを、片手で持ち上げて放り投げる所まで行くと、もう好きにしてくださいって感じでした。

さきのドラゴン相手の時よりも、力もスピードも増しているように見える。

見える…。

「凄いや姉さん…」

「宏一、先生が見えるのか？」

「え？なんで？」

八面六臂に戦う姉さんの姿を、僕の目は余す所なく脳裏に刻んでいた。

だが、八馬は残像すら見えないと言う。

山田君は、もうやってらんねえと呆れていた。

彼は体育会系故に腕には自信があつたみたいで、それだから尚更、付いていけない気分になっているんだろう。

柊山に至っては、音しか聞こえない、と。

「周りで瞳先生が動きまわって、あの人たちを吹き飛ばしてるんだろ？な、って言うのはなんとなく」

だそうな。まあ事実、その動き回ってるのは姉さんな訳で。

多勢に無勢かと思われていた戦闘も、あっという間に終わりを告げた。

残されたのは、呆然とこの状況を見ていた僕達と、おっさん。

そして、意識を失ったアウルさんを抱き、こんな騒動が目の前で起こっているにもかかわらず、微動だにしないファナーさんだけだった。

「ふむ。やっと調子が戻ってきたか」

そう言って、またいつの間に火をつけたのか、タバコをぷかりとふ

かす姉さんがいつの間にか横に立っていた。

もう、なんでもありなのか、姉さんは。

「ほれ、お主は来ぬのか？我らは一向に傷ついておらんし、拘束もされておらんぞ？」

そう言つて、ニヤリと、悪戯をした僕を見つけた時のような笑みを浮かべる。

怖い。

「……仕方あるまい、貴様はこのワシが仕留めてくれる」

言いながら、腰に下げていた剣を抜き放つ。

そして、その剣は、おっさんの気合の叫びと共に、その刀身から灼熱の劫火を生み出した。

「ほう。これはまた厄介な」

姉さんの言つとおり、あんなので襲い掛かれたら厄介どころの騒ぎじゃない。

何をどうしたらあんな真似事が出来るんだろうか。

轟々と炎を上げる焰の剣なんて、出鱈目にも程がある。

じりじりと近付いてくるおっさん。

あんなの、反則だ。

刃を避けても、炎が剣の周囲に渦巻くように飛び散るように舞っている。

火傷は必至じゃないか。

ソレが証拠に、結構離れている此处ですら、肌がじりじりと焼けてくる。

と言うか、この部屋の気温がどんどん急上昇中デス。

何ですぐ傍のおっさんは平気なんだろうって思うくらい。

「今ならば、まだ穩便に済ませてやつても良いぞ?」

そう言つてニヤリと笑う。

ガチムチのおっさんがそんな事を口にする、とても嫌な想像が果てし無く出来てしまうんだが。

「熱烈歓迎だそうじゃ、どうする? 宏」

「心の底からご遠慮させていただきます」

冗談じゃない、アウルさんに言われるなら未だしも、おっさんにそう言われたんなら、全力で拒否します。

「では、積極的に逃げさせてもらおう。ほれ、手当てしてやれ。一応全員死なせてはおらぬ」

そう言つて、手近に転がつていたマツチヨな人を、つま先で引つ掛け、おっさんに向けて蹴り飛ばす。

その隙に、と駆け出した僕だったけど……ああ、駄目。

柊山達が、状況について来れてなくて立ちんぼ状態だよ。

「世話の焼ける生徒じゃの」

いや、彼らがごく普通なだけだと思います。

八馬が普通かつて言うのにはちよつと疑問があるけれど。

折角作つた隙が、無駄になつちやつたか。

Uターンして三人を拾いに戻る姉さんに、ついてゆく。

振り出しに戻る、かと思いきや。

「逃げなさいっ！早くっ！」

声に振り返れば、アウルさんを抱えていたファナーさんが、おっさんにすがり付いて僕らを先に行かせようとしてくれた。

「……礼は言わぬぞ？」

「構いません。さあ、早くっ」

そのファナーさんの声を聞いた途端、僕の身体が宙に浮いた。

姉さんが放り投げたんだと気付いたのは、八馬と山田君を脇に抱え、出口へと駆け出した姉さんの背中に、柊山と一緒におぶさるように落下した時だった。

「え？ちよ、ちよつと姉さん？」

慌てた僕の耳に、「しっかり掴まっておれよ、梓ちゃんを落とさぬようにな」と聞こえたのは僥倖だっただろう。

僕らを抱えたまま大扉を蹴りで粉碎し、そのままの勢いで、ステージを蹴った。

背後から聞こえるおっさんの怒号が、まるで遙かに霞んでみえる地の底から、僕らを呼んでいるようにきこえた。

4・追憶

「生きてるって、素晴らしい」

「何を今更」

八馬が言うと、なんでも嘘っぽく聞こえるから不思議だ。

「……よくまあ全員がバラバラにならなかったもんだ。あの激流で」

呆然と呟く山田君に、僕も相槌をうつ。

ほんとによくまあ同じところに流れ着けられたもんだ。

「それにしても、ほんと、よく逃げられたわね」

身体に纏わりつく薄絹の衣を搾りながら、溜息と共に安堵の言葉を吐く柊山。その点については激しく同意する。

「まあ、ねえ。姉さんのおかげっぱいけども」

「ぱい？ぱいとはまた心外な。完璧確実文句無しに、私のおかげ、であろっ？」

河の激流でアップにしていた髪が解けてしまったらしく、ハンカチでポニーテールに纏めている姉さんが鼻高々に言ってくる。まあ確かに事実そうなんですけど。

穩便に済まなかった原因も、姉さんにありそうな気がしなくもない

です。

そう。

あの後、空中に飛び出した僕らは、引力に引かれてまっさかさまに落ちていきました。

翼もない僕らが、アウルさんに抱えてもらったときのように、飛べるわけではない。

周囲に舞う、幾人かの翼持つ人たちが、何事かと言う表情で、僕たちを見送ってる中を、だ。

まさに加速度的に落下速度を上げていったんだよね。

轟々と、空気を押しのけて落ちてゆく最中、姉さんの声が耳に届いたんだ。

「……ふむ。宏一、ちょっと我慢せい」

はい？ いや、こんな状態でなにを？ と思いきや、柊山を抱え込んで背中にしがみついている僕を、体を捻った反動で引き離し、何をするのかと思ったら、思いっきり僕を踏み台にしてくださいました。

いやまあ、後になってみれば、足場にされたって事だったんだけどね。

僕を蹴った反動で手近な壁面にまで跳躍。

壁に衝突する寸前で、くるりと体を捻って壁をけり、方向を変える。

そして反対側の壁に激突しそうになっていた僕と柊山にランデブーして、また壁を蹴る。

必死でしがみついた僕と柊山、そして脇に抱えた八馬と山田君とをそのままにそんなことをやってのけてくれたのである。

ソレを何度も繰り返して、なんとか底に流れる河の水面に、死ななくて済む程度の勢いで盛大に水しぶきを上げることが出来た。

底に流れていた河は、想像していたよりも遥かに流れが速く、着水した衝撃もあって、僕は姉さんから手を離してしまっていた。

が、慌てる間もなく、何かが僕の手に絡まってきた。

って何でもいいからちょっと勘弁してくださいー！ー！。

そんな感じで何とか生きてた……つか、なんで生きてられたんだろうか。

平然としている姉さんを除く4人が全員、広々とした河原にへたりこんで荒く息をしているが、僕らは取り合えず、生きていたことへの感謝を言葉にしていた。

一人元気な姉さんが、一つに纏めた長い髪を風に揺引かせて、さっきまで僕らがいた場所を見つめている。

大分流されたみたいで、あの岩山が、小さくかすんで見えていた。

巨大な山地のふもとに鎮座したソレは、元は巨大な一枚岩だったの
だろう。

その岩のど真ん中に細く裂かれたように切れ目が入っていた。

そこが、さっきまで居た吹き抜けなんだろうとはわかる。

あの広さがあの裂け目なんだとしたら、あの岩の大きさは如何程の
ものか。

ざっと、縦横数キロは有るんじゃないだろうか。

そんな観察をしながら、何とか動けるようになった僕らは、川岸に
居ると見つかりやすいだろうからと、とりあえず森の中に移動する
事にした。

うねり抜くれた根が、僕らの行く手を阻むのだが、何しろ樹がでか
すぎて、乗り越えるなんてレベルじゃない。

下手すればロッククライミングだ。

まあ、姉さんが居るから何とでもなるわけだが。

しかしもう、森と言うよりも、巨大過ぎる樹木のせいか、溪谷の底
に居るような感じがする。

見上げて、樹の先っぽなんて霞んで見えやしない。

その中でもひととき巨大な樹の根元に出来た洞を、仮の宿にする事
にした。

樹といっても、幹の周りは人が抱えられるレベルじゃあなくて、ちよっとしたビルよりも太く、東京タワーよりもはるかに高い。

そんな樹の洞だからして、かなりの広さがあるわけで、中々に快適です。

葉っぱも巨大で、しかも産毛が生えたふわふわの感触がこれまた何ともいえません。

寢床はこれでオッケー。

一夜を過ごす準備が整った所で、興味津々なのはいつでもどこでも何にでも、の八馬が口を開いた。

「これって、どれくらいの樹齢なんだろうなあ」

唯一この世界を知る姉さんからの答えはそっけないものだったけど。

「さあの。少なくとも、数千年は越えておろう。はっきりした所はわからん。ここは四季も雨季も無いのでな」

樹木の年齢は年輪を見れば判る。

大体の樹木は、春になると肥大成長を行い、幹が太くなる。

そして夏にはそれがゆっくりになるため、その成長差が色の濃淡となって輪状に見えるのだ。

が、四季も無ければ雨季も無いと言う事は、年輪の出来る要素がな

い。

まあ、この太さだったら、樹齡一万年とか言われても納得するけれど。

姉さんいわく、この星は暑い地域は常に暑く、寒い地域は常に寒い。

それは空に浮かぶ二つの太陽のせいでもあるらしい。

「私もこの世界を離れてから学んで理解できたのだから。」

そもそもこの星の自転軸自体、殆んど傾いては居らぬのじゃ。

そして二つの太陽は常に中天を通り我らを照らす。

まあ、安定した気候だと考えれば悪い事ばかりではないが」

それは、その地に根付く事が出来れば、長く住み着けるといいうことなんだろう。

「そっか、だから年輪が出来ないのね」

「正確には年輪ではのうて、成長輪と言っらしいがの」

柊山が姉の補足に頷く。

なるほど、それじゃあ切り株見て大体の樹齡を調べるってのも使えない手なわけだ。

「アメリカにや、推定樹齡2200年で直径11mちよって樹が

あるぜ？」

それを参考にしたらどうだ？と、八馬。

「えつと、11メートル割る2200年で年間5mm？だったら…」

「…ああ、取り合えず見えるところにある一番でっけえのはどれだ？」

言われてきよろきよろと見回す僕らに、姉さんが指差し告げてくる。

「あれじゃな。直径はざっと80mといった所かの」

指差す先には直径2mほど、高さで30mほどの小さな…といって僕ら的には十分にでかい木なんだけど。

その木の向こうに姉さんの言う樹があった。

「あれ、木だったんだ。どう見ても壁にしか見えないんだけど…」

「いちまんろくせんねん…育ちも育ったりって感じねえ」

「出鱈目だな」

「…くうー！カメラがあればなあ！」

口々に感心するやら呆れるやら。

「まあ、アレよりでかい樹もさらに…む？」

そんな時、姉さんが不意に何かを見つけたのかして視線が突然鋭くなった。

深い森を睨みつける姉さんに、僕らは追手かと思い身体を強張らせた。

しかし姉さんは「心配は要らぬ。待っておれ」と一言だけ告げて、駆け出していった。

姉さんが心配なのも若干あったが、主に僕らに危険が及ばない事を祈っている中、姉さんは戻ってきた。

時間にして数十分といった所だったけれど、何時間にも感じられた。

「待たせたか？さて、メシじゃ」

そついう姉さんは、ざつと体長5〜6mはありそうな、八本足で額から三角形の板のような角が生えた、馬のような生き物を引き摺っていた。

じゅうじゅうと、肉の焼ける匂いがあたりに立ち込める。

「いい匂いだね」

「肉としてはかなり美味い部類に入る。滅多にあらぬ故、狩れたのは運がよかったの」

あの後、引き摺ってきた馬もどきを食べるため、捌く事になった。

大きさが大きいため、捌くのも一苦労かと思われたが。

「どうせ全部は食いきれぬ」

そついう姉さんにより、一番美味い部分を抉り取って食べる事になった。

柊山などは、目の前で生皮を剥ぐのを見なくて済むので歓迎していたが、まあそのなんだ。

その方が逆にグロかったわけだが。

歩き通しで疲れきった僕らがへばって横になっている中、姉さんがその辺に転がっている木の枝を集めて火を熾し、肉を焼き始めた。

焚き火の煙は森の木の枝や葉が散らしてくれるし、日の高い今の時間なら上空からではこの程度の炎は見つからないだろう。

それにしても、こうしていると夢でも見ているんじゃないかと思えてしまう。

それくらい現実感が無いように感じている僕がいる。

炎に焙られ脂を垂らす、枝を突き刺した肉を見つめている姉さんを眺めていると、僕の視線に気がついたのか姉さんが声をかけてきた。

「どうした宏一。ボーっとしおって」

そついつて手招きする姉さんに、どつこらせと立ち上がって傍に近寄った。

「うん、ちょっとね。いろんな事があって、頭の中が混乱してるって感じかな」

姉さんの横にしゃがみこみ、踊る炎に小枝を放り込んだ。

パキ、と音を立てるのを耳にししながら、こちらに来てからずっと思っていたことを口にした。

「ねえ、色々聞きたい事があるんだけど」

「…判っておる。まあ待て、私とてまだ頭の中が整理できておらぬのだ」

視線を動かそうともしないで、姉さんはそれだけ言って口を閉ざした。

「でも、僕なんてもっと何がなんだかわからないんだ。

姉さんがあんなに、強いって言うのを乗り越してるくらい強いのか。

なんであのおっさんが僕らを捕まえようとするのとか、それに…」

そこまで言って、口ごもる。一番ワケが判らない事だったから。

「あの、アウルと言う奴のことか」

「…うん」

僕に面識などあるはずが無い。

だけど、向こうは昔から僕を知っている様なことを言う。

何をどうしたらいいのか、さっぱり判らない。

それに、このままじゃのたれ死んでしまっただけだと思ってしまっのは、僕が心配性なせいだけじゃないと思う。

「どれもコレも、奴らの手から完全に逃げ切れてからの話じゃ。

心配するな、私が皆を守る」

「でも、いつもいつも僕らを守って戦える訳じゃないでしょう？さっきだって…」

「どうにかなったである。

今こうしてちゃんと一人も欠けずに無事ではないか」

「確かに姉さんのおかげだろうけど…」

危うく飛び降り自殺になる所だったじゃないか、実際の所。

「……車は急に止まらない、と言う奴じゃな。

お主もこれを教訓に、ちゃんと前を見て走るように」

僕としては、てっきりアソコの構造を知ってて、どうにか出来るもんだと思っていたんだ。

見通しの悪い所をカンで走っちゃ駄目だよね？

「だいたい、あんなに颯爽と駆け出すんだもん。」

あの先がどうなってるか知ってて……いえ、とても素敵な好判断だったと思うよ。

うん、アレくらい突飛な行動に出ないと、きっと追っ手を振り切れて無いんじゃないかなあ」

「……何か棘があるのう」

「気のせいです」

とりあえず、その肉突き刺した枝は振り下ろさないで。

お願いします。

「まあよかるう。ほれ、焼けたぞ」

「いただきます」

こんな状況でも、お腹は減るし、いただきますは言っちゃうんだね、僕ってば。

まあ、その辺は他の皆も変わらないみたいだけど。

焼けた、の一言でみんな飛び起きて焚き火の傍にわらわらと寄ってきた。

「腹が減っては戦が出来ん、っつーのはいつの時代も変わらんねー
と。」

こんなとんでもないことが今現在我が身に降りかかっているのに、
途中下車なんて事になったら眼もあてらんねえ」

「前向きねえ。あ、美味し」

「おうよ。俺はな、喩えにするにはちよいと変かもしれんがな。

死ぬときは、自分がどう死ぬか、キツチリ確かめて逝きたいって思
ってるんだ」

ちゃんと、死に様を確かめたいんだと。

そう言っつて、焼けた肉にかぶりつと齧り付く。

ま、そこまで覚悟してるんなら、ある意味天晴れかも。

ただの変なことマニアじゃなかったんだね。

「死ぬとか馬鹿な事言っつてないで、元の世界に変える方法考えなさ
いよ。」

こんな所…うーん、慣れれば自然いっぱいで良いかもしれないけど
……」

こちらで焼けた肉にかぶりついている柊山が、眉間に皺を寄せて悩
んでいた。

「けど、なに？」

「なんでもないわよ、馬鹿」

促しただけの僕に、剥れた顔を向けてくる。何なんだ。

「おとめごころ、と言うものを、もうチョット理解せよというのは
お主にはまだ早いのかの？宏」

苦笑しながら僕に囁く姉さん。

別に早かろうが遅かろうが良いけどさ、この世界から帰るのと、乙女心と何がどう関係あるんだろう。

「……ほんとに馬鹿」

一人無言で黙々と肉を食ってる山田君、どうしてそこで僕を睨むのさ。

なんなんだよ、もう。

心当たりのない事に、若干ふてくされつつ、ただ焼いただけの肉をほおばる。

美味しい。

「しっかり食って、しっかり眠れ。」

明日もちよつとばかり強行軍となるからの「

なんなら私が背負ってやつても良いぞ？」と笑う。

子ども扱いはしないでよ。

ちゃんと自分の足で歩くさ。

さっきみたいな出鱈目な状況じゃなければ、ね。

「何処に行く当てであるの？」

素朴な疑問である。

こんなところでアテがあるほうが不思議だし。

本当は元の世界にすぐ戻れたらよかったんだけど、どうすればいいのかもわからない。

「無ければこのような事は言わぬ。

まあ、あまり期待は出来んがの……」

若干悲しそうな顔をしたような気がしたが、ほんの一瞬の事で、しかもすぐに明後日の方向を向いてくれたので、見間違いかもしれない。

取り合えず命の危険は去ったのに、落ち込んでる、って事は無いよなあ、姉さんに限って。

まあ、ともあれ今の状況が多少でもマシになるんなら、ちゃんとついていきますよ。

一回死にそうな目にあつたら、結構開き直れるもんだよね。

無言で佇むだけの姉さんの背中が、アテと言うのはかなり細い系の
ように感じられた。

「あの、姉さん？」

やけに寂しそうにしている姉さんに、恐る恐る声をかけようとした
ら。

「封の切れてあつたタバコが濡れてしもって台無しじゃ」

そつちか！

確かにヘビースモーカーを通り越してチェーンスモーカーとも言え
るから、ある意味生命線なのかもしれないが。

あの激流の中でタバコが駄目なのはしょうがないのでは。

命があつただけめつけモンだと思うんだけどなあ。

「封の切れていないものも、多少湿つておるな…」

そう言つてしょんぼりしてるのをみると、ちょっと可愛く見えた。

食事を終えるともう陽が傾きを増していた。

深い森だけに、一気に辺りが暗くなり、殆ど夜のようになつてしま

っていた。

そのせいなのか、昼の行軍が祟ったのか、みんなは既にお休みモードに移行していた。

そんな中、僕は姉さんの姿が無い事に気がついた。

前みたいに周辺を探索に、というなら何か一言ぐらい告げてゆくだろうから、洞の外で休んでるのかなと思い、外に顔を出し姉の名を呼んでみた。

すると、予想外に小さな声が、かなり高い位置にある枝の先から聞こえてきた。

「何じゃ？一応我らは彼奴らの搜索対象なのじゃから、声は控えめにせい」

言われながら、姉の下へと行こうと壁のような樹の肌に指をかけようとする。

「よじ登らんでも、ほれそこに」

と言われ見回せば、人の胴回り以上あるうかと言つ蔭みたいな植物が螺旋状に上へと伸びていたのだ。確かに、幾ら手がかりは山ほどあるとは言え樹をよじ登るよりは遥かにラクチンであった。

姉さんのいる枝：と言っても、根元付近はそれだけでも軽く自動車の2〜3台は並びそうな太さがあった。

姉さんはその枝の先のほうで膝を抱えてその上にアゴを乗せ、啜え

タバコで紫煙を燻らせて遠くを見つめていた。

そんな姉さんがとてつもなく儚げに見え、僕は何も言い出せずに黙って傍に近づき、横にそつと腰を下ろした。

その横顔を覗き込むと、静かな表情で何かを考え込んでいるようであった。

そして僕は姉さんの視線を追い、遙か彼方に目をやった。

河原でも見えた、あの逃げ出してきた岩山が、夕日に照らされて赤く染まっているのが樹の隙間から伺うことが出来た。

どれくらいそのままだっただろうか。

空の色が深い浅葱色に染まり始め、星が疎らに瞬き始めたころ、姉さんがついと指差し口を開いた。

「よう見てみい。岩の向こう側、山と接している部分、平らになっておるじゃろう？あそこに、小さな湖があるのじゃ」

だいぶ翳りの濃くなってきたが、指差す先にある岩山はその背後にある山並の色合いから浮かび上がるようにはつきりと見えていた。

だけど、その向こう側に湖があるのかどうかまでは、見ることは出来なかった。

「湖…？じゃああの水路の水は、その湖から、あの岩山をくりぬいて、水を導いてるんだ」

僕の答えに姉さんはふっと笑みを浮かべて続けた。

「……あの場所にはの、その昔、湖から流れ落ちる、秀麗な滝があったのじゃ」

「その昔って…今でも滝、あったじゃない」

落ちる途中で見た岩山内部の光景には、吹き抜けの半ばほどから大量の水を吐き出す滝もあった。

「ソレは違うモノじゃ。あの岩はな、あやつらがどこぞから運んで来おったのじゃ」

「よくわからないよ…あんなでかいの、どうやって運ぶのさ。そもそも姉さんはどこまで知ってるの?」

僕の言葉に、姉さんはちらりと横目でこちらを見つめ、空を見上げて呟いた。

「それを話そうと思えば、全て話す事になる。長くなるぞ?」

「…いいよ、教えて」

僕は、姉さんの言葉を嚙締めるようにして、次の言葉を待った。

「まえに言ったな?私はお主を守るための戦士じゃ、と」

「瞳先生、ソレ冗談じゃなかったんですか?」

突然の背後からの声に僕は驚き振り向いた。

そこには柊山を先頭に、他の二人も勢ぞろいしていた。

姉さんはわかっていたようであるが。

八馬は「何をいまさら」って笑ってる。

これまでの姉さんの戦いっぷりを見ていて嘘だと思っほうがおかしいと言って。

「…で、実際のところ、どうなんですか？」

「私は基本的に冗談が好かぬ」

話の腰を折られたのであるが、まったく意に介さず姉さんは応える。

冗談が嫌いなのもよく知ってますよ。

ええ、実際のところ。

冗談と思えないことは、しまくりですけども。

でも、僕を守るための戦士だっけ言うことは、そっか。

じゃあ、僕の姉さんっけ言うのは、ただその方が都合が良かったから、そっけににただけなのだろうか。

もしそうなら僕は一人の肉親も居ないことになる。

ちよつと涙が出そう。

「勘違いしているようじゃから言っておくが、私とお主は、生物学的にも法的にも完全無欠の兄弟であるぞ?」

僕の顔色の变化でも見て取ったのか、姉さんが苦笑交じりにそう口にする。

「え、ソレって……。じゃあ野見山君もこの世界の人だったの?」

僕以上に驚いて、柊山がこっちを見つめる。

「然り。中々の理解力じゃの、花丸を授けよう」

いや、理解力云々の問題じゃない気もしないでもない。

普通そう簡単に信じないんじゃないだろうか。

「ふふん、俺なんて初っ端からうすうす気がついてたぞ」

僕の内心を逆なでするように胸を張る八馬。

その横でやつぱりお前が原因なんじゃないかって目で僕を見る山田君が、微妙に怖い。

「じゃあ、賢い八馬君に質問。どうして僕らが狙われてるのか、判る?」

「……んなもんはアレだ。えー、とだな。あー……。先生お願いします」

なんじゃそりゃ。

「その辺りは私も推測でしかわからぬ。

それでも構わんのならば…」

「構いません、ちゃんと知っておきたいし…その、色々と」

「ごによごによと語尾が聞き取れない。

ちゃんと喋ろうよ、柊山。

「五月蠅いわよ、この鈍感男！」

なんなんだよ、一体。

だから山田君もなんで僕を睨むのさ。

「まあよかろう。

これは、おぬしがこの世界で生まれて、暫くたった頃の話じゃ。

しかしおぬし、この世界で生まれたなどといわれて、よく動揺せぬな」

「動揺してる暇がないからだよ」

不貞腐れた僕の答えにくくと笑って、姉さんは話し始めた。

その昔、この世界で姉さんを含む僕らの一族は、過酷な自然と共に、波乱に満ちた、それでも平和な生活を営んでいたんだって。

ソレが、何時しか現れたあの、マラーイカと自称する一族に、脅かされ始めたんだ。

それでも、姉さんたちは、無駄な争いを好まなかったし、定住する事も無い生活をする、所謂遊牧民的な暮らしだったから、他の土地に移動してやり過ごしてたんだって。

一人一人の戦闘能力は、姉さんに見られるように、恐ろしい膂力を有したその部族のほうが優勢だったんだ。

その為に、時折起きる遭遇戦のような散発的な戦いでは、ロクに被害を受けることが無く、返り討ちにあわせる事が多かった。

その事もあって、彼らをどうこうする気は、姉さんたち一族には無く、係わってこなければ、こちらから手を出す気は無かった。

だけど、相手の方が、自分たちばかりが被害を受けることに、臍を嚙んでいたらしい。

「聞いた話じゃがの、中には我等が背後から襲いかかったせいで、ぼろぼろに負けたと報告する奴らが多かったそうじゃ」

ありえん、と一刀両断する。

「正面から戦ってこそその勝利じゃ。」

命を奪い合う以上、ソレでなくては申し訳がたたぬ。

そうである？」

あー、そう言われれば、さっきの肉、あの馬みたいな鹿……鹿みたいな馬？まあどっちでもいいけど、そいつに付いていた傷跡を見るに、狩る時もどうやらに真正面から倒してたようである。

で、話の続きだ。そんな中、とうとう奴らとの戦闘が本格化する事態が起きた。

さっきも言っていた、聖地を荒らされた、という奴だ。

「我らは旅をして定住する地を持たなんだ。しかしの、一族がある一定の期間に一度、集う地があったのじゃ」

「それが、聖地なんですか？」

柊山の声に頷く姉さん。

その瞳が、懐かしげに潤んでるように見えるのは、気のせいだろうか。

「そして、その日がやってきた。

二つの太陽が重なり、一つになる時、我らはそこに集って宴を始めたのじゃ」

一族がこの地に辿り着いたと伝えられる、初源の地である聖なる山。

その中腹にある湖から流れ出る滝から続く、清らかな川の河原で、一族が集い、飲み、食い、唄い、踊る。

そして、二つに太陽が分かれたるまで宴は続き、最後の日に各々が持ち寄った先祖への供え物を一族の代表者が滝の裏側に築かれた小さな小さな社に納めに行き、宴は終わるのだ。

「その日も、我らは懐かしい顔を見、互いに挨拶を交わし、宴の夜に突入して行つた。

そして、あくる朝……」

日が昇り、一つになっていた太陽が、二つに別れようとし始めた頃。酔いに任せて踊り明かし、そのまま眠りについていた人々が日に照らされて目を覚まし、今度は手に手に供え物を持ち、供物を捧げに行く者に手渡していった。

その代表者は、小さな腕を一杯に広げて籠を持ち、皆が持ち寄つた物を集め終えると、立派とは言えない身体でそれを一人で捧げに行くのだ。

「それは、前の宴の後、最初に生まれた男の子の仕事なのじゃ」

そう言つて僕を一瞥した。

「もしかしてその男の子が……」

「うむ、それがおぬしじゃった。

まだ小さくての、もう、抱きしめても抱きしめても飽き足らぬほどの可愛さじゃった……なんじゃ山本、その目は」

「え、いや、その。先生のそんな顔、初めて見ましたから」

どぎまぎしながら、八馬が答える。

そんな顔って…、頬が赤くなって、嬉しそうに微笑んでるののなが珍しいんだろう。

「そんな顔、瞳先生学校じゃしたこと無いからじゃないですか？

私は昔からよく一緒に居たから記憶にあるけど」

…なるほど。

あの顔は、僕だけの特権であつたわけだ。

あー、その山田君、「先生…可憐だ」って、君は柊山狙いじゃなかったのかと。

「どっちにしても、かなり無理目だ。諦めろ」

八馬の一言に、山田君…泣かなくても。

柊山は柊山で、「山田君って、誰か好きな人居たんだ？」とか言い出してるし。

山田君、地面にの字書き始めちゃった。

そんな山田君を放っておいて、姉さんは話を続けた。

「ふむ。で、じゃな。

我等はお主を送り出した。

川に沿って遡ってゆけば、子供の足でも十分にたどり着くことが出来るし、

無論、危険なことなど無いよう、影から見守る役目の者がついてゆく故、

誰も心配はせぬ。そしてその時の守護者が……」

「瞳先生だったんですね？」

あとを継いだ柊山の言葉に、ようわかったの、と相好を崩す。

話の流れ的にそうなんだろうなーと思つて、と頬を掻く柊山。

「私は、宏一に気づかれぬように、樹木を伝つて後をつけておつた。

無論、宏一を狙う肉食獣共を、追い払うことも忘れはせんかった。

神事ゆえ、殺生も禁じられておつたし、何より宏一に気づかれては意味が無い。

ゆえに、かなり時間がかかってしもうた。

そして、何匹目かの獣を追い払つておつたとき、それは起こつたの

じゃ
」

姉さんの表情が、一転して苦渋に歪む。

どれほどのことが起きたんだろうか。

僕は口も挟めずに、話の続きを聞き入った。

「突然日が翳り、周囲が闇に沈んだのじゃ。

まるで太陽が消えうせたかのようにな。

私は何事が起こったのかと天を仰いだ。

そう、アレが我等の頭上に現れたのじゃ
」

小さな僕が居たであろう聖地の頭上に、巨大な、そう、巨大といつても足りないほどの大きさの、あの、マラーイ力達の居城たる岩山が、空中に現れたんだそう。

「私は慌てた。あんなものが宙に浮かぶなど、考えられん故に、当然そこに落ちてくるとな。

幸い、供物はとうの昔に納め終わっている頃じゃった。姿を見せることは、もう禁忌ではなかった」

大急ぎで社へと向かい、一仕事終えた開放感からか能天気な渾身の力で水遊びをしていた僕を掻っ攫うように掻き抱いて山を降り、一族のみんなのところに戻ったんだって。

そして、皆と共に、アレが何なのかも、何がどうなっているのかも判らないまま、呆然と見守るしかなかった。

でもその岩が現れてすぐ、空を例の巨鳥たちが舞いだして、姉さんたち皆を襲い始めたらしい。

幸い一族が全員居たお陰もあって、部族ごとに別れて敵の目を逸らし、上手く逃げる事が出来たためそのときは大した被害は出なかったという事だけれど、聖地の安否が気になって、あまり遠くには逃げ出さなかった。

そして、次の日の朝、一族の皆は見る羽目になる。

聖なる山の、その社があつた辺りを押しつぶして、鎮座してしまった巨岩の姿を。

「あの巨岩は、我等の聖なる河さえも堰きとめてしまった。

我等が激昂するのも仕方なくは無いか？」

うんうんと頷く二人。山田君はまだのの字かいてる。

まあ、そりゃそうだとは思う。

僕だって、大事な思い出のある海岸なんか、いつの間にか開発されて、コンクリートに固められて無機質な岸壁になっていたら悲しいもの。

それが、一族の聖地で、しかもみんなの目の前だと来れば、その思いの丈は如何程のものだろう。

どこの一神教の信者達のように、奪還に向かっても不思議じゃない。

「そうして、我等の戦は始まったのじゃ」

聖地を奪った奴らに、一族の怒りをぶつける為に。

しかし、やはり、空からの攻撃に対して、対抗する術が口々に無かったのは致命的だったらしい。

いくらその膂力を駆使して投擲しても、それ以上の高さには上がられてしまえば、一方的だ。

上から数を頼りに物を落とされるだけでも、こちらの被害は増えてゆく。

使役した獣や、剣や槍で武装するマライカたちと違い、身体一つで立ち向かう事を至上としていた姉さんたちには、歯噛みして撤退する他なかった。

武器を使わないのは、一族の伝統というか、心意気なんだそう。

それは、これまでの姉さんの戦いを見ても判る。

使ったのは、精々その場にあった巨大テーブルくらい。

「人生は戦いじゃ。寸鉄帯びておらぬ身で生まれ出るのだ。

死に行くときも、そうでなければならぬ」

話を聞くうちに、僕は段々と感情移入していったのだろう。

そんなヤツラのせいでその部族が滅びるなんて、納得がいかないと思います、姉さんにふと口にした。

「信条なんて捨てて、敵の武器を奪ってでも生き残れる道を探せばよかったのに」と。

「そのような意見も、一族の中から出ておった。

しかしな、屈強な戦士ほど、その信条を守り通したいという、強い思いがあったのじゃ。

我等の力は、奴らの武器よりも強い、とな。

事実、一騎打ちでは、我等に並ぶものはごくわずかじゃった」

その言葉は、一騎打ちじゃなければ不覚を取る、と言うことを伝えていた。

「じゃがの。どうあがいても、個人戦闘が得意な我らにとって、

集団戦にはおのずと限界が来るのは必然。

我等は、彼我の数に圧倒的な差があるということすら、

怒りに目がくらんで見えなんなのじゃ」

そして、一族は、日に日に追い詰められていった。

所々では、戦士の勇猛さによる局所的な勝利は得られていたんだけど、

全体的な視点で見れば、確実に負け戦の道をまっしぐらだったんだそう。

「何せ、奴らは我等が撃つて出た後の陣を、それも戦いに向いておらぬ、

女子供や年寄りすら手にかけてのじゃ。幾ら我等が強くとも、

戦を終えて戻った村が、火に焼かれていたのでは、勢いもなくなるというものじゃ」

そして、いつしか戦いは一方的な掃討戦へと移行していった。

姉さんの部族は、僅かに残った他部族の非戦闘員を率いて、逃げ延びる為の道を切り開いていた。

そして、やっと腰を落ち着けられる辺境の地にたどり着き、細々と暮らし始めたんだそう。

土地は痩せ、獲物となるような生き物もロクに居ない、氷の河と、果てしない氷土。

目を転じれば、厚い氷に覆われた、極寒の海。

ただ生きるだけでも、苦勞どころの騒ぎではない土地で、一握りだけになった一族は、日々の生活を取り戻していった。

容赦ない殺戮と、無念の炎とを記憶に残したまま。

「我等は戦った。戦って、戦って、戦い抜いてそこにたどり着いた。力及ばず聖地を取り返せなかったならなかった我らは、

失意に埋もれつつも日々の生活を取り戻していったのじゃ」

しかし、数を減らしすぎた部族にとって、いつか訪れる終焉を先延ばしにするだけの行為だった。

そして、姉さんは、生き残っていた長老に呼ばれ、告げられたさうな。

「我等は最早この地を終の棲家と決めた。我らは最早消えゆく定めだが、血だけは残そう」

そうして、僕と、姉さんが、選ばれた。

姉さんは無論、反対したそうだ。

自分たちの生き様を見せ付けて逝くのだといって、引かなかったと言う。

しかし、一族の力を最も色濃く引いた娘として生まれた姉さんは、僕を守って血を残せと。

我等の生きた証を残す為、その強き力と想いとで、この地を離れ、生き延びよと。

それは、これから死にゆく我等よりも辛い道のりとなるだろう。

しかし、それでも、誰かを生かすために、死すのならば、我等は喜んで逝く、と。

だから、生きてくれと、一族の皆に懇願されたんだという。

そんな生き残っていた人達の思いを、姉さんは血の涙を流して受け入れたんだって…。

「……そして、おぬしと共に、私は一族最後の地を後にした。

最早この世界では血を残すのすら容易いことではないと、皆判っておった故にな」

一族に伝わる、禁断の秘宝にして秘法。

祖が、この世界にやって来た、始原の地に降り立った、秘術。

それを用いて、僕ら二人は跳んだのだという。

今僕らが帰りたいと願ってやまないでいる、あの世界へと。

姉さんが語り終えたあと、しばらく僕らは何も声を出すことが出来なかった。

何といえばいいのやらわからなかったから。

しんみりとした沈黙が続く中、突然姉さんの表情が切り替わった。

そう、戦いに挑む際の厳しい表情に。

それを見て、みんな一様に息を飲んだのだ。

手で僕らに伏せるように指示し、辺りを探る。

耳を澄ませば、僕にもかすかに聞こえる、風を切る音。

「カラドリウス…もう此処まで来おったか」

記憶にあるあの巨鳥の羽ばたきに間違いなく、執拗に僕らを探しているんだろう。

これだけ暗くなったのに飛んでいるという事は、鳥だから夜は苦手だという元の世界の常識は、ここじゃ捨ててかかった方が良いみたいだ。

「いった、な。…そろそろ下に降りるとするか」

気配が遠のき、十分距離が離れたところで緊張を解いた姉さんは、続きは焚き火を囲んで、と言って僕らに元の洞まで降りるようにと促した。

二つの太陽の片方は既に沈み、残るもう一方がわずかに顔を出している。

じきに沈みきり、街灯なんて望むべくもないこの地は、星明りだけ

の暗闇に染まる事だろう。

ジャックと豆の木に出てきたツルは、こんな感じだったのかもしれないと思いながら固い足場にようやくたどり着く。

姉さんは僕らがおっかなびっくり這うようにして蔦を下るのを楽しそうに笑いながら、すたすたと一人歩いて降りる。

下を見ないように、気を紛らわせるように、姉さんに一つ気がついたことを質問してみた。

「ねえ姉さん。もしかすると、今向かおうとしてるのって一族の人たちの…」

「うむ、その集落じゃ」

そうか、もしかしたらもう一回その秘術を使って帰れるかもしれない。

そう思うとちょっとだけ気が楽になった。

洞に戻り、焚き火を中心に車座になるように寢床を整える…のが段取りのはずだったんだが。

「何してるのさ、八馬」

「何ってお前、寢床をだな」

…やけにふわふわな柔らかい葉っぱを横幅で3m。

そんなに集めて作って、何人寝る気だ。

「こんな異郷の地で心細いだろう女性たちを慰めるために決まってるだろう」

却下だ。

「痛てっ！痛いって宏一！って山田もなに一緒になって殴ってんだよ！」

初めて山田君と意見が会った気がする。

二人で八馬を着ていた服で縛りつけ、二人が見えない位置に放り出しておいた。

これで柵山と姉さんには八馬の魔の手は届かない。

まあ、届いた所で伸ばした手が粉碎されると思うが。

その夜は、これからの道程やらこの世界での危険な生き物なんかをレクチャーしたりしてふけていった。

「辺りを見回ってくる。今のところ近場に危険な獣やらはおらぬが一応な」

この世界についての概略を語り終えてすぐ、姉さんがそう言って夜の哨戒に出るのを、僕らは不安げに見送った。

「さて、男は男同士。朝まで語り明かそうじゃないか、山本君」

「…朝も早いらしいし、とっとと寝るか」

さっきの言動があるが故に、肩を抱いて八馬の不埒な行いをあらかじめ防いでおこうと言う山田君である。

何とか引き剥がそうとする八馬の姿は端で見ている分には面白いけど、男の中に僕も含まれてるんだろうか。

楽しそうに笑いながら、柊山は冗談交じりに「えー？私一人？」と言いついで、山田君はしどろもどろで答えていた。

「え、いやあの。そうは言っても柊山さん。さすがに男連中がすぐ傍で寝るといのは…」

やっぱり、山田君の意見も至極当たり前のことで。

実際柊山が誰かとただ傍で寝るだけだと言われても、アレだしな。

「まあまあ。柊山は洞の奥でさ、俺らは入り口近くで寝るって事でなあ、宏」

「それくらいが妥当な線だろうね…」

「そうね」

無言でうむ、と頷く山田君。

そう言うことで、焚き火を挟んで奥に柊山入り口側に男三人が寝る

形になった。

「はあー。色々考えなきゃいけないことはあるけど、いい加減寝ましょ。」

明日も今日と同じくらい疲れるんじゃないの？」

巨大な木に似つかわしい巨大な、だけど柔らかな葉っぱに潜り込みながら、柊山が言う。

さすがに疲れてるのは僕らも同じだったので、それには全面的に賛成して眠る事にした。

それにしても、危険な生き物は居ないと太鼓判を押されたけれど、姉さんがいないのは不安すぎる。

ゆっくり眠れるだろうかなどと考えているうちにうつらうつらとし始めた。

さすがに疲れているだけの事はある。

「ご不安でしたら、私が添い寝させていただきましょか？」

そんな事を思っていると、柔らかな声が僕の耳元から聞こえてきた。

「う…ん。お願いしまふ」

「それでは失礼いたします」

夢うつつの中、柔らかな感触が僕を包む。

すべすべとした肌触りがまるで岩山の城でアウルさんに貰ったマン
トのようで、なんともたまらないです。

夢にしてはやけにリアルな存在感と言っつか何と言っつか。

ビロードのような滑らかさが僕を覆い、常軌を逸した柔らかい何か
が僕の顔に…って!?

睡魔に止めを刺されそうなところを無理やり意識を覚醒させ、どう
にかこうにか瞼をこじ開ける。

「えーっと…」

熾きになった炎に照らされた、金色の髪を白い翹翼のティアラで纏
めたアウルさんが、にっこりと微笑んで添い寝してくださってます
が、コレは一体全体どういったことでありましょうか。

「あら、目が覚めてしまいましたか？申し訳ありません宏一様」

「あ、こ、こんばんわ。って、ええええええ?!」

って言ってる場合か僕。

つい挨拶をしてしまったが、次の瞬間現実を直視して大声を張り上
げてしまった。

次いでアウルさんが添い寝しているということは、またあの岩山に
連れ込まれたか？

考えをめぐらせ辺りを見回した。

だけど、さっき居た洞の中に間違いはなかった。

「うるせえぞ宏い…ち？」

「ちょっとなに騒いでるのよ…って何でそいつが居るのよ！」

僕の叫びに飛び起きた二人は、状況を把握するのに手間取ったようである。

まあ、普通はそうだろう。ちなみに山田君はイビキかいて寝てる。

「こーちゃんから離れなさいっ！」

飛び起きた柊山が、起きた勢いそのままに僕らの間に突っ込んできた。

細身に似合わぬ膂力もさることながら、瞬発力も尋常じゃない。

「ちょっと待って」と言う間もなく、柊山はアウルさんと組み合っていた。

僕を挟んだ目の前で、まるでレスリングのようにお互いの両手を掴み、にらみ合ってくれているのだ。

「わ・ざ・わ・ざ・こんなところまで追いかけてきて、何がしたいのよっ！」

「ち、父の所業ならば申し訳ありませんとしか…」。

それも含めて先ずは落ち着いて私のお話を聞いていただきたいのです」

おっさんに通じてはいないと力説している。

「父の思惑と私の行動は、相容れなくなってしまったのです」

と言うアウルさんの言葉に、とりあえず話だけでも聞いてみようと思山を落ち着かせる事にした。

「…暴走した思山なんざ、初めて見るわ。つか、あいつを止めれるのか？」

八馬が我関せずと言った風に傍観者に徹した態度で腕組みして僕に耳打ちしてくる。

「うーん…ずっと前に通用したのなら…」

そういつて僕は思山の背後に忍び寄り、両手を広げて人差し指を立てた。

「ていつ！」

必殺ワキ腹アタック。

コレは人差し指で無防備な両脇を軽く突付くという技である。

幼少時において彼女を無力化できていたのであるが、ここ何年もなくに接点がなかった僕にとっては、現時点でも効果があるかどうか

は未知数であった。

が、しかし。

以前に比べて遥かに効果が増していたのだ。

「ひゃうんっ?!」

一気に力が抜けたのかして、柊山は背筋を反らして膝から崩れ落ちた。

それを見た八馬が、「あーなんと言つか。お前を舐めてた、スマン」と俺の肩に手を載せて感心していた。

「えと、それじゃあ…」

「話だけは聞いてあげる。まあ、瞳先生が帰ってきたら、ただじゃすまないと思うけど」

僕を制して柊山が場を仕切る。

確かに姉さんが戻ってきたならば、何事もなく穏やかにはいかないだろう。

それを受けてアウルさんが居住まいを正して僕に向き直りこう切り出した。

「アスティルティート…いえ、宏一様のお姉さまがお戻りになるに

は今しばらくかかりましょう…。

宏一様、私の事を、覚えておられますか？」

何故姉さんが遅くなるのが判るのかと言うの突っ込もうとした所で、いきなり切り出された件に戸惑った。

つか、会ったばかりで何を思い出せと言うのでしょうか。

戸惑う僕の表情に、アウルさんは一転して瞳が潤みだす。

「…こーちゃん、アンタ何したの？」

「何にもしてないよ…」

焦る僕に、さらに柊山が追い討ちをかけてくる。

だって、知らないものは知らないし…。

「で、ではそれはまた後ほどお話させていただく事にして。

もう一つ、私がここに来たのは、貴方についていきたいからです。

お許しただけないでしょうか」

「はい？」

「な、な、な、何を…」

僕は完全にフリーズした。

柊山は頭に血が上ったのかして言葉が続けられない。

八馬は完全に他人事モードだ。

しかし、一介の高校生……じゃないか、この世界じゃ。

と言うか、むしろ彼女らにとっては仇敵の生き残りという立場じゃないか。

おまけに姉さんは、どうやら彼らの戦士を大量に屠った殺戮者のはずだ。

とっ捕まえてなぶり殺しにするとか言うのならばともかく、同行を願うなんて。

「僕らを捕まえるとかなら話はわかるんですけど、どうして着いてくるって話になるんでしょう」

そう尋ねた僕に、「それは……」と視線を伏せる。何か言い難い事でもあるんだろうか。

それでも伏せた瞳を何度も上げ、僕に向かって口を開こうと努力はしているようである。

言いにくい事があるからか、なかなか実行に移れないようであるが。何度目かの時、深呼吸をくり返してようやく言葉を紡ごうとし始めた瞬間、背後から冷淡な声色が響いてきた。

「続きはアル・クルアーンで話すがいい。大人しく我らの元に来てもらおうか」

全神経を話を聞く事に集中していたため、突然の追手襲来にまるで反応できなかった。

驚いて視線を上げた僕らの眼に入っただのは、翼を大きく広げた、一人の翹翼人の男だった。

最初、おっさんかと思ったけども別人で、これがまた恐ろしいほどに男前。

今まで見た筋肉マッチョな連中とは違い、比較的にすっきりとした体格である。

しかし、そこに内封されている筋肉は、鋼鉄のワイヤーを束ねたかのように、絞り込まれている。

そして、その腰の後ろに装備された、長大な剥き身の剣。

ちょうど尾てい骨あたりに皮製の帯のようなもので包まれて、横向きにぶら下げられていた。

歩くの邪魔そうだなー、長すぎてきつと鞘から一人じゃ抜けないんだろうなー、なんて場違いな事を思い浮かべるだけで、言葉を発する余裕なんて生まれなかった。

それほどに威圧感が段違いだったんだ。

動けない僕らに、唯一アウルさんだけがすつくと立ち上がって「下

がつていてください」と僕らに告げた後、奴に言葉を向けた。

「……ミカール。アメシャ・スペンズである貴方が差し向けられるとは、お父様は本気なのですね？」

アウルさんが奴に相對している間に、柊山と八馬は未だ寝ている山田君を二人で引き摺って出来るだけ奥に引っ込んだ。僕も逃げ出したかったが、何故か身体が動かなかった。

「さて、アル・イラーフのご意思は私如きでは推し量れませぬな。

まあ、つまらぬ前置きは不要。その小僧を渡していただけますかな？」

アウルさんの言葉に、ミカールと呼ばれた男は慇懃無礼な態度でこちらに手を伸ばす。

無論それは、目的であろう僕に向かって向けられている訳だ。

絶体絶命な雰囲気は辺りを占めるなか、僕は相変わらず思案に耽っていた。

ここにこういう風に追っ手が来るということは、アウルさんがその尖兵だったと考えるのが普通なんだろう。

話を言い出したのも手勢が整うまでの時間稼ぎとも考えられる。

大体姉さんがここにいないと言う事自体がその最たるモノだ。

だけど僕は、彼女が悪意を持ってここに来たと言う事に納得できな

かった。

僕の中の全僕が、それは早計だと叫びまくるのだ。

恐らくはアウルさんを自由にしておけば、おのずとこういう行動に出るとわかっていたおっさんの差し金だろう。

でなければ僕らが逃げ出したときにおっさんの邪魔をしていたにもかかわらず、自由に動けるはずが無い。

「渡すとか何とか、勝手に話を進めないでくれる？大体アンタ誰よ。

あのおっさんの手下ならラスールとか言うんだっけ？名前くらい名乗りなさいよ」

突然の事にあっけに取られていた柊山が、ようやく動きだした。

だが、その発言に対して返ってきたのは、圧力を増した尊大な物言いだった。

「ラスール？私はそのような兵卒ではないぞ？

マラーイカを統べるべく生まれた、アメシャ・スペンズの第二位、ミカールである！」

貴族階級みたいなものだろうか。

貴族だろうが一兵卒だろうが、どちらにしても、めちゃくちや強そうなのはかわりが無い。

洞の入り口を塞ぐように立つ奴の背後には、こいつが乗ってきたのだろうカラドリウスが羽を休めながらこちらを覗き込んでいた。

「ミカール、私は争う気などありません。

どうか引いてはもらえないでしょうか。

私も、恐らくは宏一様も、戦いを好むとは思えません」

戦争はもちろんの事ながら、喧嘩も含めて暴力は嫌いです。

ええ、出来ればの話ですが。

「残念ながら、生かしてつれて来さえすれば、手段は問わぬとお墨付きをいただいておりますゆえ。参りますよ?」

そう言つて、下げていた長剣をずりりと抜き放つ。

それは、人間だったら持つことさえ不可能であろうと思われる、長く、厚く、重そうな、まさに鉄の塊のような剣だった。

僕を背後に回して庇いながら、アウルさんも腰の剣に手をやる。

「争いは好みませぬが、かかる火の粉を払いのける事を厭うつもりはありませんよ」

細身の剣をゆつくりと抜き、目の前にまっすぐに立てる。

格好良いけれど、その剣であの鉄の塊みたいな武器の相手は無理なんじゃないだろうか。

受け止めるにしても何にしても、剣がもたないのではないかと。

なんてことを考えているうちに相手が動き出した。

巨大な剣が、豪速とでも言ったら良いのだろうか、重さを伴うような鈍い残像を伴って、僕らへと突き進んできたのだ。

その剣でコレは止められない、そう思ってアウルさんを逃がそうとしたんだけど、不甲斐ない事に、目がついていても身体がついてこない。

彼女に触れようと動く前に、ミカールの剣は僕らを纏めて両断するかのように直上から降って…こなかった。

「さすがはアウリエル、アメシャ・スペンズの一角を担うだけのことはある。

この一撃をいなすとは。だが、その小僧が居ては、これ以上は無理だろう？

大人しくしていれば、さほど悪い扱いにはならないと思うぞ？」

そう言つて、僕らにギリギリ届かない位置で床を割った超重量級の剣を、手首を返しただけで肩に担ぎなおした。

そこではやくアウルさんが剣を斜めに立て、奴の剣を受け流したのだ、と僕は理解した。

アウルさんと言うと、受け流せたとはいえさすがにその威力は半

端ではなかったのか、眉を顰めて呼吸を整えている。

奴の言うとおり、もう一撃がくれば防げるとは思えない。

しかし、アウルさんの口から零れたのは、諦めの言葉ではなかった。

「言ったはずです。私はかかる火の粉を払いのけるだけだと。

それに、私が勝つ必要はありませんから」

剣を再び顔の前でまっすぐ立て、アウルさんがそう告げた直後、奴の背後で凄まじい気配の爆発が巻き起こった。

「宏一が世話になったようじゃな」

そこには、言わずと知れた姉さんが、啞えタバコで腕を組んで立っていた。

5・視線

「とりあえず、礼は言っておくべきかの？」

「いえ、当てにしておりましたから」

視線も合わせずにアウルさんが応え、僕を半ば引き摺るようにして後方へと下がる。

十分な距離がとれる前に攻撃されたらどうしよう、とか思っていたが、意外やミカールからはその素振りは見えなかった。

それはいつでも倒せるという自信がそうさせるのだろうか。

姉さんも奴の強さを感じ取ったのか、加えたタバコを捨てながら呟く。

「確かにこのままでは敵しそうじゃの」

笑みを浮かべつつ、ポニーテールに束ねていた髪をとき、風に靡かせる。

言いながら、すたすたと奴のすぐ横をまるでただの障害物だとも言うように通り抜け僕のすぐ傍にやってきた。

ミカールは、一瞬戸惑ったような表情を見せたが、すぐに口の端を吊り上げるように凄みのある笑みを浮かべた。

姉さんは僕の前に立ち、耳元で呟いた。

「スマンの。もう一度じゃ」

姉さんがずっと目を細め、僕の顎に手をやる。

何を、と思うまもなく。

唇が迫って来た。

治りきっていない昨日の傷に歯を立てて、血を啜るために。

「…痛くしないでね？」

「馬鹿者、茶化すでない」

普段は見せない仕種で僕の顎を優しく持ち、眉間を顰めて見つめる。

そして、その塞がりかけた傷口を優しく舐め、さっきまでは無かったはずの尖った犬歯を突き立てた。

プツリと皮膚を突き破るのと同時に、血を吸うためだろうか、負圧が唇に感じられた。

「…ミカールは先の戦は、若いながらも最も多くの首級をあげたと聞いています」

唇を吸う姉さんを不思議がりもせずに、アウルさんが姉さんに耳打ちする。

それを聞いているのかいないのか、悶絶しそうな僕を無視して唇を堪能した姉さんは、「ぷはぁ」と満足したような声を上げ、口元をぬぐった。

そして、真っ赤な舌で唇をひと舐めし、ねめつけるように相手を見ながら吐き出すように言い放った。

「ふむ、ならば我らのもつとも忌むべき存在と言っわけじゃな？」

ならば遠慮する必要など微塵も無いなど、姉さんは新しく取り出したタバコに火を点け、空高く紫煙を「すばぁ」と吹き上げ、言った。

「いつでも良いぞ？」

ちよいちよいと指先で挑発する姉さんに半ば呆れつつ、僕はアウルさんと共に、邪魔にならぬように更に脇に下がった。

奴は無言のまま軽く片眉をあげ、肩に乗せた剣を背後にまで回した。
ずどん。

剣を背中に回した、その次の瞬間、剣が振り下ろされていた。

巻き起こされた空気の乱流が、僕らを襲う。

背中に回したはずの剣が、まったく予備動作無しで一閃、姉さん目掛けて振り下ろしたんだと理解できたのは、その剣先が姉さんの頭上で止まっていたからだ。

それも、姉さんの両手の指が剣に食い込んだ状態で止まっていると

いう、非常識な事態だった。

「なんと……」

呆然とした表情で、奴は止められた剣をまじまじと見つめていた。

それは驚くだろう、僕だって驚いたし。

ただどその直後、奴は驚きよりもむしろ喜んでいるような表情で、まさに欣然といった態度でひとしきり笑い、こう言った。

「俺の剣を止めるとは。しかもこのような形でっ！これでこその戦いよっ！」

言うや、奴の腕の筋肉がはちきれんばかりに膨れ上がり、剣を戻そうと軋みを上げる。

しかしながら、姉さんはびくともしない。

「達人なれば、手の平で受けて叩き折る所までやれるんじゃないかの。未熟ゆえ多少荒っぽいのは許せ」

驚く僕を尻目に、姉さんは突き刺した指に力を込めたまま、そんな事を言う。

講釈はいいから、しかもそっちのが凄いいから。

奴との力比べを楽しんでいる訳ではないだろうけれど、その表情からは焦りはまるで見えなかった。

「あんまり時間をかけてもおれんのでなあ。宏一、出来れば眼を瞑っていてくれ」

そう言うや、風に棚引く髪が姉さんに絡みつき始めた。

いつもならそよ吹く風にすらなびく柔らかな髪が、それに逆らって姉さんの身体を覆う。

腰までしかなかったなかつたはずの髪は、まるで何か違うモノのように長さを変え、肩に腕に、背に腹に。

そして両の脚にまで隙間なく包み込む。

それは、まるでそれは漆黒の…鎧。

「ははっ！そうか、貴様がアステイル・ティートか！アル・イラーフから話は聞いていたが、艶血公主の二つ名、伊達ではないようだな！」

本当に楽しそうに笑うミカールに、姉さんは不機嫌そうに言い返した。

「私の名は野見山瞳じゃ。それ以外に名は持たぬ」

「貴様がなんと言おうと、その力、明らかに伝え聞いた話そのものよ。」

貴様は知らぬであろうがな、我等が同胞には鮮血に塗れた貴様がいつか再び現れて、災いを為すと信じられているのだな。

その首貫い受けて、民に平穩をもたらすのも俺の勤めよ！」

言つなり剣から手を離し、その剣の峰を足場に、姉さんとの距離を詰める。

両手を塞がれた形の姉さんに一気に詰め寄り、無手で何をするのかと思つたら銀色の輝きがひらめいた。

予備の短剣？！

奴は腰に下げた剣のホルダーの内側に、さらに短剣を収めていたのだ。

巨大な剣に目を奪われていた所に、間合いも剣速も違う短剣が襲い掛かってくる。

コレに対処できる者はそうはいないだろう。

諦めにも似た感覚が僕を襲う。

しかし、僕の横で固唾を飲んで見守っていたアウルさんが、ぼそりと「大丈夫」と口にした。

その言葉通り、姉さんを覆う黒髪の鎧が覆っていない咽喉元に食い込もうとしていた短剣は、翻った黒い何かに絡めとられ、その勢いを喪失した。

「なんと！」

そう叫んで、奴は抗うことなく瞬時に短剣を捨てて間合いを広げ、

姉さんとにらみ合った。

巨大な剣の刀身から指を抜きつつ、姉さんは短剣を絡めとったその黒髪の束に指を伸ばす。

身体に巻きつき鎧となる艶やかな髪はまた、それ自体が意思を持つように動き、短剣を受け止めたのだ。

「…コレをやると、きゅうていくるが痛む。

あんまりやりとうは無いが致し方あるまい」

姉さんの一族が武器を持つことを由としない理由、そ…その一端を垣間見れた気がした。

いつもは高い位置で纏めているか、ポニーテールにしている髪だが、解いたのにはそういう意味があったのか。

そんな出鱈目な、普通ならば違和感満点の光景のはずなのに、僕にはとても綺麗に見えた。

ぼうつと見とれているのもつかの間、姉さんは一気に終わらせるつもりなのか神速の動きでミカールへと突き進んだ。

身体を覆う髪の鎧は、爪や拳に爪先は言うに及ばず、肘や膝なんかの突起部分全てが研ぎ澄まされた鋭利な刃物のようになり、身体どの部分が奴に触れてもダメージを与えられるようになっていた。

姉さんの持つ膂力と相まって、一族でも稀有な戦士だったのも頷ける。

しかし奴も然る者、そんな姉さんの攻撃をすんでの所でかわし、翼を広げて空へと舞い上がった。

「逃さぬ」

そう言つて鎧の一部を解いた姉さんだったが、次の瞬間にはどういふわけか僕らの目の前にまで下がり、「伏せろ！」と叫んでいた。

同時に、さっきまで姉さんがいた場所が白い閃光に包まれていた。

激しく瞬く稲妻が、そこに落とされたのだ。

「奴のカラドリウスが、主を守りおつたか」

稲妻の起こした火を消し、僕らは外に出た。

姉さんは天を見上げ、最早姿も見えぬ飛び去っていった灰色の巨鳥を視線だけで追っていた。

「何とか退けられましたわね」

アウルさんの言葉に「うむ」と答えた姉さんが、元の長さに戻った髪を束ね、地面に落ちた短剣を拾い上げ僕に放り投げた。

「宏一、これはおぬしが持つておれ」

くると弧を描いて飛んでくる短剣を慌てて避ける。

さっきまで姉さん達の動きがアレほどはつきり見えていたというの

に、軽く放り投げられた物の動きがまるで見えなかった。

護身用にな、と言われて渡されたもので怪我をしたら笑えない。

地面に突き立った短剣を抜き取り、鞘が欲しいなと呟いたら、その辺の木の皮を剥いで巻きつけておけと言われてしまった。

「アイツ、逃げたのかなあ」

言われたとおり木の皮を剥がし、鞘代わりに巻きつけズボンの背中側に差し込みながら聞いてみた。

「それはあるまい。役目を優先しただけじゃろ。」

戦闘狂というわけでも無さそうだったしの」

姉さんは、奴が放り出していった大剣を拾い上げ、片手で部分と振り回しながら、「追っ手がじきに雲霞の如く沸いてこよう」と、ここを引き払う事を仄めかした。

「生きて返したのは失敗じゃったかの」

「はい、間違いなく。出来るだけ早く移動なさったほうがよろしいかと」

手勢を引き連れて、舞い戻ってくるに違いない。

次は確実に、準備万端整えて、だ。

「では行くぞ。その三人、何を固まっておる」

柊山たちは、ほらの隅っこで3人小さくなって固まったまま気を失ってしまっていたのであった。

「なまくらじゃ」

そう言つて、大剣を片手で軽々と振り回す。

その度に、「おー」と言つる感嘆の声が響く。

「斬る、と言うより叩き割るためのものじゃな。切れ味など考えられてはおらぬ。

日本刀などとはそもそも別の武器じゃと思つたほうがよからう」

自分が教えを受けた剣術を臆服するわけではない、と言いつつも、いかに日本の刀が持つ切れ味と美しさの両立が難しく、そして素晴らしいかを八馬達相手に滔々と語つていた。

早く移動しないといけない、と言つたのは姉さんのはずである。

何故にこんな話になつてゐるのだろうか、と言つと。

あまりにも非常識な姉さんとミカールとか言つる奴との戦いで気を失つてしまつた三人が、どうにか動けるようになるまで若干の時間が必要だつたのが発端だつた。

「今しばらく動けんか。さて」

僕らは、失神状態の3人を見下ろしながら、どうしたものかと首を捻っていた。

「あら、それでしたら私のディオスちゃん運びましょうか？」

「なんじゃオヌシ、まだ居ったのか」

「ちよつと姉さん、そんな言い方はないんじゃない？」

なにやら手助けしてくれるというアウルさんの言葉を、けんもほろろに叩き潰す姉さんに、僕は思わず苦言を吐いてしまった。

「…宏一、おぬしこやつの味方をするというのか？」

「味方っていうか、ついさっき僕を守ってくれた人なんだよ？そんな言い方はないんじゃないかって」

「宏一様…。ありがとうございます」

僕の言葉に対照的な反応を示す二人。

幾ら一族間で過去に何かあったからと言っても、この人と何かあった訳じゃないんだから、そこまで嫌がらなくても、と思う僕は変なんだろうか。

「あのさ、別にアウルさんのせいってワケじゃないんだからさ。

それに手助けしてくれるって言うんだからありがたく甘えさせてもらって…も、良いんじゃないかなあ、と僕は思うわけで」

段々と僕の声に勢いがなくなっていくてるのは、別に姉さんがこっちを睨んでるからだとか言うわけではない。

アウルさんが、「ありがとうございます、微力ながらお力になります」と感極まったかのように僕に抱き付けてくれたのを見て頬を引き攣らせているからで。

「ん…どしたのこーちゃ…ひいつ！」

そんな折、空気を読まずに目覚めた柊山が、殺気むんむんの姉さんの形相を見て、息を飲んで固まった。

「借りがあるからの、いきなり手は出さん。

立ち去るならばよし、そうでないのならば容赦はせぬ」

そう言った姉さんの指に力が込められ、ビキビキと血管が浮き上がる。

綺麗に揃えられていた爪が細く長く尖りはじめる。

武器を持たずに闘うための、一族の誇りたる身体制御能力の、その顕現。

全身に限なく意思を通じさせ、その強度を増し、身体を必要な時に必要なだけ変異させる。

姉さんのそれは、恐ろしく近接戦闘に特化された、まさしく一族の化身と言っても過言ではないものであった。

「お願いです、私もお連れください。

端女としても構いません、宏一様と共に居させてください。

何に代えても私がお守りいたしますから」

「残念ながら、おぬしに守ってもらわんでも私が守るゆえ、お引取り願いたいところなのじゃがの？」

そういつてまた睨みあう。しかし、姉さんにしろ、アウルさんにしろ、だ。ここまで強いとき。

普通、こういう風に異世界につつたらさ、「僕が、何にかえても君を守るから」なんて言っちゃうところでしょう？

こんなんじゃ守ってもらうばかりで立つ瀬が無いというか何と云うか。

それに何故僕にこれほどまでに執着するのは謎なわけだが、正直な所悪い気はしない。

美人だし。

ともかく、本当に何故こうまで慕ってくれるのか。

不思議すぎる…が一緒に居ればそのうち判るだう、と言うことで。

「姉さん。アウルさんは悪い人じゃないよ。ねえ、いいでしょう？」

「宏一はそれでいいのじゃな？」

真っ直ぐに僕を見つめてくる姉さんに、僕は視線をそらしそうになりながらもゆっくりと頷いた。

「共に、と宏一が言うのなら、致し方あるまい」

「よろしいのですか!？」

「いいの!？」

ちょっとブスつとしてはいるけど、意外な答えに僕もアウルさんも信じられないとばかりに聞き返してしまった。

断固として撥ね付けるかとも思っていただけに、ちょっとばかり拍子抜けだ。

でもなんでそんなに簡単に受け入れられたんだろうか。

「お主が良いと決めたのである? 私はそれに従おう。

仮にも主人となるおぬしの言葉じゃ、尊重せねばな」

「ちょ、ちょっと! 主人って、一体どういう意味?」

「主人、夫、亭主、連れ合い、旦那、はずばんど、とまあ色々と言いはあるが、どれも同じ意味を含んでおるな。どれが良い?」

「いや、そうじゃなくて。僕が旦那ってどゆこと?」

慌てる僕に、姉さんは何をいまさらといった顔で、腰に手を当てて

得々と語りだした。

「供物を捧げに行くものを護衛するのは、最も歳の近い娘なのじゃ。

そして、その供物を捧げた男子と、それを影から助けたおなこの二人は、将来を誓った許婚となるのが一族の習わしじゃ」

言って、ニコリではなく、ニヤリと笑う。

「えっと、ということは、僕らって実の姉弟なんじゃなかったの？」

「いいや！嘘偽りなく姉弟じゃ！」

巨大な胸を惜しみなく張る。

「兄弟での結婚って拙いっていうはなしじゃ……」

「我が部族では、姉弟での結婚は奨励されておった。

濃い血こそが、力となる、とな。

実の所、先の世界では自重しておった。

郷に入りては郷に従えと学んだ故にな。

だが、こちらに戻ってきてしまったからには仕方ないっ！」

やけに強い口調で言い切ってくださりました。

「…えっと、我が姉上はこう申しておりますが、アウルさんの的には

そこんところどうでしょう」

もう何がなんだかさっぱりになった僕は、一縷の望みをアウルさんの返事に求めた。

「私どもの部族でも、良き血を残すためにはそのような行いも認められておりますが。

それに、妻は多いほうが男としての値打ちが上がるとされています。良き血を求める幾人もの妻を娶る事が、男としての甲斐性でもあるので。

先ほどのミカールなどは、妻が4人、愛妾が10人を超えているとの噂です」

宏一にも頑張っていただければ…なんて言いながらぽつと頬を染めるアウルさん。

駄目だこりゃ。

どうもその辺り、元の世界と倫理観が違うようである。

「あちらでも、中東辺りでは結構当たり前であるぞ?」

僕の微妙な表情を読み取ったのか、姉さんがそんな特異な地域の事を言い出した。

話がややこしくなるからやめてください。

「だっ！駄目よっ！そんなの駄目なんだからっ！」

二人の妻希望者に挟まれて頭を抱えていたら、横からもう一人増えた。

ハアハアと息も絶え絶えな感じで力説してくださる柊山梓嬢。

それを見て姉さんとアウルさんは「ほほう」とか「あら」とか、いう反応をしてくださりやがりました。

しかし、これ以上の力オスは勘弁して欲しい。

僕は固唾を呑みこみながら突っ込んだ。

「なんで柊山がそこで出てくるのさ」

「なんでって！私だって、私だって、ずっとずっと、こーちゃんのことが好きだったんだからっ！負けないんだからっ！」

あれえ？

なんだかもてもですよ。

泣き出しそうな柊山を、どう扱っていいか困りきった僕に、のんきな声がかけられた。

「お取り込み中のところ、すんませーん」

「うわっ、って八馬か。何だよ」

見れば気を失っていた山田君とともに復活し、胡坐をかいてこちらを見物していた。

「何だよじゃねーよ。って言うかむしろこっちが何だよっつー話だっつの」

その横でうむうむと頷く山田君。

なんと言つか、達観したようなすっきりした表情にも見える。

「状況がどうにも理解出来んのだが。やたらと強そうな奴が襲ってきた所までは記憶してるが、そこからなんで痴話げんかに発展してるのか。さあきりきりと白状しやがれ！」

「何で僕が悪者なんだよ！」

「こういう場合十中八九、男が悪者だ」

端的に言っただけの山田君。

何か嫌な思い出でもあるんでしょうか。

「別に宏一が悪いわけではないぞ？単なる話の流れじゃ」

「そうですね。何もやましい所はございません」

「そつ、そつ…なのかしら」

実際僕が何かしたわけじゃないから、3人が3人とも擁護してくれるのはとても助かる。

「…じゃあそれはいいとして。ありや何です?」

そう言つて八馬が指差した先には、ミカールが残していった巨大すぎる剣が転がっていた。

「…見てわからんか?」

「わからんかといわれても…剣かな?と思わなくもないですが、サイズ的におかしすぎて」

「大きさは兎も角、剣と言うのは正解じゃ」

言いながら、剣に手を伸ばしひよいと持ち上げ、眼を見開いて驚く二人に見せ付けるように、姉さんは剣の刃を指の腹で撫でる。

「見よ、研ぎもロクに入っておらん。重さと、振り回した際の慣性で目標を破壊する為のものであるな。要するになまくらじゃ」

そう言つてぶんぶんと振り回して今に至るわけである。

「私は使わんし、他の誰も使えん。ゴミじゃな」

そういつて投げ捨てようとした剣を、柊山が手を上げて「じゃあ私が持ちます!」と言い出した。

「いやいや柊山さん、野見山先生は尋常じゃないからああいう風に振り回せるわけであつて」

「え、でも」

「いいじゃん、持つって言ってんだから柊山に持たせてやれよ」

無理だやめておけという山田君を、八馬が満面の笑みを浮かべて諭していた。

「よっ、っつと」

ぶおん。

「なんですとー！」

姉さんに手渡された剣を、柊山はさすがに片手で言うわけにはいかなかったが、両手で持ち上げ何とか正眼に構え素振りする事に成功していた。

「さすが柊山。剛力無双は伊達じゃないな」

「ソレで呼ぶなっ！っていうか、見た目ほど重くないわよ？」

剛力無双と言うのは古い馴染みの友人しか知らない柊山の別名だ。

さすがに花の乙女としてはそう呼ばれて嬉しいはずが無い。

憤慨して八馬に剣を向けかけたが、姉さんが剣先を抑えてソレを押しとどめた。

「いくら見た目ほど重くは無いと言っても、掠っただけで並みの人間じゃと大怪我からの。」

持つのはいいが素人は盾に使うくらいにしておれ」

と、姉さんからのお達しである。

まあ、刃渡り2 m超で柄を含めれば3 m近く。

で剣幅が30 cm、厚さで5 cmはあるうかと言う代物である。

持てるからと言って、素人に振り回された日には周りの僕たちが怖すぎる。

「素人…剣道の段位持つてるのに…じゃなくて、何か役に立てればって思っただけですけど」

と消沈するのも束の間、アウルさんが空を指差す。

「それよりも、早くここから逃げ出さなければいけないかと存じますが」

「ふむ、もう来おったか」

「まあアレだけ時間無駄にしたらね」

思わず溜息を吐いてアウルさんが指差した空を見上げれば、例の巨大な鳥さんの姿が遠くに何匹も確認できた。

「さっきの奴はいないみたいだね」

「ミカールは、武器もこのとおり持っておりませんし、恐らく一旦帰還したと思います」

柊山の持つ大剣をに視線を送りながらアウルさんが言うのを受けて、姉さんが呟く。

「部下の得物を奪ってでも自分が先頭に立って追いかけてきそうな奴じゃったかの？」

「高みからカラドリウスの攻撃だけを行えば、手が出せないと踏んだでしょう」

ソレは危ない。直撃したら命が死んでしまう。

取り急ぎさっさと逃げ出そう。

流石に、上から攻撃されるのは防ぎようが無いし、こっちから手出し出来ないんだから。

「その辺は心配なかるう。ほれ、アウルとやら。おぬしの仕事じゃ。よもや同族には手を出せぬなどとは言わぬだろうな？」

「お任せください。全力をもって、道を開いて差し上げます」

そういつて、空に向かって高らかに指笛を吹いた。

「来い！ディオス・パテール！」

その声と共に、樹木を縫って、巨大な赤い鳥が降って来る。

それは、僕が最初に押し潰されて気を失う前に一瞬だけ見た、あの鳥であった。

降り立ったディオス・なんちゃらを見上げていたら、視線が合ったのかして、長い首をこちらに向けて、くえ？と鳴いた。

「うは、案外可愛い鳴き声じゃねーか」

「うん、僕も気絶するときに見ただけに、ちょっと印象悪いなあ、って思ってたけど、拍子抜けだね」

「だが、正直でかすぎて怖いぞ」

僕たちが、降り立った鳥さんにビビっていると、その鳥の頭から人影が一つ現れた。

その人には見覚えがあった。

最初に僕が目覚ましたときにアウルさんの部屋に入ってきた、そして、あの食事をしていた広間にあのおっさんの供として入ってきた、あのメイドの人だ。

そうだよね？と尋ねた僕に、アウルさんは困った顔をして頷き、彼女の紹介してくれた。

「はい、長年私付きの侍女として仕えてくれる、ファナーと申します」

そう紹介されたファナーさんはふわりとその身を宙に浮かべ、音もなく着地し、そして軽やかに一礼した。

前の時はあんまり人となりをみる機会がなかったが、今ならばその

落ち着いた雰囲気は辺りを柔らかく包むような感じがよくわかる。

身長は姉さんより若干低い程度で、僕らの感覚では十二分に背の高い女性だった。

「ファナー、準備を！」

「はい、アウリエル様」

アウルさんが一声かけるや、翼で覆うようにしてアウルさんを僕らの視線から遠ざけてくれた。

おまけに巨大な鳥、ディオス・パテールと言う名の鳥さえもその翼を開き、僕らと彼女との間に壁を作ったのであった。

何をしているのやらと首を傾げた僕らであったが、まだ遥かに遠い間合いから敵の闇雲な攻撃が始められ、それどころではなくなってしまうた。

とは言え、大まかな位置しか知らされていないためか、周辺の森を焼いてゆくのみで、直撃は一向になかった。

こんな状況にもかかわらず、アウルさんの鳥は落ち着いたもので、なんとも豪胆なものであるなど、姉さんすら感心して見上げるほどだった。

翼の隙間から、ファナーさんの声が漏れると、ディオス・パテールはゆっくりと翼をたたみ、アウルさんを僕らの前に送り出した。

白金の輝きを放つ甲冑が目にも痛い。

黄金色の髪が、翼の生えた兜から棚引き、背には真っ白な翼が折りたたまれている。

凛々しさが美しさと渾然一体となった姿は、身に着けたその甲冑よりも輝いて見えた。

「では、宏一様。行つて参ります」

磨き上げられた甲冑を身に着けたアウルさんが、そう言つて僕を柔らかに抱きしめ、頬にキスしてくれた。

「うん、気をつけて」

もうちょっと気の利いた言葉をいえないものが、と自分で思いながら、彼女を見送った。

アウルさんは僕の言葉に嬉しそうに微笑んで鳥の背に飛び乗り、その背に置かれた鞍に備えられてた長大な槍を手にすると、アウルさんは威勢良く「参る！」と、ただそれだけを大呼した。

その声を受けて、巨大な翼が広げられる。

そして、ひと羽ばたきでふわりと宙に浮かび、次の羽ばたきで、一気に天高く舞い上がっていった。

「あの鳥…ディオス・パテル、と言ったか。奴の想い、嘘偽りではなさそうじゃの」

姉さんが、腕を組んで見送りながらぼりと呟いた。

それを耳にしたファナーさんは、目を伏せて姉さんにこう告げたのだ。

「はい。幼少の砌、恋をなさったお相手のお名前をいただいたと言うことです」

ぎゃりん、と。巨大な鳥同士が高空で交差する。

その光景を見ながら、ファナーさんは姉さんに続けてこう言った。

「私はお嬢様のお気持ちも存じております。

ですから、いかにアル・イラーフのご指示と申しましても承服いたしかねまして、このたびの出奔と相成ったので御座います」

絶対君主制、ってワケじゃ無さそうだけど、幾らなんでもそれだけの理由で仮にも指導者的立場であろうあのおっさんに対して反旗を翻すってのはどうにも信用できなかった。

「確かに、アレだけの能力を持つ者が裏切るというのも怪しいもんじゃが、まあ問題なかるう。ホレ見てみい」

鳥がすれ違った際に火花が散り、すさまじい剣戟が繰り広げられているのだらう。

言われて見ればミカールと言う追手に抗って僕を助けた時点で、アウルさんに帰る場所はなくなっただ。

「宏一様。アウル様は貴方様のお傍に置いていただけるのならば、

一族をも捨てる覚悟でありましょう」

戦闘を見守るだけで手も足も出せない僕に、そう告げてくる。

戦う事も出来ないそんな自分が、情けなくもあり、悔しかった。

優勢な展開で追手を押しているアウルさんを見つつ、ふと先程の会話で気になった疑問を姉さんにぶつけてみた。

「デイオス・何とかに意味があるの？」

「意味か？簡単な事じゃ」

苦笑と共に、僕の肩を掻き抱き、耳元に囁く。

「おぬしがこの世界に居た頃の、真の名じゃ」

聞いて、僕は胸の鼓動が一段大きく打ったような感覚に襲われた。

なるほど、その頃からずっと、思ってくれてたって言うことなのか。

そこまで思ってくれてるのは嬉しいんだけど、いつ僕会い、僕はそこまで思われるだけの何をしたのだろうか。

戦い続ける空に、槍の打ち合う火花とカラドリウスの吐くオーロラのような輝きが時折交差する。その煌きをよそに、僕らは見物人と化している。

「負けないんだから、負けないんだから」

柊山は命を懸けているアウルさんに対してなにやら対抗意識を燃やしているようである。

そんな彼女を見て、つい僕は彼女の肩を抱いてしまった。

「ふえ？、な、何？」

驚いたのかして大きく眼を見開いた彼女の耳元に、僕はゆっくりと囁き、伝えた。

「心配しなくっても、僕、柊山…じゃなくて、梓ちゃん…ううん、あーちゃんのこと、好きだから、心配しないで」

「本当？」

「嘘でこんなこと言えないってば…ただ…」

ただ問題は……。

「どうしたの？」

上目使いで覗き込んでくる彼女の表情の破壊力に焦ったためか、僕はつい口走ってしまっていた。

「姉さんも好きだし、アウルさんも好きになりそうなんだよね。うん」

「……首絞めていい？」

締めてる締めてる。

「ごべんだだい」

「ふんだ！」

ちよつと死にそう。

「はああああー………っ！」

ガギン！

甲高い響きを上げて、ついにアウルさんが最後の敵を打ち倒した。背に乗る翅翼人の騎士と共に落下してゆく巨鳥が森へと消える。

「敵の探索も、これで一から振り出し、かな」

呟いた僕に、姉さんは無表情に言い切った。

「そんな容易いものでもなかつた。」

戻ってこなければ、次が出てくるだけの事。

ミカールとやら、すぐに戻ってこよう」

「ミカールは恐らくアル・クルアーンへと戻っているのだと思います。」

そして、今度は精鋭を引き連れて再び、ここへ」

申し訳無さそうに語尾が消えてゆくファナーさんを横目に、「はあと、姉さんの溜息が長く吐き出される。」

「どちらにせよ急いで此処を離れねばならん。そこでアウルよ、頼みがある」

真面目な顔で見上げた姉さんの鋭い視線が、降りてきたアウルさんを刺す。

「囧に成れとかそう言うのは止めてね？寝覚めが悪くなるから」

「それで話が済むのならば、そうしたいところじゃな」

そんなことで振り切れるならば、苦労はしないだろうと言い、

「しかしおぬしも人聞きの悪い事を言う。私はそこまで人非人では無いぞ？」

と続けた。

再び見上げた姉さんの視線の先には、「くえ？」と首を傾げて姉さんを見下ろす巨鳥の姿があった。

とつと此処を離れるために、アウルさんの鳥、ディオス・パテールに乗せて貰うということに成ったのである。

成ったのではあるが…先ず問題になったが、これって何人乗れるのか？ということだった。

幾ら大きいとは言え、そう何人も乗せて飛べるとは思えない。

鳥つて極限まで軽量化したから飛べるようになった生き物だって聞いた事があるし。

デイオス・パテルの太い首を撫でながら、それでも僕はアウルさんに尋ねてみた。

もしコイツがみんなを乗せて飛べるなら、それで結構ラクチンじゃないかなと。

「私を含め、皆さんをお乗せしても飛べるとは思いますが……もしその状態で追手に見つかれば、間違いなく追いつかれてしまうでしょう。ですから、こういうのはいかがでしょう」

につこりと微笑んだアウルさんに、僕はちよつとだけ嫌な予感があった。

いやまあ、良いんだけどさ。

「良くないわよ。チョットこーちゃん！アンタにやけてるんじゃないわよ」

柊山の声に、ちよつぱり身体を震わせる。

でも大丈夫、此処までは彼女の拳は届かない。

「大丈夫ですか？お辛くありませんか？」

「ええ、とっても気持ちいいで…じゃあなくって、はい、大丈夫です。平気」

ちよつと怖いけど、プラスマイナスでかなりプラス気味です。

ああ、背中に当たる感触が素敵過ぎる。

「このような使い方は、意図しておりませんでした…」

今僕は、アウルさんに抱きかかえられるような形で飛行中である。

さすがにずっと手で支えっぱなしは無理だろうという事で、貰ったマントでキツチリと縛り付けてもらっているのだ。

おかげさまで背中に当たる感触が恐ろしいほどに伝わってくる。

あからさまなアドバンテージを取ろうとする翅翼人二人に対し、他の誰かを、という意見が姉さんと柊山から出たけど、ファナーさんが却下した。

「お嫌ならば、歩いてどうぞ」と言われてしまえば仕方がない。

こうして僕は至福の空中散歩を満喫しているわけである。

アウルさんの斜め後ろには巨大な鳥、ディオス・パテール。

その鞍に跨るのはファナーさんである。

そしてその後方、背中の平らな部分には、残る4人が羽毛に体を埋

めるようにして乗っているのである。

因みに大剣は足で掴んでもらってる。

気分よく景色を眺めていると、物騒なセリフが背後から聞こえてきた。

「ディオス・パテールよ。汝の主の身に、危険が迫っておるぞ？」

鳥も律儀に「くえ？」と答え、なにが？と言う眼で首を回して背中
の姉さんを見、姉さんと柊山、おまけに八馬と山田君までが方向を
指差し示すと、こちらに改めて視線を戻し、高らかに一鳴きした。

すると何故だか奴の翼の先端付近、風切り羽と呼ばれる辺りが、蒼
い燐光を発し始めた。

「およし！ディオス・パテール！」

「ちょっとまったあああああああああ」

思わずだらりと下げていた足を、反り返らせてアウルさんの足に絡
める。

その次の瞬間、ファナーさんの静止も聞かずにあのクソ鳥野郎は、
ついさっきまで僕の下半身があった場所を眩く輝く雷で焼きやがっ
たのである。

「すげえ……。これが、あの光か」

目をきらきらさせて、楽しそうな八馬。

そうだ、僕らを襲いかけた蟹みたいな虫を一掃した、そしてミカルが引き上げるときに上空から放たれた、アレだ。

しかし八馬。僕の下半身が、もうチョットで黒コゲになりかけたのは無視か。

「自己責任だ。俺は関知せん」

なんか、僕の味方はアウルさんだけな感じがしてきた。

「申し訳ありません、あの子ったらやんちゃで。

後でお仕置きしておきますわ。

あと、私は何があっても宏一様の味方ですわ。

何時でも何処でも、私をお呼びください。

男性へのご奉仕も、ファナーから教わっておりますから……」

そこまで僕に囁いて、アウルさんは言葉を切った。

四つの怒りに燃える視線に、ちよつと息を呑んだのだ。

どうなることかと思ったけれど、幸いなことに味方同士で一戦交える事は未然に防がれた。

翼ある人が乗るカラドリウスと呼ばれる鳥が、僕らの視界に入ってきたから。

冗談が言える場合じゃ、なくなってきたんだ。

「こちらを見つけたな。では、行くぞ」

そうやって、姉さんたちを乗せたディオス・パテール……長いな。

「ねえアウルさん。ディオス・パテールって呼びにくいから、ちょっと変えてもいい？」

「はい、宏一様のなさりたいように」

「じゃあパテちゃん」

はい決定。

くえー！？、つて反論は受け付けません。

「アウルさんはくすくすと笑って、鳥さんのことを僕に倣い「パテチヤン」と呼んだ。

「くうええええええええええ」

パテちゃんの悲痛な泣き声と共に、出来るだけ例の岩山【アル・クルアーン】とか言うのから離れる方角へと全力で飛び始めた。

カラドリウスと呼ばれる同じ種の鳥だというのに、パテちゃん是他の鳥よりも飛行速度がかなり速い。

多くの人を乗せている分だけ遅いと思つてたんだけど、他より一回り以上大きな翼は、それを重荷とは思わないように羽ばたきを増し

どんどんと引き離してゆく。

アウルさんも僕の重さを苦にもせずに、速度を増す。

この人、パテちゃんに乗らなくても速いじゃないか。

「はい。私のように複数の翼を持つ者は、身体能力のみならず、様々な点でラスールたちとは比べ物にならない力を有しています。残念ながら生まれ出ること自体、ごく稀ですが」

それはまたミカールも、か。数十人のラスールを瞬殺…いや、殺してないけど。

まあ、あつという間にやつつけた姉さんを手こずらせるんだから、並じゃあないとは思っていたけれど、上位種族だったわけだ。

ファンタジー世界なら、エルフにおけるハイ・エルフ、ゴブリンにおけるホブ・ゴブリンって所かね。

かなりの距離を飛行しても、飛ぶ速度がまるで落ちないし。

追手も頑張ってはいるが、そもそのスペックが段違いなのは如何ともしがたいらしく、みるみる姿が小さくなってゆく。

「降りるぞっ！」

姉さんの声と共に、僕らは一斉に巨木の森へと降下する。

そうして、幾重にも折り重なるように生える樹木の隙間を縫うように飛び、いつしか追手をまく事に成功していた。

敵をまいたあと、再び空の旅を暫く続け、適当な場所を見つけて再びぬぐらに出来そうな洞を見つけ、腹ごしらえをすることになった。今度の休憩場所は、やけにグネグネとした幹を持つ、まるで盆栽を巨大にしたかのような樹の根元だった。

見つかりにくく、かつ食料調達が容易だから、という事らしいが、木の実でもなっているのだろうか。

火を用意せねば、との姉さんの言葉に、アウルさんが木の枝を擦り合わせて焚き火を熾そうとしたが、

「ほれ」と差し出されたタバコ点火用のライターにより時間を費やさずにすんだ。

「このような小さなもので、火が」

呆然と呟くアウルさんであったが、八馬が思わず突っ込みを入れていた。

「って、おっさんの剣はめっちゃ燃えてるじゃねーか」

「アレは…」

アレはどう見ても、僕らの世界の技術でも作れそうにない。

ガスバーナーを束ねても、あんな風に炎を纏わりつかせたりは出来ないし。

「あの父の剣は、形こそ違え、私の物と変わらぬ、質が良いとは言え、ごく普通に鍛えた剣ですわ」

「そうなの？」

「じゃあ何？あの炎とか」

僕や八馬だけじゃなく、山田君さえも思わず身を乗り出して聞いていた。

「あれは、私どもの個々人の力です。」

父は炎。

私は光。

ミカールは、伝え聞くところによれば、水とも言われておりますが、まだ誰にもその力を見せておりません。

いえ、見た者は生きていない、といった方が正しいでしょうか。

彼の使う力は大きく、周囲の味方さえも巻き添えにするため、常に単騎で動くのです。

それに、彼自身それを用いなくても勝ち抜けるほどの力量ですし。

他にも多種多様な力を、皆が備えております。

無論、力の大小はあれど、ラルースの一平卒に至るまで」

そうして、僕を見つけたときに辺りを照らしたのは、彼女の能力だったのだと告げられた。

しかし、力の差はあれ、そういう能力があるのを知っていた姉さんは、だからドラゴンよりも厄介だって言ってたのか。

とはいえアウルさん曰く、自身が持つ能力、さすがに使いすぎれば疲れるのだそうだ。

それでミカールは使わなかったのか？

奥の手は隠しておいてここぞという時に使ってこそ、って？

まあそんな事はさて置き、とにかく腹ごしらえである。

食料が簡単に確保できると姉さんは言っていたが、どうも木の実がなっている気配はない。

さて近くに食べられそうな動物でもいるのかと辺りを見回していた僕らであったが、姉さんは迷うことなく巨木の幹につかつかと歩み寄り、その表面を確かめるように撫でていた。

どう思ふのかと思つたら、そのまま手の平にもう一方の手の平を重ねて「ふんっ」っと短い気合を入れた。

何をしたんだろうかと疑問符を浮かべたのもつかの間、上空からばさばさと落ちてくる、巨大な樹に見合った大きさの葉と共に、それ

に張り付いたままの、巨大な。

巨大な…。

芋虫。

「いいいいいい嫌あああああああああああー！
！……………！！」

予想外の落下物に、僕ら一同はこの世界の住人（元も含む）を除いて、一様に動けなかった。

ああ、一人盛大に悲鳴を上げたのは居ただけ。

山田君だ。

そりゃあもう、派手に叫んで涙流して姉さんの背中に回りこみました。

柊山は顔を引き攣らせて固まって動きません。

許容範囲を超えすぎて、悲鳴を上げる暇もなかったということだろう。

八馬はというと、最初の衝撃を受け流してからは巨大芋虫にすら感動して、目をきらきらさせてた。

「どうかなさいました？」

そんな僕らに首を傾げながら、大人の腕位ある黄緑色の芋虫を、アウルさんとフアナーさんは平気で拾い集めている。

「毒も有りませんし、ご覧のようにこの樹の葉を常食にする、害のない生き物ですわ。…皆様どうなさったのです？」

虫が嫌いって訳じゃない僕も、流石にそれを大量に抱えて持つてこられたら引きます、ええ。姉さんはくすくす笑ってこちらを眺めるだけだし。

一人…いや、一羽だけ嬉しそうにしてるのはパテちゃんくらいだ。

あちこちを這う芋虫を長い首を伸ばしては啄ばんでいる。

見た目で驚いたのが落ち着くと、再び大事な点に皆が気が付いた。

「もしかして、アレを喰うのか？」

顔どころか全身を震わせて、山田君は怯えるように誰とはなく尋ねた。

「これはこの樹でしか取れん貴重なものなのだぞ？蛋白源としてはかなり優秀なものじゃというのに…」

「お味もくどくなくて、お口に合うかと思いますが…」

「これといった手間も掛かりませんし。何より捕らえるのが楽です」

三者三様に食べ物としての大芋虫を褒めちぎる。

そうは言っても、お口に合う合わないじゃありません。

正直、材料がそれと知ってしまうと、ちょっと口にしたくないかなあ、って。

僕の意見に生徒一同うんうんと頷いた。

「案外やわなヤツラじゃの」

芋虫は勘弁してくださいと泣いて縋った山田君の甲斐もあつてか、姉さんが見た目のグロくない生き物を狩りに行ってくれた。

笑いながら戻ってきた姉さんは、ちよつと小振りな羽の無い短足な鳥のような生き物を捕らえてきてくれた。

あと、おまけにやけに太い棘で覆われた果物の房もその肩にかけていた。

「これなら食べられる」

涙を流しながら、山田君は焼けた肉を頬張っていた。

だが、副食として添えられている芋虫の「中身」だけを搾り出して作った、どろりとしたスープ状のモノには一切手を伸ばそうとしなかった。

実は彼、先ほど一回気を失っている。

芋虫の中身を搾り出す段階で、意識をなくしてしまったのだ。

「私も、パスだなあ…」

僕と柊山、同じくギブアップ。

原材料を知ってしまうと、日本人的な感覚からすると拷問に思えてしまう。

八馬だけが、葉っぱ丸めて作られた簡易スープ皿に入れられた液体を恐る恐る、口に運んでいた。

「…美味いんじゃないの？」

既に空にした器を手に、姉さんが首を傾げる。

「姉さん。食べ物は味が良ければいいってもんじゃない…。虫嫌いだとこれは無理でしょ」

いつも作ってくれていたご飯は、アンナに綺麗に盛り付けてあったのに、この短期間であつという間に再順応でもしちゃったんだろうか。

「そんなつもりは無いのじゃが。仕方ないのお」

そう言つて、およそ殆どが残った僕らのスープ皿を集め、残すのは食べ物になった連中に悪いから、とすべて平らげてしまった。

唯一食べきつた八馬曰く。

「味は悪くない。原材料を知らなければ、美味いと思えたんじゃないだろうか」

と評していた。

そんなこんなで一息つけた僕らは、これからの事を話そうと燃え残った焚き火に木の枝を放り込もうとしたんだが、アウルさんが「明かりならばお任せください」といって、手を大きく開いて洞の天井へ差し伸べた。

すると、焚き火とは比べ物にならない明るい輝きがそこに発現した。

「コレが、私の能力の「光」ですわ」

言って、ニコリと笑う。

そしてこの程度ならば疲れることも無いとにこやかに続けた。

明かりが確保出来、皆がさて何から話し合おうかと思案するその前に、いきなり八馬が血の涙を流しそうな勢いで、僕を指差して力説を始めた。

「これからの行動については確かに重要で、ちゃんと話しとかなきゃ駄目だろうけども。」

それより先ず俺が聞きたいのは！何故コイツばかりって事だ！」

八馬に同意したのは約一名、山田君だけだったが、確かにこの世界に居た頃から許婚と決められていた姉さんや幼馴染の柊山は判らなくもないけれど、アウルさんに関しては腑に落ちない。

「そう言えばそうよね。何で知ってるわけ？元はこの世界の人間だ

つたからって言っても、仲間じゃなくって敵対した陣営じゃない。
そこからおかしいのよね」

柊山の指摘に皆一様に頷き、ほぼ同時にアウルさんへと視線を向けた。

それに戸惑いを浮かべたように彼女は首を巡らせ、ファナーさんと視線を合わせ頷いた。

「それについては私から」

そう前置きして、ファナーさんは長くなりますがと口を開いた。

彼女が語る内容に、僕は驚きを隠せなかった。

その昔、自分たちを生み、育んだ地を捨て、この世界にやってきた、
マラーイカたち。

彼らが長い旅の末にたどり着いたのは、広大で豊かな大地と、様々な顔を見せる様々な気候と、それにより育まれた様々な生物が、逞しく生きる、命に満ちた世界であった。

新天地にたどり着いたと、彼らは一様に思ったらしい。

しかしそこには既に、先住民である姉さんたち一族が暮らしていた。
その姿かたちはともかく、生活、風習、その他、とても彼らには相容れることの出来ないものであったため、別の地へと再び跳ぼうと

いう意見が、上層部の大勢を占めた。

しかし、現実的な問題に彼らは直面した。

非支配層の疲弊である。

幾度もの転移と、長い流浪の末辿り着いた、広大な、そして、多くの肥沃な大地。

それを目の当たりにした上で、再び当て所ない旅に出るとなれば、どのような混乱が巻き起こるであろうか。

異なる知的生命が存在するのであれば、この地を終の棲家とすべきではない、という意見が上層部では大勢を占めていたが、深謀遠慮を解さぬ人々には、この広い世界、彼らと交わらずに生きることなど造作もないという意見が多く、いつしかこの地こそが自分たちが導かれた理想郷なのだという世論に取って代わられた。

そうして最終的に、上層部もその意見に屈し、この地に足跡を記し始めたのである。

確かに当初は、はるかな距離という障壁が二つの部族を分かち、平和が続いていた。

しかし、新たにこの地の住民となったマラーイ力達による大地への搾取は、ゆつくりとではあるが、確実に彼らの住まう地域の荒廃を進ませていた。

やがて世代を重ね、始めに降り立った地を食いつくし、彼らは過去に禁忌として刻まれた不可侵の地を犯した。

豊かな土地を求め、自らの祖が不可侵と定めた地へと、姉さんの一族が暮らす大地へと、移動していったのだ、あの、巨大な、岩のよ
うな城と共に。

「あの巨岩の城は、私たちの祖先がこの地にやって来た際に用いて
いた、『船』であつたといいます」

その城の力が尽きようとしていたことも、彼らが住む土地を移ろう
とした、最大の原因の一つだったのだとか。

「アウリエル様は一族の次代を担うものとして、あの地に移動して
きた時に最初に大地を踏むものとして先遣を言い付かっておりまし
た。

そう、あの城 私共は【アル・クルアーン】と呼んでおります
が が。

今の位置に降りた時の事です。

今から…そう、あなた方の世界の時間で、十年ほどに前になりまし
ようか」

そこで一旦語るのを止めたファナーさんの後をついで、アウルさん
が僕の目を見て囁くように言った。

「城がこの地にやってきた日、私とお会いしたこと、覚えておりま
せんか？」

「僕と？」

言われて思わずきょとした表情をしてしまった。

10年前つて言うつと、僕は6歳くらいである。記憶があやふやなのは仕方ないと思うけど、正直覚えていない。

「なるほどの」

「何かなるほどのさ」

一人納得したような姉さんの声に、僕は意味を問いたしたが「内緒じゃ」と煙に巻かれてしまった。

「じゃが、その時に会っていたとして、宏一に拘るのは何故じゃ？」

「それは…」

目を伏せ、言葉を選ぶようにしてアウルさんはゆっくりと続けた。

「あの時、私はファナーに供をしてもらつ事で、初めてアル・クルアーンから出てても良いと言われたのです。

狭い城の中でしか羽ばたいたことのなかった私は、それがどのような意味を持つのかも知らずに、はしゃいでおりました。

それは、一族の代表として、神の示された地だという事を知らしめる為の、礎だったのです」

「よくわから無いけど、上からの命令で前人未踏の地に降りろ、つて言われて喜んで降りてちゃった、と」

「はい、夢にまで見た外の世界ですから。

私、戯れのあまりお供の者を振り切ってしまったのです」

いわゆる『領有』の宣言を行う尖兵だった訳か。

だけど、名目上のお飾りともいえる当時のアウルさんは、実務担当のお供の人を放り出して、遊び呆けてしまったということか。

「私はそれはもう、天にも昇るかのようにでしたわ。

ファナーが言うのも聞かずに、遠くまで思いっきり飛んでしまつて、一人きりになったのにも気がつかなかつたんですもの」

飛んで飛んで、飛びつかれて、気がつけば一人きり。

そうして眼下に湖が見えたので、咽喉を潤そうと降りてきた所に、僕が居たのか。

「はい。大きな湖から流れ出る、一本の水の束が私の目を引いたのです。

そこにふらふらと近寄っていった所で、辺りを見回している宏一様を見つけたのですわ。

驚きましたわ。翼を持たない方がいらっしゃるなんて。

それに、自分よりも大きな籠を、その背中に背負ってらっしゃるんですもの」

そう言われても、僕にはそんな記憶は無い。

無いはずなんだが、何かが僕に語りかけてくる。

理解できない言葉で、何度も何度も。

心拍が上がる。

汗が噴き出してくるのが判る。

覚えていないはずの何かが、思い出せと語りかけてくる。

紅い光と、抑揚の無い、聞き覚えの無いどこかの言葉と共に。

そして、僕の意識は。

跳躍^{とん}だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278p/>

掃天のストラトス

2011年10月8日04時55分発行